
悪人無双～高順伝～

シグマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪人無双〜高順伝〜

【Nコード】

N4548P

【作者名】

シグマ

【あらすじ】

董卓軍には一人の将がいた。「悪」を掲げて主のためにその身を汚す男。その名は高順。のちの世で「稀代の大悪人」「反英雄」とされた男の物語が始まる。ハーレムはありません。主人公は手段を選ばないので最強ではないですが、呂布並みの実力を発揮します。ついでに、立ち位置の関係上、原作キャラANCHIが含まれる場合があるので注意してください。（12月25日、タイトル変更しました。3月9日におまけを書きました。3月10日華雄ルートを書き始めました。抜けていた話に気づいたため投稿しました。

ブローグ

「高順様、兵の準備は整いました」

群青色の軽鎧を纏った兵が膝まずき、眼前に仁王立ちをしている同じく群青色の鎧をまとって仁王立ちをしている男に報告をする。

「分かった。隊員全員に合図と共に出ると伝える」

「ハッ！」

ここは？水関。鎧の男高順は鞘に収まっている倭刀を腰にさすと倒していた自らの軍旗を？水関の眼前にいる反董卓連合軍に見えるように大きく掲げた。

「我が名は高順！ 我らは悪をもって善を成す！ さあ、我らという「悪」を打ち倒し、己の善を証明してみせろ！ 正義が勝つのではない！ 勝ったものが正義だ！」

董卓軍が将高順。「悪」の文字を掲げ自らを「悪」とし、主のためにその身を闇に沈める男。主の善性を肯定するために自らを「悪」

とする者。

「高順様！ 華雄將軍が出撃しました！」

「なら、こちらもある。遅れるな」

後の世で「悪」を一身に背負う「稀代の悪人」にして、主の善性を肯定する「反英雄」と称された男の物語が始まる。

プロローグ（後書き）

さて、どうなることか……。

第1話 すべての始まり（前書き）

時間が過去に戻ります。

第1話 すべての始まり

始まりは北のほうのそれなりに裕福な村だった。

「高順」。早く、早く！」

子供にせかされて付いていく黒髪のちょうど青年に入りにかけている少年は高順という。優しい風貌でこのまま成長すれば「紅顔の美少年」という言葉が当てはまる可能性がある少年。

「落ち着けて。急がんでも飯は逃げんぞ？　まあ、喰われてなくなるかもしれないが」

その日は、村でのちょっとした祭りの日だった。高順はまだ若く少年と言える年齢だったが村の警備隊で「最強」と呼ばれるほどの力を持っていた。

「それじゃあ、今季の豊穰を感謝して——」

村長がそう言って酒を掲げようとした瞬間に村長の首に矢が突き立った。

「何！？ まさか、賊か！？」

大人の一人がそう叫んだ瞬間に雄叫びと共に賊と思わしき男たちが村に入り込んできた。

「人間は全員、殺せ！ 今は、食料を奪うのが先だ！」

その声と共に盗賊たちは村人を次々と斬り殺していき、数人我にかえた村人が応戦しようと武器を取りに戻ろうとするが次々に殺されていく。

「クソがあ！」

高順はなんとか盗賊の一人から剣を奪い、戦っていたが多勢に無勢。徐々に囲まれて身動きが取れなくなってしまった。

「ほう？ なかなか強いな。お前ら、あのガキは生きて捕らえろ。多少の怪我は構わんが、後に響きそうな怪我は付けるな」

「了解」

全身に包帯をまいた盗賊の頭領は、部下に高順の捕縛を命じた。そして、まもなく高順は盗賊に捕らえられ、目の前で自分が生まれた村が燃えるのを見せつけられた。

「よお？ 元気か？ 餓鬼」

「なんなんだよ。お前らは…」

高順は縄で縛られることもなく、盗賊の頭領の目の前に座らされている。

「俺は…まあ、黒^ぐという。ちなみに、本名でもない。ところで、餓鬼。お前はこの世界をどう思う？」

黒^ぐと名乗った包帯男は喉を鳴らしながら高順に目を向ける。高順はその目を見て息を飲んだ。黒の目には獣のような獰猛な光だけではなく、まるで王を想わせるような威圧と知性があった。

「俺の持論は「弱肉強食」だ。いくら、漢王室が頑張ろうともすでに弱者。いずれ、強者に喰われる」

「それが……俺の村を襲ったこととなんの関わりがある！」

「クツクツ。簡単だ。お前らは「弱者」だったから「強者」である俺たちに殺された。ただそれだけのこと」

黒は高順の目の前に立ち、絶句している高順を見下ろして晒う。

「いいか？ 所詮この世は弱肉強食。正義が勝つんじゃない、勝つたほうが正義なんだよ」

そして、黒は高順に「悪」を説きはじめた。

曰く。お前は、自分たちに負けたから「弱者」である。

曰く、自分たちは「悪」を掲げて好きに生きると。

曰く、高順に興味があったから捕らえたに過ぎない。死にたくなけ

れば必死であがけと。

曰く、村人の仇を取りたいなら「強者」になって自分たちを「弱者」にしてみると。

黒はそう告げると高順を放ってその場を離れた。残された高順は、ただ唇を噛み締めて肩を震わせていた。

「必ず殺してやる……皆の仇を……」

第1話 すべての始まり（後書き）

現在高順の年齢は、大体18、9です。原作開始時は、華雄、黄蓋、黄忠、嚴顏より少し下です。

盗賊の首領の黒は外見は志々雄です。かと言って紅蓮腕は放てません。

第2話 高順の思想

高順が黒の率いる盗賊集団で足掻いて十数年がたった。今まで、「強者」となるために黒の元で様々な事を行って来た。時に、村を襲撃し、時に同じような盗賊集団を殺したりしており、はからずも実力はどんどん付いていき今では黒の次に強い存在と盗賊団内でも認識されていた。

成長に伴い、高順は様々な変化を遂げた。かつての優しげな風貌は最早陰も形もなく纏う雰囲気は幽鬼のよう。まだ20に成ったばかりだというのに髪には白色が混ざっており、顔もどこか老人のように疲れはてていた。

「ほらよ。今日からお前の得物だ。銘は「散華^{さんげ}」。好きに使うといい」

黒から渡されたのは、ボロボロの布で鞘を巻かれた一振りの倭刀だった。そして、その倭刀は黒の得物だったはず。

「何故、これを私に渡す？」

一人称もすでに代わっており、口数も少なくなっていた。そして、

黒から渡された倭刀『散華』を受け取り、今までは拾った剣を使用していたため自分専用の武器を手に入れて嬉しい反面、自分に力を与える黒への不信感を拭うことはできなかった。

「別に意味はない。言っただけだ。お前はまだ「弱者」、俺が「強者」だ。その序列はまだ変わっていない」

高順が黒のもとで生きてきて分かったことがある。この男は、「強者」には弱者を好きにする権利がある」という考えのもと生きている。そのため、この行動も自分の考えに基づいているのだろう。

再び数年の時がたった。

「分からんな。あの男はどうしたいんだ？　そして、私はどうすればいい？」

高順は今日は一人で敵対する盗賊集団の討伐に来ていた。本来ならやる必要がないのだが、以前からちょっかいを出してきていたのでこの際に殺しておくと黒から命令が来たのだ。

「復讐……そのために今まで足掻いてきた。だが……あの男に恩を

感じているのも事実」

敵の根城で全ての盗賊を惨殺して、周りに死体が散乱している中で高順は思う。最初は復讐のために力をつけてきた。しかし、今では昔のように復讐をするという気にはなれない。

「「所詮この世は弱肉強食」か。真理なのだろうが……私は納得できません」

そう言つて高順は自嘲の笑みを浮かべる。自分が黒の思想に染まっている事に気づいたからだ。だが、黒の思想に染まってきたているが、自分の村を焼き討ちされた経験からか、何もしない民を巻き込むのは気が引ける。

だが、手段を選べば「弱者」はどんどん増えていく。ならば、手段を選ばなければいい。

「……そうだ。漢王室を再び「強者」とすれば「弱者」の安全は保証される」

無論、完全に保証はされないだろうが、今程盗賊たちに怯えなくてすむ。

「ならば…私の進む道は――」

高順はどこか憑き物が落ちたように晴れやかな顔をして盗賊の根城を後にした。だが、その顔には狂気の笑があつた。

「よお…高順か。全員殺したんだろう？」

「ああ。黒……貴方には感謝している。おかげで私は「強者」になることができたし、私なりの考えを持つことができた」

高順は根城に戻った後、そのまま仲間たちを殺し始めた。無論、抵抗されたがこの集団で？2の実力を持つ高順にとってはさしたる障害でもなかった。そして、残るは頭領である黒のみ。しかし、黒はまるでこのことを予期していたかのように平然としている。

「クックック。お前もいい感じに狂っているじゃないか。いいねえ……やっぱりお前を拾ったのは正解だった」

「ああ。狂っているだろう。仮にも、十数年一緒にいた『仲間』を皆殺しにしたんだ。だが、それでも私は私なりの「悪」を掲げる。その覚悟のために殺させてもらった」

「別に構わんぞ。あいつらは俺についてきて「強者」として「弱者」を踏みにじつてきた」

黒は部下が殺されたというのに気にすることはなく酒を飲み始める。その豪胆さに高順は内心畏敬の念を注いでいた。

「「強者」は「弱者」を好きにできる。その代わりに「より強者」に踏みにじられる義務を負う。それが分かん奴らでもあるまい」

「私は、「弱者」を守るために「強者」を作る。そのために、お前を殺す」

「いいぞ。やればいい。お前は、俺のように好きに生きればいい。だが、分かっているか？ その生き方は今ののように身内から殺される可能性もあるぞ？」

「覚悟のうえだ。それに、私はあなたの「弱肉強食」だけを掲げることはしない。私は「悪を持って善を成す」という思想も掲げる」

「……なるほど。お前の考えが読めた。お前は、仕える主の善性を肯定するために「悪」をするんだな？」

高順は内心、黒の読みに驚いていた。それは、正しく自分が考えていたこれからの行動だったからだ。

「いいじゃないか。実に面白そうだ。残念なのはそれに参加できないことだな。まあいい。それより、俺を殺した後に後ろにある箱の中身をくれてやる。その箱の中には俺が持てる限りの「財」がある。好きに使いえ」

「……ありがとうございます。では――」

「クツクツ。まあ、お前がどうなるか……空の上から見させてもらうか。最後に、お前は真名がなかったな。俺の『黒』をやる。『高順』をやめなければならぬときに使いえ」

「重ね重ね「それともう一つ。恐らく、大陸の何処かに娘がいる。まあ、見つけたら父親が死んだことを伝えておいてくれ」御意。し

て、名前は」

「賈？文和。真名は詠だ。ま、会うことがあればいい」

「委細承知」

その言葉を聞いた後に高順は黒に向かい散華を振り下ろし、その生命を絶った。

「……恐らく、貴方に私は一生勝てない」

黒を殺したが、「勝った」とは到底思えなかった。言ってしまうば勝ち逃げ。そして、箱の中には、黒が記したと思わしき様々な戦術や武装の資料、さらには『黒色火薬』と書かれている粉とその生成方法が書かれていた紙が置かれていた。それらは、あまり学がない高順からしてもありえない知識。例えるなら天の知識と分かるものだった。

「……この人は一体何者なんだ？」

すでに事切れた黒の死体を見ながら、高順は呟いた。

第2話 高順の思想（後書き）

黒は多分、これから何らかの形で出てきます。そして、黒の正体もいずれ分かっていくはず。

次回は、再び時代が飛んで黄巾の乱辺りです。要するに、董卓軍入り。

設定 **12月27日、設定変更（前書き）**

設定です。

12月27日にキャラの容姿を変更しました。

設定 12月27日、設定変更

名前：高順

年齢：20代後半。黄忠たちのようなアダルト組より、1、2歳年下と暫定。

性格：基本的に戦闘時の名乗り以外は声をあげることとは少なく、寡黙な方。そのため、いろいろな意味で誤解されやすい

容姿：イメージ的には「鬼哭街」の孔濤羅コン・タオロ↓最近、言峰化してきたようなので、こっちに変更。

武器：黒から渡された倭刀「散華」

戦闘能力：単純な戦闘力は夏侯惇と同等。ただ、手段を選ばなければ呂布並。

備考：元々は、そこそこ豊かな村の出身。ある時、村が盗賊に襲撃されたときに、盗賊のとりようである黒につかまりそのまま連れていかれるが、その中で「この世は弱肉強食」という黒の思想に染まり、その思想を「自らが悪を成すことにより、仕える主の善性を肯定する」という「悪をもって善を成す」思想へと変えた。高順に

とつての思想は以下のとおり。

弱肉強食：強者は弱者を踏みにじる権利を持っており、強者はより強者に踏みにじられる義務を負う。この理は絶対不変のもので例え皇帝でも逆らうことはできない。

悪をもって善を成す：仕える主の善性を肯定するために、その過程で起こる「非道・非情・外道」な事を全て引き受けること。恐らく、狂っていないければ実行することは不可。

高順はこの二つの思想を掲げて生きて行くことになる。

名前：黒

年齢：不詳。恐らく、30代後半？

性格：盗賊の頭領だけあって残忍ではあるが、言葉の端々から盗賊の頭領にはそぐわない知性を感じさせる。

容姿：全身に酷いやけどを負っているようで全身に包帯を巻いている。

武器：倭刀「散華」。後に高順に譲った。

戦闘能力：高順より高い。恐らく、死ななければこの小説での最強キャラになっていた。

備考：出生からなにも謎の男。この時代ではありえないはずの黒色火薬の生成方法や様々な戦術や武器・武装の資料を持っていた。また、どういう訳か賈？文和の父親である。

波才

年齢：高順と同年代

容姿：リリカルなのはのジェイル・スカリエッティのイメージで。

武器：まあ……適当に暗器とか？

戦闘能力：まあ……一般兵よりは強い

備考：高順の第一の部下。戦闘もできるが、どちらかというと周瑜などのように前線指揮官のような役割が多い。高順から全幅の信頼を寄せられており、黒色火薬の生成などを任されている。

第3話 出会い（前書き）

原作というか、反董卓連合編まではかなり無理矢理になるかもしれません。

第3話 出会い

「……アレか？」

「はい。攻めているのが董卓軍です。また、攻められているのは黄巾党と思われれます」

高順が黒を殺してから再び数年の時が流れた。その中で、高順は黒と同じように自分の手勢を率いていた。大半は、元々諸侯の兵だったが事情により流れ者になった者や何かしらの犯罪を犯し、街や村に居られなくなった者たち。

「全員に伝える……董卓軍を援護する」

「了解です」

そして、高順の「悪をもって善を成す」という考えに共感し、いつしか高順のためならば死ぬことすら厭わない集団となっていた。

「黄巾党、か。元々は弱者なのだろうが、お前らはすでに「強者」として「弱者」を踏みにじった。ならば、「弱肉強食」の理に従い

お前らを喰う」

高順は「弱肉強食」を忘れては居ない。黒の掲げた言葉に染まったのは事実だったから。だから、高順は「弱肉強食」と「悪をもって善を成す」という二つの考えを掲げている。

「行くぞ……」

そして、その理に従い高順は戦闘を開始した。

「さすがに数が多い！ 張遼！」

「わーっとるわ！ 華雄こそ前見んかい！」

黄巾党と戦っていた董卓軍の将である華雄と張遼は予想よりも多かった黄巾党に苦戦していた。だが、横から「悪」の旗を掲げた一団が黄巾党に攻撃を仕掛けたため、形勢は一気に董卓軍に傾いた。

「ってちよい待ち！　なんやあいつら！」

張遼は横から入り込んできた一団に驚き、動きを止めてしまった。だが、そうしてしまうほど異様な集団なのだ。戦闘方法は、最早なんでもあり。土を蹴り上げて目潰しをした後に二人がかりで殺すという、戦の作法などあったものではない。隣にいる華雄も動きを止めている。

「……今まで好きに生きてきたんだ……こうなることも分かっていただろう？」

そして、そのような中で目をひくのが倭刀を持って無表情に黄巾党を殺していく一人の男。まるで幽鬼のように薄い気配はこの戦場では正しく死神のように見えた。

「……やれ」

その言葉が聞こえたのか数人の男が袋から黒い粉をばら蒔いてその場を離れた。幽鬼はその黒い粉に向かい倭刀を振り下ろした。

——チンッ——

そんな甲高い音が響いた瞬間に、爆発が起こった。その爆発は爆炎となった後、黒煙となり幽鬼ごと黄巾党を包みこんだ。

「え？」

華雄が珍しくそんな声を漏らした。それは張遼も同じ。二人は知らない。何も無いところから爆炎を生み出す粉なんて。そして、黒煙の中から現れた幽鬼など。

「董卓軍だな？ 悪いが、そちらの責任者と話したい」

二人は、本能的にこの男に危機感を抱いた。この男が居れば、主である董卓に危害が及ぶと。だが、その思いは届かなかった。

「ボクがこの軍の責任者よ」

自分たちの間を通り過ぎ、幽鬼の前に出ていったのはこの軍の責任者である賈？文和だった。

第3話 出会い（後書き）

と、言う事で董卓軍と接触しました。

ちなみに、高順が爆風に耐えられたのはマントのようなもので熱風のみを防御したからです。

さて、最後でヒロイン登場…ただ、キャラが変わっているかもしれないので注意してください。

感想待っています！

外伝 或る男の日記（前書き）

この小説の謎キャラである黒の正体が分かるものです。まあ、若干のネタバレを含むかもしれないので注意してください。

外伝 或る男の日記

さて、この日記を観ている人はいるのだろうか？ まあ、居なくても構わない。俺、いや私は前世の記憶を持つ存在だ。転生者。この言葉が分かる者がいるのならこう言えいいだろう。だが、今の私は「黒^{へい}」だ。

別に、神様が現れたわけではない。ただ、寿命で死んだらココにいたという形だ。最初は嬉しかった。時代を考えると『三國志』の時代に近かったからな。頑張れば、三國志の武將たちに会えると思っていた。自分の持つ知識を使って、大陸を統一するのも面白そうだと思った。

だが、それは叶わなかった。いや、そんなことはどうでも良くなったと言ったほうがいい。所詮は、右も左も分らない場所。私が行き倒れているときにある女性と出会った。その時に、大陸を統一することなどどうでもいい、この女性と生きていきたいと思った。彼女に拾われてからは、彼女の村で農業をしながら働いていた。一応、前世は農業大学を卒業していたために農業自体は楽だった。そして、彼女と心を通わせて結婚した。

「貴方……この子の真名は「詠」にしましょう！」

「ああ」

私と彼女の結婚は周囲にも祝福された。素性もわからない私を彼女は引つ張っていつてくれた。そして、子ができた。彼女の「詠歌」という真名から一文字取り「詠」と名付けた娘は奇しくも「賈？文和」だった。だが、それでも娘には代わりはなかった。

「貴方、詠はどんな子になるかしら？」

「どう育ってもいい。だが、のびのびと成長してもらいたいな。そして、「娘はお前にやらん！」というのを言ってみたい」

「もう。そう言っつて、詠が連れてきた男なら認めるくせに」

「当たり前だ。詠は私たちの娘だ。馬鹿な男に引つかかるわけもない」

そんなことをして幸せだった。これから黄巾の乱などが起こるが、それでも詠なら生き延びることができると思っていた。そして、詠歌と共に詠の花嫁衣裳を見ることができると思っていた。だが、その望みは打ち砕かれた。それは、ちょうど詠が生まれてすぐの頃だった。

「黒さん！ 村が野盗に襲われた！」

ちょうど、狩りから戻ってきた時に村から煙が上がっているのが分かり、すぐさま村に戻ると野盗に襲われており、家々に火が放たれていた。

「分かっている！ すぐさま警備隊を出して「危ない！」なに！？」

その言葉と共に私たちの頭上に火が落ちてきた。その瞬間、私の意識は途絶えた。

「詠歌さんと詠ちゃんは西涼の方に逃げ延びたそうだ」

「そうか……」

目を覚ましたのは、それから一週間ほど経った時だった。どうやら、村の生き残りは目の前の男と私たち一家だけらしい。かくいう私も全身に酷いやけどを負い、全身包帯で隠さなければならぬほどのもの。

「西涼の方に行きな。あの二人にはアンタが必要なんだ」

「……………ああ」

その言葉を聞き、西涼へと向かったのだがその途中で様々な村を観てきた。そしてそれらに共通しているのは「弱者」が虐げられていること。そして、例にもれず私も「弱者」だった。しかし、ある時死にかけていた野盗を殺したとき、何かが壊れた音がした。

「……………所詮この世は弱肉強食」

私が前世で読んでいた漫画のキャラクターのセリフが口から出た。私たちは弱かったから村を滅ぼされた。この男は弱ったから私に殺された。そう考えると何かが沸き上がってきた。

「強い者が勝つ。強い者が正義……………それが世界の真理」

そう思うと笑いが止まらなかった。どうやら、平和な日本にいた私の精神は詠歌や詠という支えがない状況ではたやすく折れてしまったようだ。

「ならば……………全て喰らってやる」

西涼へと向かっていた足を止め、殺した野盗から武器を奪った。壊れてしまった『私』は『俺』となった。

それから、どれくらいの時がたっただろうか。盗賊集団を率いて自らの掲げる「弱肉強食」の信念のもと好き勝手に生きたある日、一人の男を見つけた。

「なんで……お前らは」

名前は高順と言っていた。まだ、若いながらもどこか惹かれる目をしていた。そして、高順を見た瞬間に、詠のことを思い出した。恐らく、詠歌と共に西涼の方で生きているのだろう。詠歌は、死亡したのかわからない私のことを思っているのだろうか？ そのような事を考えていた。

私の目から見て高順はすさまじい勢いで成長していった。私も、実践で鍛えてきた技を全て使わなければ勝てないほどになっていた。それらも私が鍛えたようなもの。恐らく私は高順を息子としてみていたのだろう。だから、盗賊集団を組織する前に崑崙山で手に入れ、自分の愛刀として使っていた「散華」を与えたのだろう。

「高順といえば、呂布の配下だったな。ならば、董卓につく」

そして、私は農業大学を卒業した後に自衛隊というこの世界でいう所の軍隊に入ったというなんとも不思議な経歴をもつ。とにかく、自らが持つ様々な戦術や武装、趣味から調べた「黒色火薬」の生成

法を記して、それを高順に渡すために箱の中に隠した。

「クツクツク。俺にもまだ「人」が残っていたか」

「弱肉強食」を掲げて「弱者」を虐げてきた私に「人」が残っていたことに驚きつつも高順に娘を守らせるためにそれを飲み込む。

「さて……高順。お前はどうか動く？」

恐らく、後数年のうちに答えが見つかるだろう。その時、私は死ぬだろう。だが、覚悟はしていない。好き勝手に生きた結果ならば受け入れる。

「せめて、詠歌たちに会いたかったな」

だが、それも叶わないだろう。死後の世界で会えるはずもない。

「未練だな。まあいい。「弱肉強食」……この理に殉じよう」

さあ、高順。私を殺しに来い。そして、お前の思うように生きていけばいい。お前のような男にはその権利がある。これこそ正しく「弱肉強食」

外伝 或る男の日記（後書き）

ということ、黒は転生者でした。いや、高順に黒色火薬を使わせるためにはこうするしかなかったのです。一刀が来てからじゃ遅いし、ね。

ちなみに、一刀ですが蜀に行く予定です。

第4話 董卓軍への参入

「つまり、アンタはボクたちの軍に入りたいの？」

「ああ。今までは傭兵のように動いてきたが、黄巾党のせいで身動きが取れなくなってきたからな。この際にどこかの諸侯に身を寄せたいと思っていた」

高順は、董卓軍の将である賈？と天幕内で交渉をしていた。理由は、発言した通りのこと。そして、自分の目的のためにもそろそろ仕える主を決めなければならないと思っていた。

漢王室はダメだ。旅をしている中でそう思った。官軍はすでに腐敗しておりその権威は形骸化している。そして、考えたのが最近力を付けているという董卓軍。まあ、黒の娘である賈？がいると聞いたから選んだという理由もあるが。

「それで？ アンタの目的は何よ？」

「「悪をもって善を成す」。私は仕えるべき主のために「悪」をなす」

「……つまり、例えるならボクの命令ならば暗殺もするってこと？」

「ああ」

賈？は「狂っている」と呟いた。高順はそれを聞いて小さく笑った。確かに、望んで汚れ仕事を行うなど正気の沙汰ではない。

「……一つ聞きたいわ。アンタがボクらに反旗を翻す可能性は？」

「お前たちが前を見続ける限り。例え、敗北しても前を見続けるならば」

口ではそういうが、別に高順は董卓たちに反旗を翻すつもりはない。それに、反旗を翻すのは『全てが終わってから』だ。

「それより、賈？殿。貴殿に母親はいるか？」

「……いるわよ。今は董卓の領地で鬪病生活よ。住んでいた村を盗賊に襲われてまだ赤子だったボクを守るために西涼まで逃げて……そこで、董卓の母親に助けられたの。でも、ボクを育てるために無茶をして今はもう一人で歩けないほどよ」

賈？はそう言つと悔しそうな表情を浮かべた。自分を育てるために無茶をした母親。そんな母親に何も出来ない自分が悔しいのだ。

「……父親は？」

「……母様の話では村が襲われたときに行方不明になったと聞いたわ。それからは、知らない」

高順はこの時、黒の事を話すべきか迷った。別に、黒を殺したため賈？に恨まれることを避けているのではない。体が弱っているという母親に黒が死んだことを伝えればどうなるか分からないからだ。だが、言わなければならないだろう。そう考え口を開いた。

「お前の父親は黒、だろう？」

「……なんで知っているの！？ 父様を知っているの！？」

「……お前の母親の前で話したほうがいいだろう」

高順はそう告げて天幕を出て行つた。

「……高順やったか？」

「張遼殿と華雄殿か。何か？」

「はっきり言う。お前は何者だ？」

高順は張遼と華雄の尋問を受けていた。尋問といつても、別に敵でもないし先程の戦では助けられたため見極めといえいいのだろうか？

「私が何者か…聞いてどうする？」

「貴様の部下の戦い方、お前の雰囲気は異常だ！ 貴様は董卓様に仕えるようだが、貴様のような奴が居れば董卓様にいらぬ疑惑がかかる！」

本来の二人ならばここまでではなかっただろうが、高順の戦場で見せた行動や幽鬼のような雰囲気ので「危険人物」という先入観が植えつけられてしまった。さらに、高順が疑惑に沈黙を貫いているのも問題があった。

「討ちたければ討てばいい」

そして、高順は「目的」のために恨まれることを望んでいる。だからこそ否定をしない。

「波才、私たちは董卓軍につくぞ」

「了解です」

高順は部下である波才にそう告げた。

波才。本来は黄巾党の将なのだが、ある時高順と出会い張角たちな
ど比ではないほどのカリスマを放つ高順に心酔し、第1の部下とな
った。もちろん、高順が放つカリスマとは波才のように『ある程度
狂っている』者にしか通じない。

「それと、火薬でしたか？　その生成の方ですがやはり材料が少
ないですね。筆頭が言っているとおり、アレは危険過ぎる。生成方
法は自分と筆頭のみで抑えておいたほうがいいでしょう」

そして、波才は優秀だった。高順が黒色火薬の危険性に気づいてい
たと同時にこの男も気づいていた。そして、今では高順が誰よりも
信頼する右腕となっていた。

「ああ。黒が残した物は全て私とお前のみで管理しなければならな
い。アレを下手にばらせばまずいことになる」

「御意」

二人は、黒が残した物を全て管理していた。波才はなかなか優秀
だったため、黒の残した物がどれほどの危険物かを察知することが
できた。

「さて……行くぞ。我らの『悪』を」

「御意。どこまでもお供いたします」

第4話 董卓軍への参入（後書き）

オリキャラ波才登場。別に、こいつを選んだのは適當です。でも、實際波才はそこその実力を持っていると思うんですね。

張遼と華雄が高順を危険視しているのは、その雰囲気とかです。いや、第一印象って大事ですね（待て

感想とかいただければ作者は喜びます

第5話 一蓮托生

「母様。この男は高順っていつて、月…董卓様の部下になるかもしれない男。それで父様のことを知っている男なの」

「黒を…あの人を？」

高順は張遼と華雄の不信感付きという物があつたが、無事董卓軍に参入することができた。そして、董卓軍が現在本拠としている涼州へと連れてこられ、現在賈？の母親の元へと来ていた。

「いかにも。だが、最初に言わせてもらう。黒は私が殺した」

高順は何事でもないようにそう告げた。そして、絶句している二人に自分が知る限りの黒という男を話し始めた。

「そして、あの男の「弱肉強食の理」は私の中にある」

黒の思想は形が変わってはいるが、高順に受け継がれている。形が変わっているといったが、本質は変わっていない。高順にとって「悪をもって善を成す」という思想を生み出したのは黒の「弱肉強食」

という思想だから。

「そう……あの人は……」

母親は黒の最期を聞いて目を伏せた。多分、黒は耐えられなかったのだ。自分には賈？という娘がいたからなんとかあった。だが、黒には頼れるものがなかった。自分たちが逃げた西涼へと向かったのだらうが、その旅の中で様々なものを見てしまった。

「馬鹿な人……私を置いて行くなんて……」

母親は声を震わせていた。賈？はそんな母親の姿を見て、高順を連れだした。そして、着いた先は中庭の物陰。

「別に、アンタが父様を殺したことは何も言わないわ。父様が納得していたのならボクがなにか言えるはずもないから」

賈？は後ろにいる高順を見ないで言葉を紡ぐ。声が震えているのは父親が死んでいると聞かされたからなのか。それとも、伴侶を亡くした母親への思いか。

「「所詮この世は弱肉強食」、か。確かに真理よ。だから、父様と母様は離れ離れになって父様は「悪」になって、母様は悲しんでい

る」

「ならばどうする？」

「ボクはこれでも董卓軍の軍師でそれなりの知恵は持っているつもり。多分、だけど母様は長くはない。今までは父様の安否を知るために必死に生きていたようだし」

どこまでも淡々と話す賈？。しかし、高順は気づいていた。賈？の声や肩が震えていることに。軍師は時として冷徹な判断を下さなければならぬと聞く。ならば、今は溢れ出る感情を抑えているのだろう。

「そうになると、ボクには月しか居なくなる。月は……というか、董卓軍に宮中に来るように書状が来ているの。そうになると、今まで以上に危険な目に遭うかもしれない。だからボクは月を守るために様々な手段を取らなければならない」

「……で？」

「高順。アンタ「悪をもって善を成す」って言っていたわね。要するに、仕える主の善性を肯定するためにアンタが「悪」をなす。言い方を変えれば主を守るために汚れ仕事をするんでしょ？」

「ああ」

高順にとってそれは望むところ。

仕える主の善性を肯定する。これだけ見ればただの信奉者にしか見えないが、実際は違う。善性は言ってしまうえば、主の行動方針にも繋がる。そして、字こそ違うが善政にも通じる。それは、高順にとっての望みである「絶対弱者の守護」でもある。

「弱肉強食」を掲げておきながら「弱者」を守る。ひどく矛盾している思想。だが、高順にとって矛盾はしていない。守るべき「弱者」とは民であり、盗賊や兵士ではないからだ。

「ボクは月の安全のために手段は選ばない。母様が居なくなったらボクには月しか居なくなるから……だから、高順。アンタの力……ボクに貸しなさい。アンタの望みも私は叶える。だから、ボクに従いなさい」

「……いいだろう。私の力……存分に使え。手を汚すのは私だ。お前はただ、『考えついたことをつぶやけばいい』。それで、全てが丸く収まる」

高順はこちらを振り向かない。にそう告げる。高順自身は別に賣

？を巻き込みたくないなどとは思っていない。「最終目的」のためにできるだけ味方は減らしておきたいのだ。

「ふん。アンタが何考えているかは分からないけど、自分だけ安全なところっていうのは嫌いな。アンタとボクはこれから一蓮托生よ。いい？」

振り向いた賈？の顔はしっかりとした信念があつた。

「……分かった。ならば、私の力存分に使え」

この時、二人の道は交わった。そして、二人はまだ互いの存在を「目的のために利用しあう」と認識していた。しかし、それは後に変わることになる。

第5話 一蓮托生（後書き）

とりあえず、現時点での二人の関係は「利用しあう関係」です。これが、どうやって恋愛に行くのか……ただ、断言しておく甘い感じにはならないと思います。ついでにいうと、結末をハッピーにしようかバッドにしようか考えている状況だったり……でも、高順のキャラからしてハッピーエンドは……ううむ。

ちなみに、一刀は魏の予定です。ただ、原作のように種馬ぽくない。むしろ、華琳一筋？な感じです。

感想……欲しいなあ（チラ

第6話 嵐

「波才。宮中の様子は？」

「ま、言わずもがな。保身しか考えていない連中ばかりです。特に、十常侍には注意をしておいたほうがいいでしょう」

「とりあえずは、黄巾党よりも十常侍を警戒しておいたほうがいいのか」

高順が董卓の元に来て数カ月がたった。その間に高順がしたことは、賈？を除く董卓軍の将と必要以上の会話をせずに、賈？の命令で十常侍などの監視、そして様々な所で暗殺などを行っていた。そのため高順隊は董卓軍の中でも鼻つまみ者となっていた。この評価は戦闘において、手段を選ばないことなどからもきている。

「はい。それと、董卓様が呼んでいました。恐らく、黄巾党絡みかと」

「分かった。火薬の生成を頼む」

「了解です」

「高順だ、入るぞ」

玉座の間にはいる前にその声をかけ扉を開ける。そして、高順に浴びせられたのは嫌悪や敵意の視線。それを放っていないのは、董卓・賈？・呂布のみ。その他の将は全員高順に厳しい視線を送っていた。

そもそも、戦い方などで嫌悪されるのはありえない。確かに、戦にも礼法はあるがいくら手段を選ばないとはいえ、ここまで敵意を向けられるのはありえない。

では、何故高順はそのような視線を向けられているのか？ それは、高順が兵の降伏を認めないところにある。華雄たちはできるだけ自軍の被害を抑えたいのか、それとも無駄な殺生はしたくないのか、降伏してきた大抵は認めている。しかし、高順はそれを一切認めない。

『今まで好きに生きていた。ならば、こうなることも覚悟の上だろう？ ほら、弱肉強食って言うじゃないか』

さらには、涼州にいた頃には反乱を起こした諸侯を騙し討ちで殺している。それについての弁明や説明はなし。そのようなところも嫌われる原因なのだろうが、高順は気にしたようでもなくただ淡々と仕事をこなすだけ。今では、好意的に接しているのは賈？のみ。董卓と呂布はそこまで嫌ってはいない。だが、董卓は「少し怖い人」呂布は「よく分からない」という評価を付けているため、決して安心ではない。

「高順。アンタに任務よ。アンタは、呂布と共に黄巾党の討伐に行きなさい。そこには恐らく現時点での有力諸侯が揃っているから、董卓軍の力とアンタの力を知らしめなさい」

呂布をつけたのは、恐らく武官の中では高順に比較的優しいからだろ。すでに張遼と華雄とは必要以上の会話をしていない。

「それと、今回はいろいろと込み入った事情があるから、投降してきた兵は殺さないようにしなさい」

「了解した。では、これより任務につく」

高順は返事をする、踵を返して玉座の間から出て行った。何時までも、自分のような存在が居ればいらぬ軋轢を生むと知っているから。

「波才。出撃するぞ」

「御意。火薬の方ですが、とりあえず五回分生成できました」

高順は、波才の部屋へと向かい波才に出撃を告げた。波才の部屋は一種の研究室のようなものになっており、黒色火薬の生成もここで行われていた。ただ、いろいろな意味で危険な場所にはかわりないので、もしもの時は部屋中に仕込んだ火薬で黒が残した資料を焼き払う準備はできている。

「さて……そろそろ大きな嵐がきそうだな」

高順の弦きに波才は何も言わずに頷いていた。

第6話 嵐（後書き）

高順はこれまでの生活が生活だったので、コミュニケーション能力はそこまで高くないです。さらに、自分は「悪」であるという覚悟があるので自分の行動に一切の後悔がないため、常に睨まれるという…。

次回は、黄巾党編ですけど高順の戦闘方法が分かるかも！

第7話 黄巾党と各諸侯―前編

「袁紹、袁術、公孫賛、孫策か。まあ、前三人は微妙ね。今注意すべきは、孫策、董卓ってところかしら？」

曹操は黄巾党の大規模討伐に参加している諸侯の中で将来自分の覇道を邪魔するであろう存在を考えていた。

「華琳様、董卓軍が来ました」

部下の兵の言葉を聞いて曹操は外をのぞきみた。そこにいたのは、天下無双と呼ばれる呂布とその横にいる軍師らしき少女、メガネをかけている少女、そして幽鬼のような雰囲気をもっている男、その後ろで目をつぶって控えている男。

「……あれは？」

「ハッ。董卓の名代として賣？殿。そして、その右から呂布殿、陳宮殿、高順殿、波才殿と」

「……そう」

曹操は兵の言葉に返事をした後、高順のことを考えていた。年は結構くっているが、それでも幽鬼のような雰囲気纏う人間など見たことがない。

「面白そうね。参加して正解だったわ。そう思うでしょう？ 一刀」

「まあね。しかし、高順か……」

曹操は実に面白そうに笑った。そして、その横にたっているこの時代にそぐわない服装の少年は顎に手を当てて何かを考えていた。

「高順、火薬はできるだけ使わないで」

「もしものための保険か？」

「ええ。手の内はできるだけ明かさないのは当然でしょう？」

賈？の言葉に高順は頷いた。まあ、確かに今の状況では無駄な敵を増やすだけなので高順も賛成した。それに、今回は今までのように黄巾党のほうが多いが、ほかの諸侯もいるためそこまで苦戦はしないと思っている。まあ、今までは500人ほどの人数で何千という黄巾党と戦っていたのだから。ちなみに、兵は基本的に華雄や張遼といった他の部隊からあぶれた嫌われ者などが集まっている状況。董卓軍に入る前からの部下はそのうちの100人ほど。

そして、その全ての兵は高順のカリスマ（悪）により心酔しており、元の部隊にいた時よりも実力は上がっている。そのお陰で、高順隊は500人という少なさが少数による奇襲や手段を選ばない戦闘方法で、図らずも董卓軍最強となっている。

ちなみに、呂布も最強であるが方向性が違う。アレは単独最強。

「まあいい。細かいことは任せる。私は兵の様子を見てくる」

「分かったわ」

高順は基本的に波才や部下を除く人間とは必要以上の会話をしない。壁を作っているように賈？は感じている。

「……必要以上にかかわらない……何を考えているの?」

別に嫌われるなら嫌われるなり、自分のような存在と友好を深めてもいいはずなのにそうしない。まるで、何かあっても楽に切り捨てられるようにしている。

「まあ、アイツの役割からすればそうなんだろうけど……」

高順には、張遼たち武官だけではなく董卓にすら知らせていない汚れ仕事をさせている。そのため、何かあれば賈?は董卓のために高順を切り捨てるという事を言っている。そして、高順もそれを承知している。

「わかんない……アイツは本当に何を考えているの? 今度聞いておいたほうがいいわね」

「波才。そろそろ出陣の合図が来るはずだ」

「すでに、兵は出せます」

「なら、最初の指揮は任せる。私は敵を萎縮させる」

そう言つて鞘に入っている倭刀を左手で持つと、銅鑼の音が響いたと同時に敵陣へとかけ出した。

「え？　ねえ、冥琳。あの敵陣に突っ込んでいつている将って誰？」

「あの格好は……恐らく董卓軍の高順だ。しかし、何を考えている？　一人が単独行動をしても所詮は黄巾党だから問題はないが……」

「な、何だ！？　アイツ死ぬ気か？」

「白蓮ちゃん！　あの人を助けないと！」

「……一刀。どう思う？」

「えっと……何も策を持たずに行くのはおかしいと思うから、何か考えがあるんじゃないかな？」

「……そうよね」

曹操は、隣に控えている天の御使い北郷一刀の意見を聞きながら薄く笑っていた。

「（さあ、董卓軍でも悪名高いと報告がある高順。貴方はどうするのかしら？）」

有力諸侯たちは一人敵陣へとかけ出した高順を見ながらそれぞれ違った印象をいだいていた。

「な、何だ！？ 一人で突っ込んできやがる？」

黄巾党の方も高順に驚いているが、一人ということもありすぐに殺せると踏んでいた。

「——え？」

いつの間にか、黄巾党の一人の胸には二振りの剣が刺さっていた。そして、高順はそのまま二振りの剣を上下にゆっくりとひらきはじめた。

「あ…………がぁ…………あぐぁっ…………」

「…………戦いとは残酷なものではなくてはな」

ゆっくりと二つに分かれていく仲間を見ながら黄巾党の兵は目の前の高順に恐怖を抱いた。ただでさえ、幽鬼のような雰囲気纏っている高順。そして、ゆっくりと拷問のように仲間を裂いていく行動のせいで、完全に死神のそれと思われた。

「（さぁ…………敵は萎縮したぞ？）」

高順は黄巾党が萎縮したのを察知すると、二振りの剣を放り投げ愛用の「散華」を抜き、呆然としている黄巾党の兵たちを次々と切り捨てていった。

第7話 黄巾党と各諸侯―前編（後書き）

まあ、最後のはある意味拷問です。あれをすることにより敵を萎縮させるというもの。でも、ヘタをすると仲間まで萎縮することもある。

ちなみに、高順が持つカリスマ（悪）は悪人予備軍や罪人、流浪人などに対して発動するスキル。ぶっちゃけ、劉備のカリスマと同類。引っかかる人間が違うだけ。

さて、もうすぐ反董卓連合編です。

第8話 黄巾党と各諸侯―後編

「なるほど。わざと残酷な殺し方をする事で敵を萎縮させたのね」

「確かに……有効かもね。現に黄巾党の動きは悪くなっているから」

曹操軍の陣地では曹操と北郷が二人で高順の戦略を見抜いていた。最も、評価しているのは曹操ぐらいなもので、北郷はその優しい性根から少し嫌悪しているようだ。

「（まあ、確かに華がないわね）」

曹操から言わせてもらえば、もう少し華が欲しい。アレだけの事を考え、実行出来るだけの胆力を持つものが自軍にいれば自らの霸道も現実に近い。いつか勧誘してみるのも面白いかもしれない。曹操は、そう思っていた。

だが、曹操は知らない。高順が何を持って行動しているのかを。忠義でも正義感でもない。むしろ、そのような眩しい物とは反対のも

のだということを。

「……斬」

高順はただ淡々と黄巾兵を斬り殺している。少し離れたところでは、いつの間にか夏侯惇や孫策といったその他の諸侯たちが戦っている。

「……やかましいな」

「……うん」

「呂布か」

ほとんどの兵が散り散りになり、戦闘も終息に向かっていったときに

呂布が話しかけてきた。高順は顔には出していないが、内心驚いていた。ここ最近自分に話しかけてくるのは波才か賈？のみだったから。

「高順の戦い方は無駄がない」

「……当たり前だ。一々無駄な動きをするほど優しくはない」

高順の戦い方は結構特徴的である。一切のムダがない。それだけを聞けばフェイントなどを混ぜないように思えるが、フェイントなどはかけることもできる。だが、それすらも必要としないほどに高順には『武器』がある。それが、高順の戦い方を『無駄がない』とされる所以。

「それに、高順の攻撃の始まりが読めない」

高順の最大の『武器』。それは『無拍子』と呼ばれるもの。かつて黒のもとで人を斬り殺していた際に偶然発見した技。

『無拍子』とは相手の呼吸を計り、それに合わせて動くことで『頭では相手の動きを見ることができるが、体を動かすことができない』という技と、一切の予備動作をせずに敵へ斬りかかる技の二つを指す。

二つとも高順が偶然発見した技。そのため、前者の『無拍子』は自由自在に使えるわけではないが後者の『無拍子』ならば『突き』のみであればすでに自在に使える。

「……お前らとは住んでいた世界が違ったからな」

高順が育ってきたのは「弱肉強食」を体現した世界。いくら呂布が強くとも、民が圧政に苦しんでいても「人の皮を被った獣たち」が蠢く「弱肉強食の世界」と比べると天国と地獄ほどの差がある。そのような世界で生き残っていたのだ、弱いはずがない。

「それより、報告があるだろう。お前が行け」

「ん」

結構感情的な陳宮は高順のことを毛嫌いしている。そのため、高順がいれば時間がかかると判断したため、呂布だけ先に行かせることにした。どうせ賈？への報告は洛陽に戻ってからできる。そう判断した高順は波才の元へと帰ろうと振り返るとそこには顔だけではないが知っている人間がいた。

曹操、夏侯惇、夏侯淵、そして顔は知らないが優男。

「貴方が高順？」

「……いかにも。それで？」

「貴様！ 華琳様にその口の聞き方は何だ！」

曹操に話しかけられた高順は返事をすることなく曹操を見定め始める。その行為に夏侯惇が憤るが、すぐに優男と夏侯淵に止められる。

「……私は曹操殿の臣下ではないのでな」

「ええ。夏侯惇のことは詫びておくわ」

まあ、確かに高順にあんまり非はない。そもそも、戦闘が終了したとはいえ未だ予断は許さない状況。そんな時に話しかけてきたのだから警戒するのも当然。曹操はそう考え謝っておくことにした。そして、本題を切り出す。

「ねえ。貴方、今の軍に満足している？」

要するにそれは勧誘。曹操自身、断られるのは覚悟している。要す

るにこれは「もし、何かあればここに来ればいいし、貴方が私に負ければ拾うことはするわよ?」という事を言っている。

「あなたのような使える人材は大陸を統一するという私の覇道に必要なのよ」

「……断らせてもらう」

まあ、分かりきっていたことなので別に腹も立っていないようで、夏侯淵に夏侯惇を抑えるように伝える。

「理由を聞いても?」

「別にたいしたことではない。それにその考えは個人的に気に入らない」

高順が曹操の誘いを断ったのは賈?の存在が大きかった。すでに高順の中では賈?の存在は大きくなっていった。ただ、それは恋愛感情ではない。一蓮托生という契約を交わした『同類』という感情である。そのため賈?の元を離れるという選択肢はない。そして、曹操の考えが気に入らないというのは――。

「覇道を行く者が大陸を統一するのではない。大陸を統一した者が

歩んだ道が霸道となる」

まあ、簡単にいえば高順の考え方が曹操とは違ったただけのこと。だが、曹操にとつては結構重要な言葉だった。取り様によつては曹操の信念を砕くようなものだからだ。

「……高順、か。貴方は私の障害になりそうね」

曹操は内心の激情を隠しながら微笑むが、目の前の高順は相変わらずの無表情で曹操を見下ろすだけ。

「所詮この世は弱肉強食……貴殿が強ければ私が負ける。私が強ければ貴殿が負ける。ただそれだけのこと」

そう言い残し高順は去っていく。ただ、途中で波才が合流し何かを耳打ちした後には部隊を率いてどこかへと走り去っていった。

「……一刀。あとでの男に対する評価を聞かせてもらっわ」

「ああ」

「十常侍が……やってくれる」

「まさか皇帝を連れて逃げるとは……筆頭たちが気に入らなかったのでしょうか？」

「さあな？ 私はよく知らんが、賈？の話では董卓様と仲が良かったらしい。恐らく、このままでは皇帝を董卓様に取りられると思ったのではないか？」

高順隊は、連絡役として部下を一人賈？の下に置くとすぐさま皇帝の搜索のために動き出した。

皇帝自体は速攻で見つかり、十常侍は高順隊により殺害された。これにより、事実上皇帝の周囲にいるのは董卓軍となり、董卓軍は強大な権力を持つことができるようになった。

しかし、これが後に「反董卓連合」が結成されるきっかけになった。

第8話 黄巾党と各諸侯―後編（後書き）

無拍子のことは自分の知り合いの剣道の先生が言っていたことなので、他にも説があると思いますが、ここでは本編のように設定しています。さすが示現流の地元で作者の生まれ故郷の鹿児島。剣術関係だと資料が半端ねえ。

さて、次回から「反董卓連合編」になりますが……ひとつだけ言えることは高順無双になります。（もちろん、手段を選ばない意味で）

第9話 大乱の狼煙

「波才。資料は？」

「全て頭の中に。ほかは全て焼却終了しています」

袁紹により皇帝を傀儡にしているという疑いをかけられた董卓。そして、歴史にある「反董卓連合」が結成された。

「……波才。お前は工作隊を連れて？水関に行き罠を仕掛けておけ」

「御意」

すでに、董卓軍も動き始めているが、編成に手間取っておりすぐには動けない。だが、高順隊は通常の部隊と比べると圧倒的に少ないため、このような緊急事態にすぐ動けるという強みがある。

「さて……行くか」

高順は倭刀を背負い、爆風対策として火浣布で作った外套の中に毒を塗った飛針や火薬を詰めた袋、峨嵋刺や匕首などの暗器を隠し董

卓たちがいる玉座へと向かった。

「来たわね。まあ、これで全員揃ったから作戦を発表するわ」

玉座の横に賈？が立っている。それに向かい合うように将たちが立っているのだが、基本的に高順は列には加わらず柱の横にたっている。まあ、他の面子は基本的に高順を無視しているので別に何も言われない。

「とりあえず、連合軍を？水関と虎牢関の二つの関で抑える。？水関には、華雄と高順を。虎牢関には張遼と呂布を司令官として出す

」

高順は自分が？水関を守ることを聞くと踵を返して玉座の間を出て行った。自分の配置が決まればさっさと向かい、周りの地理などを確認し畏をはるのが高順のやり方。そこには「大義」や「武への誇り」などはない。ただ「弱ければ死ぬ」「引つかかれば死ぬ」というものだけ。

「賈？！ 私は反対だ！ あのような男がいればいずれ董卓様に火の粉が飛んでくる！」

高順が出て行った瞬間に華雄が賈？に高順の出撃を叫ぶが、賈？は取り合わない。張遼も口には出さないが華雄と意見は同じのようである。

「悪いけど、彼我の戦力差は明らかなの。アンタの「正々堂々とした戦い」というちっぽけなものの為に高順という呂布に匹敵する人間を外すわけにはいかないの」

「な——ち、ちっぽけだと！？」

「まあまあ、華雄は少し落ち着き。でも、賈？。今の言い方はさす

がにひどいと思うで？」

華雄を抑えながらも賈？へと抗議の視線を向ける張遼。確かに、これは賈？に非がある。それを理解した賈？は謝罪をするが、目はどこまでも冷たい。

「まあ、さっきの言葉は謝るわ。でもね？ アンタらが思っているほど高順は弱くないの。むしろ、月が今無事なのは高順のおかげなのよ。それに、正々堂々と戦って負ければ月がどうなるか分かるでしょ？」

高順が十常侍などを殺したため董卓は安全な場所にいると言っている。さらに、華雄たちは知らないが、董卓の下に控えている侍女は全員高順の盗賊時代からの部下であり、戦闘能力もそこそ高い。つまり、高順は董卓を守護していると考えていい。まあ、それも賈？が命じたものではあるが。

そして、正々堂々と戦うのはたしかに立派である。だが、手段を重視していれば目的である「董卓の守護」が達成できなくなる。

「それはウチかて分かっとう。でもな？ 高順は洛陽では悪名高いで？ そんな男が居れば必然的に月つちの評判も悪くなるで？」

「悪名高い高順は董卓を裏から操っていた……とか言ったらどうす

る？」

「ちよい待ち！ まさか、高順を生け贄にするんか！？ 高順に申し訳ないとか思わないんか！？」

「さあね？ それに、高順を嫌っているあんたには関係ないですよ？」

張遼や華雄の視線を無視して玉座の間を出て行つた賈？。賈？の言葉は張遼たちに衝撃を与えていた。確かに、自分たちは高順が嫌いだ。だが、だからといって董卓のために逆賊の汚名を着させようとする賈？を許せるか？

「高順はこれを承知してんのか？」

「まさか……幾ら何でもそれは……」

張遼と華雄は高順がこのことを承知しているのかを知りたかったが、すでに高順も賈？もここには居ない。

「でも、高順は言っていた。『悪をもって善を成す』って」

呂布は高順から聞いた言葉を張遼たちに話す。それを聞いた張遼たちは絶句した。呂布が言った言葉を理解できたから。

「ちよい待ち……じゃあ、なんや？ 高順はわざとああいう態度をしとるっちゅうことか！？」

張遼の叫びは玉座の間に響いた。

『ちよい待ち！ まさか、高順を生け贄にするんか！？ 高順に申し訳ないとか思わないんか！？』

賈？は自室の寝台に飛び込んで天井を見上げていた。そして、頭の中に響くのは先程の張遼の言葉。

「うるさい……申し訳ないと思わなかった……？ 分かっているわよ……幾ら何でもアイツに全部押し付けすぎって……でも……ボクにはもう月しかないのよ」

右腕で目を覆いながら震える声でつぶやく賈？。すでに、母親は洛陽に移る数カ月前に彼岸へと旅だった。どうか、あの世では父親と再開できているものと思いたい。

「でも…アイツはなんで——っ」

賈？も高順を生け贄にするという策を考えて、本人に話した。そもそも承諾されるなんて思っていなかった。だから、冗談交じりに話を持ちかけたのだが、高順は即答で了承した。

『何を迷う必要がある？ 言ったはずだ。悪をもって善を成す』
という思想が私にはあると』

狂っている。そう一言で片付けられればどれだけ幸せか。

「なんでこんなに後悔するのよ……ボクは月の為ならなんでもする
って決めたのに…」

「詠ちゃん」

「——っ！ 月……？」

いつの間にか部屋の中には自分の親友でもあり守るべき対象である董卓がいた。その顔は悲しみに染まっていた。

「詠ちゃん。もういいよ」

「華雄將軍は部隊を率いてこちらに向かっているようです」

「そうか。地雷は？」

？水関の城壁に高順は立っている。斥候の報告ではあと数日ほどで

連合軍が？水関にやってくるという。

「すでに、崖にしかけています。それと、恐らく陣をはるであろう場所にも地雷を埋め込みました」

すでに、？水関の周りには高順隊により地雷やそれに伴う二次災害の罠が張られている。

「戦争はすでに始まっている。故に、ここでの戦いに合図などあるはずもない」

すでに、反董卓連合が結成され洛陽に向かっていている時点で宣戦布告は終わっている。ならば、すでに罠を張っておいても文句は言わさない。

「ククク……ハッハッハッハ！　これだけやれば『いい生贄』になるだろう」

これらの策も全ては『逆賊董卓』を操っていたのは『悪人高順』とするための策。

「悪いが……連合軍には生贄になってもらう。私が『悪人』となるためのな」

後方に控える高順隊は何も言わない。彼らはただ高順の命令に従うだけ。

「さあ行くぞお前ら。これより」悪「を始める」

「「「「「「「「「「御意！」「「「「「「「「

第9話 大乱の狼煙（後書き）

いつも思う。何故、？水関の周りに罠を仕掛けないのか。地雷などはこの小説のオリジナル設定だから仕方ないけど、落とし穴なりがけ崩れなりの罠を仕掛けないのだろうか。いやまあ、それやったら恋姫無双がバトルロワイヤルみたいになるんだからしないのだろうけど。

でも、ウチの高順は罠を仕掛けまくります。手段？ なにそれ美味しいの？な理論で行きます。ただ、高順は罠を仕掛けまくることにより、連合軍が壊滅することなどには気づいていない……「悪人高順」の名前が広がる前に連合軍が瓦解しなければいいなあ。

感想などお待ちしています。ついでに、感想部分でもありましたが原作キャラの死亡はどう思います？ とりあえず、今は考えていませんが黄蓋みたいに戦闘で死ぬということはあり得るのですが……

第10話 変わる思い（前書き）

今回のサブタイを別に付けるとしたら「スーパー高順タイム」月ち
やんも頑張るでよ」

第10話 変わる思い

「詠ちゃん。もういいよ。詠ちゃんや高順さんがそこまで苦しまなくても」

「ち、違う！　ボクは苦しんでなんか居ない！」

自室に入ってきた董卓の言葉を必死に否定する賈？。賈？はここ最近董卓と仕事以外で話すことはなかった。だから、突然現れたことに驚いてしまった。

「大丈夫。詠ちゃんたちが私のためにいろいろしてくれたのは知っているから」

董卓は賈？を抱きしめながらその頭を撫でる。それは親友だからこそ分かる賈？の気持ちを知っているから。賈？はそれに甘えそうになるが、すんでのところで踏みとどまった。ここで、自分だけ甘えるのは許されない。すでに、高順は進んでいるから。

「ごめん。月の気持ちはほんとうに嬉しい……でも、ボクはもう月とは違うんだ」

搾り出すように告げた声。それはある意味で決別の言葉だった。だが――。

「ダメだよ。一人で背負いこんじゃダメ。私だって王様だから、詠ちゃんや高順さんだけに汚れ仕事をさせるわけにはいかないの。これは命令だよ?」

「月……」

董卓とて何時までも深窓の令嬢などのように守られてはいられない。涼州にいたときから母親に教育を受けてきたのだ。人間は追い詰められると二つの方向に覚醒する。一つは、ただ自分の不幸を嘆いて足をとめる者。もうひとつは開き直って前を向いて進む者。董卓は後者だった。

「詠ちゃん。すぐにどうなっているかを教えて。負けられないのは詠ちゃんだけじゃないんだから」

「……やる気があるのかないのか分からんな」

高順は城壁に腰掛けて酒を飲みながら眼下の連合軍を見ていた。恐らく、あちらも気づいているのだろうが動きがない。恐らく、軍議でもしているのだろうか？

「まさかと思うが……関に着くことに宣戦布告でもする気か？」

すでに、？水関の周りには地雷を仕掛けておりそれぞれの場所には高順隊の隊員が控えており、合図を上げれば連合軍へ多大な被害を与えることはできる。

「ん？ あれは……呉の孫策に幽州の関羽？」

そして、孫策たちは華雄や自分に向けて罵詈雑言を浴びせ始めた。高順は別にどうとも思わなかったが、あの華雄がどうでるか。そう考えるとため息を吐きなくなった。

「私からすれば『武』に誇りを持つのはいいとは思えんがな」

それは『弱肉強食』の世界で生きてきたからの言葉。そこら辺の考えが違ってから張遼たちと険悪な仲になっているのかと考えてもみた。

「『武』に誇りを持っているからこそ——」

高順は盃を後ろに放り投げながら眼下を睥睨する。

「——そこを貶されれば後さき考えずに出撃する。実に愚か。典型的な「弱者」だ」

その視線の先には部隊を率いて突撃していく華雄の姿があった。

「筆頭。どうしますか？」

「死なれるとさすがにまずい。出撃する。1から5番隊を連れて行く。残りは万が一に備えて、？水関内部に火薬と油を仕掛けておけ」

「御意」

倭刀を腰に差した高順はそのまま城壁から飛び降りる。もちろん、縄で。？水関の城壁から落ちて無事にいるほど高順は頑丈ではない。

「さて……最悪、連合軍にはがけ崩れで生き埋めになってもらうか」

曹操軍の兵に飛び蹴りを食らわせながら首の頸動脈を匕首で切り裂き、血しぶきを上げさせる高順。すでに、高順には「華雄を死なせない」という事以外に気にかけるものはない。

「そら……吹き飛ばせ！」

黒色火薬をバラまき倭刀で発火させ、火浣布で作られた外套で自身を守る。牽制というか奇襲というか、とにかくこれを行うことで大半の敵を屠ることができる。

「華雄は……生きてはいるか」

遠目からでは判別しにくいが、手傷を負い撤退しているようである。

「……情けないものだな。まあいい——ッ！」

華雄が？水関へと逃げこんだのを確認すると高順はヒ首を崖の上に向かい放り投げた。だが、それと同時に自分に向かい突撃してきた武将がいた。

「ハアアアア！」

「踏み込みが浅い！」

その武将は無手の格闘が武器らしく、懐に入り込まれたときは驚いたが、高順とて今までルールというものがない『弱肉強食』の世界で生きてきた。その程度で負けるほど弱くはない。飛び込んだきた武将の腹を思い切り蹴り飛ばし、ヒ首をその目へと投げつける。

「……外したか」

生憎とヒ首は後から現れた夏侯惇に防がれたが、構わない。

「（孫策たちもこちらに向かっているか……ならばそろそろ）」

高順が後ろに飛んだ。それを察知して夏侯惇が追撃しようとするが、突然響いた爆音に動きを止める。それは、展開していた連合軍も同様。ただひとり、高順のみが笑っている。

「我らが畏を仕掛けていないとでも思ったか？　まあ、生きていたらまた会おう」

その言葉と同時に両脇の崖が崩れ始め、？水関へと迫っていた連合軍を飲み込み始めた。

「た、助け——」

それはどの兵の叫びか分からない。だが、確実に連合軍を攻撃し始めていた。気づいた者たちは急いで後退し始めるが、一度に大勢の人間が同じ方向に動けば渋滞になるのは必然。

「土砂で生き埋めになるか……それとも、人の波に踏み殺されるか……どちらかな？」

高順は一人悠々と？水関へとどつて行く。？水関と連合軍を分断こそしていないが、それでも土砂を取り除いて進軍するのは疲れる

だろう。さらに言えば、土砂を取り除いている最中の連合軍を襲えばいい。さらに、数人の部下を連合軍に潜ませているので逃げようとしたら、？水関を諦めて虎牢関や洛陽に先回りするようなら本陣を爆破するように命令してある。

「曹操や孫策の元には優秀な軍師がいるようだが……所詮は「常識的」な人間に過ぎない」

自分には『火薬』というこの時代で最強の部類にある武器がある。その上、手段を選ばない戦い方は自分の専売特許。

「このまま？水関で時間を取らせれば連合軍は瓦解する」

そうすれば、袁紹の言葉は事実なのか？という疑念も生まれてくるし、？水関を抜かれても虎牢関攻めは慎重になる。そうすれば、賈？が策を考える時間を稼げる。

「手段にこだわってはい目的を達成することはできない、ぞ？」

それは土砂の向こうの連合軍の連中に向けて呟いた言葉。そして、洛陽にいる一蓮托生の仲間へと向けた言葉。

「さて……盗賊たちに連絡を入れておくか」

盜賊時代に顔見知りだった盜賊たちに連合軍を攻撃するように部下に伝令を任せた。曲がりなりにも、美人な将が多かったから盜賊たちも喜んで襲撃をするだろう。

「まあ、それによる被害は知らないがな」

だが、襲撃して返り討ちにあっても別になんとも思わない。自分はただ『連合軍は結構被害を受けたから襲撃しても勝てるのでは?』と『董卓軍』が思っただけ。それをどうとるかはあちらの勝手。別に、盜賊たちが勝つとは言っていない。

「クツクツク。しかし、これで『高順』は悪人だな。賈?も罪を着せやすくなっただろう」

そういつて洛陽の賈?の顔を思い浮かべる。恐らく、顔を歪めながらも自分に汚名をかぶせるだろう。それで問題はない。だが――。

「……何故、悲しむ?」

賈?の悲しみや後悔などが織り交ざった顔を思い浮かべると微妙な気分になる。

「……気にするつもりもない」

第10話 変わる思い（後書き）

高順は本当に手段を選ばないため、そこら辺の盗賊も引つ張り込みます。恐ろしいやつ……。

そして、微妙に高順の内面に変化が……ところで、この高順がいろんな意味で覚醒したら恐ろしいことになりそうだ。工兵能力も高いし、戦闘力も高い。さらに、泥を進んでかぶる……うわぁ。

原作キャラの死亡については、話の流れというか……とにかく、何らかの理由がない場合は殺すことはしません。

第11話 高順、動く

「波才。華雄は？」

「結構深い傷を負ったので、部下が虎牢関へと逃がしたそうです」

？水関に戻った高順は華雄の姿が無いことに気づき、波才がそれに答えた。

「ならば、華雄隊も虎牢関に向かわせる。こちらのやり方に一々口を出されると面倒だ」

高順のその一言で、？水関に残っていた華雄の部隊は華雄を追い、虎牢関へと向かっていった。？水関に残ったのは高順隊のみ。戦力の差は明らか。だが、高順隊にはそれすらもひっくり返せるものがある。

「まあ、しばらくは様子見か」

「一刀。あの高順が使った粉に心あたりがあるのね？」

「ああ。あれは火薬っていうものだ。本来ならまだこの時代には存在しないはずのもの」

一刀は曹操の元で、高順が使った『黒色火薬』について報告をしていた。本来なら、この時代に存在するはずのないもの。自分でさえ、木炭と硫黄と後何かを混ぜて作られるという事以外は知らないもの。それなのに、この時代の人間が作れるはずがない。そして、それを使ってがけ崩れを引き起こすなどこの時代の人間が思いつくはずがない。

「もしかしたら、高順は俺と同じように天の世界から来たのかもしれない」

「……あり得ない、とは言えないわね。現に、一刀という存在がいる以上はね」

だが、一刀の考えは半分正解といった方がいい。ただ、高順はそれ

らの知識を黒という男から引き継いだに過ぎないのだ。

「……一刀。高順を引きこむつもり？」

「いや。少なくとも、今は無理だと思う」

曹操も今高順を引き込むためには捕らえるしか無いのだが、？水関への地面は土砂で半分ほど塞がれており、今も各諸侯が交代で土砂を除去しているため時間がかかっている。本来なら、挟撃されるリスクを負ってでも虎牢関へと向かった方がいいかもしれないが、袁紹は高順の攻撃に激昂しており、何がなんでも？水関を落とすことを目的としている。

「目的がすり替わっている。高順はなかなかの戦上手ね」

曹操がそう褒めた瞬間に天幕の外から怒号が響き渡った。

「何事！？」

「華琳様！ 天幕からは出ないでください！ 北郷！ 華琳様をお守りしておけ！」

外からは夏侯惇の叫び声。それに混じって関羽や馬超などの叫びも聞こえている。

「一体何が…？」

「ヒヤッハー！ 奪え奪え！」

連合軍の陣内は混乱の極みにあつた。突如、盗賊たちが襲撃を仕掛けてきたのだ。そのため、数人の将や兵は殺されなんとか対応した武将たちも若干の手傷を負ってしまった。しかも、中心にいる袁紹や曹操、孫策、劉備、公孫賛などの有力諸侯を狙って。

「くそっ！ 何だ貴様らはあ！？」

関羽が自らの武器を振るいながら叫ぶが、盗賊たちはただ食料などを奪って逃げたり、諸葛亮などのようにどう見ても戦闘向きではない将を狙って動いていたりしていた。

「筆頭。賊が連合軍の本陣に襲撃をかけたようです」

高順は？水関の城壁の上で酒を飲みながら波才の報告を聞いていた。

「ああ。叫び声がここにまで聞こえるからな。しかし、奴らも予想外だったろうな。我らがそこら辺の野盗を使うとはな」

「ですが、有効な手段ではありません。野盗は数が多いですからね…このような戦法にはもってこいです。別に、兵を減らさなくても食糧を奪ってくれるだけでもこちらとしてはやりやすい」

「ああ。それに、連合軍は被害を受けたとは言ったが……野盗に負けるほど被害を受けたとは言っていないからな」

何も嘘は言っていない。さらに、あのゴタゴタで地雷に火がつけば連合軍は大打撃を受けるだろうし、時間も稼げる。まあ、簡単に見つかからないように埋めているので火はそう簡単につかないだろうが。

「波才。少し、出てくる。部下を数人連れて行く」

「はい。お氣をつけて」

高順は再び連合軍へと攻撃を仕掛けるために突撃を試みた。連合軍内に不安などを植えつけるために。そして、闇夜に紛れた部下を伏せて連合軍の将へと単身その身を晒した。

「はあはあ……鈴々！ そっちは！」

「終わったのだ！」

盗賊をあらかじめ討った連合軍の主要な将は凶らずも同じ場所に集まっていた。そして、そこに招かれざる客が現れた。

「クツクツク。盗賊相手に手こずっているとは……やはり、集団で固まっていると奇襲には弱いかな？」

現れたのは高順。その左手には公孫賛軍の兵士と思わしき死体を引きずっていた。そして、いつの間にか曹操や劉備、孫策などといった有力諸侯の長までもが現れることになった。恐らく、状況を見に来たのだろう。

「何故、奇襲のことを知っている！」

夏侯惇が叫ぶが、周りの関羽などは分かっていた。アレほど騒いでいたのだ。？水関まで声が響いていたのだろう。ただ、それでやってくるのはどうかと思う。しかし、高順の言葉に凍りついた。

「いや。その盗賊たちをけしかけたのは私だからな」

その言葉を聞いた夏侯惇が斬りかかろうとするが、曹操に止められた。このような敵地の中に入ってきて、そのようなことを言うのだ。何も策がないとは言わせない。

「何を驚いている？ 貴様らが、「逆賊董卓」などといういわれもない風評を流したからそのとおりにしたただけだが？ ああ、別にそれに対して怒るつもりはない。私たちが董卓様をそのようなクズから守れなかったのが原因だからな」

そこら辺は高順には不満などはない。ただ、「弱肉強食の理」に従って「弱者」である袁紹たちが「強者」となった董卓に対抗するために策を練った結果だから。しかし、「強者」である自分たちに楯突いた報いはうけてもらわなければならない。

「クツクツク。さあて…お前らは不審に思わないのか？ 私たちはお前らが此処に来る以前に？水関に入っている。罾を仕掛けていないとでも？ もしかしたら、虎牢関へと向かう道に伏兵を仕掛けているかもしれない。もしかしたら、諸侯の中にこちらと通じている人間がいるかも知れない」

この混乱状況で「敵と繋がっている諸侯がいるのでは？」と思わせれば後は簡単に疑心暗鬼に陥る。

「考えなかったのか？ 盗賊は真つ先に本陣を目指していたよなあ？ その他の様々な諸侯たちを気にせずに……なんでだろうなあ？」

盗賊時代から他人を騙したりしてきた高順にとってこの程度は楽だった。本来なら、ここまでばらす必要もなく、ただ、姿を見せて大声で暗号のように聞こえる言葉を叫んで逃げればいいだけ。だが、それをしなかったのは少なからず袁紹たちの行動に自分がいらついているのだろう。

「（クツクツク。まあ、『今のところ』は私が強者だからな。好きにするのもいいだろう）」

混乱している武将たちの中で目ぼしい存在に目をつける。そして、こちらを睨んでいるのは西涼の雄馬騰。すでに初老と言われる年代に入っている男だが、その目は未だに現役のものだった。

「高順。貴様の主である董卓が陛下を傀儡にしているとの噂…本当か？」

「クツクツク。これは異な事を言う。董卓様がどのようなお方が知っているのは貴様もだろうに」

かつては共に戦ったこともある間柄。だが、今は敵。そして――。

「そして、忘れていないか？ 私が何故ここにいるかをなあ！」

その叫びと共に高順は周りを囲んでいた連合兵を斬殺し始めた。甘いと言えない。何故自分がここにいるのか。世間話や疑心を育てるために来たのではない。

「夜襲は戦争での基本だぞ！？ それすらも分からないようでは意味が無い！」

その叫びと共に伏せていた高順隊の数人が攻撃を始めた。武器は一般兵と変りないが奇襲には向いているし、なにより――。

「な！？ ウチの螺旋槍返せや！」

高順隊は手癖の悪いものが多いので、敵の武器を奪って使っていたりする。ちなみに奪った武器は本人ほどではないがそれなりに扱えていたりする。

「そして、馬騰！ 貴様はいろいろと面倒なものでな！ ここである程度、潰させてもらおう！」

その言葉と共に高順は「無拍子」を移動用に応用した「縮地」に似た移動方法で馬騰の懐に入り込み、その胸に匕首を突き立てた。

「……連合は私たちが潰す。董卓様は陛下を傀儡などにはしていない。こちらにつけ」

「……いいだろう。ただし、もう少し見極めさせてもらう」

一瞬ではあるが、馬騰の交渉をした高順。高順にとって馬騰たち西涼連合の騎馬隊はこの先のために「いろいろ」必要なのだ。そのために、わざと懐に入り込んだ。匕首を馬騰の胸に突き立てたのは、先程の会話で自分と馬騰の仲を不審に思われないようにするため。幸か不幸か、大半の人間は「甘い」ためこうしていれば馬騰が疑われる事もない。

「この程度で十分か。退くぞ！」

そして、馬騰を蹴り飛ばした後に火薬を爆破させ爆炎にまぎれて逃げた高順。ついでにその爆炎に紛れて、伏せていた他の部下が曹操軍や劉備軍の予備の鎧をかっぱらって兵の中に紛れ込んでいたりする。

「さて、結構無駄なことをした気がするが……まあ、ささいなことだ。お前は、その螺旋槍の解析に努めろ」

「了解です」

高順は敵から奪った螺旋槍などの武器の解析を部下に命じた。武器を奪う事自体、高順には忌避感がない。そもそも、盗賊時代の武器は敵から奪った剣などを使ってきた。それに部下には「珍しい武器を持っている敵が居れば奪え」と言っている。奪った武器を解析して自分たちを強くしてきた。今回は、見たこともない槍を使う女がいたからそいつを標的にした。

「解析が早くすめば戦力は上がるか？」

だが、高順も何時までもこの？水関で敵を止めておくことはまずいとは考えていた。確かにこのまま足止めをしておけば連合軍も瓦解

するだろうが、どちらにしろ群雄割拠の時代になっている。そうになると、大陸が混沌となる。

「だが、それはそれで面白いか？　むしろ、そのほうが董卓の「善」が際立つな」

どちらにしろ、自分がやることは変わらない。高順は？水関に戻り明日からどうするかを考えていた。

「あれが洛陽で悪名高い高順か……確かに、噂通りの「悪人」だっただけど……そこらの賊とは違ったわね」

そして、孫呉の王孫策も何かを考えていた。

ちなみに、虎牢関では――。

「……暇やな」

「うん。華雄の話では、高順が？水関を守っているって」

「……でも、？水関が落ちたという報告は来てません」

虎牢関では、結構暇な感じだった。高順が？水関で連合軍相手に足止めをしているので、兵の補充や洛陽との連絡などがやりやすくなっていた。

第11話 高順、動く（後書き）

この小説では馬騰はオッサンです。ええ、そうです。作者の趣味です。

そして、馬騰との間にパイプが繋がりました。馬騰は、漢の臣下なのでこの連合に参加したのは「陛下を傀儡にしている董卓」を倒すためなので、それが嘘だとわかれば自分の身をさし出してでも謝罪とかをするのでは？としています。

さて、実はこの「反董卓連合編」において原作キャラが死にます。誰とは言いませんが、まあ……大体わかると思いますけどね。それでは、また次回お会いしましょう。

第12話 終端への策

「え？　ちよつと待って……連合軍はまだ？　水関にいるの？」

「は、はい。華雄將軍は手傷を負い、虎牢関へと下がりましたが高順將軍が連合軍相手に足止めをされています」

「へう……」

洛陽では賈？と董卓が報告を聞いて啞然としていた。華雄は董卓に対する忠誠心は高いが、それと同じように『武』に対する誇りも高い。だから、そこをつかれれば負けると思っており、そこから水関は破られると思っていたのだがどうもそうではないらしい。

「（それに、どう考えてもやり過ぎ……いや、月の無実を証明するには時間を稼げば自ずと疑問を持ったり、それなりの有力諸侯はこれ以上の戦闘に利益はないと退くはず……それまで粘る気？）」

ちなみに、高順がやろうと思えば連合軍を壊滅状態に出来るのも分かっている。

「詠ちゃん。とにかく、高順さんには頑張って時間を稼いでもらお

う

「……そうね。虎牢関の張遼たちには？水関の動きを注意しておくように言っておいて！」

「はっ！」

そして、？水関には不気味な静けさが漂っていた。というのも、土砂の除去は済んだのだが、高順側が一切動きをみせていないため前曲に配置されている魏と呉が攻めあぐねているのだ。無論、袁紹などはすぐに突撃するように命令しているのだが、下手に攻撃を仕掛ければどうなるか分かっている曹操などは積極的に打って出ていない。しかし、呉はある計画を練っていた。

それは、高順が連合本陣に襲撃をかけた夜のこと。孫策、周瑜、黄蓋の三人は天幕でひっそりと飲んでいた。

「冥琳。祭。私考えたんだけど…元々この連合に参加したのは、袁術から脱却する時にいろいろやりやすくするためでもあったわよね？」

「ああ。ここで名を上げておけば問題ないし、袁術の軍をある程度潰すということもできるからな」

「じゃが、それがどうした？」

孫策は酒こそ飲んでいるが、目が王の目である。

「どうせ、董卓が洛陽で専横を働いているなんて袁紹の嘘。そして意外にも高順という男により時間が稼がれている。そのため、いずれこの連合は瓦解する」

周瑜たちは静かに孫策の言葉を聞いていた。恐らく、今から孫策が言う言葉は他に聞かれると厄介なことになりそうな予感がする。だから、黄蓋は周囲の気配を探りながら孫策に続きを促した。

「だから、さ。高順には、袁術を殺してもらう。もしくは、その戦

力に壊滅的打撃をいれてくれればこちらとしてはやりやすい。その代わりとして、董卓との同盟などを持ちかける」

「……まあ、有効といえば有効だ。この戦いに負ければ、皇帝を擁している董卓の舌先三寸で私たちの処遇が決められる。その前にこちらから詫びを入れて、というのも有りだろう」

孫策の言葉に周瑜が同意する。ただ、これは秘密裏に進めなければならぬ。孫権などに知られると何を言うか分からない。あの少女はまだ王としては未熟。

「まあ、蓮華の事はいいわ。あの子にはゆっくりと教えていけばいいから。それより、どう？」

「やろうと思えばいける。祭殿に次の戦鬪で高順かその部下に書状をこっそり渡してもらえばいいだろうし」

「なら決まりね」

孫呉の復権のためなら手段を選ばない。泥をかぶるのは自分たちだけいい。奇しくもこの三人の思いは高順と似ていた。

「ほう？ 孫策は結構利口だと思ったが……いや……あれは」

翌日、城壁の上に座っている高順は前に出てきた呉軍を見ながらそう告げた。一番前に出ているのは孫策。最初はただのアホ思ったが違う。どうもこちらを見る目が違う。

「波才。お前は6から10番隊を率いて呉に当たれ。それと、恐らく孫策が接触してくるはずだ。周りにバレないように合わせる」

「御意」

高順は波才にそう告げると、自分はこちらを睨んでいる夏侯惇たちに対応するために準備を始めた。

「孫策の目……賈？と似ていたな……」

高順が孫策を殺さずに接触するように伝えた理由。それは、孫策の目が賈？に似ていたから。そして、高順自身気づいていないが確実に「変わっている」のだ。それが悪いかどうかは分からない。

「戦闘はあまり得意ではないんですがね……」

「ッ！ よく言うわ。殺した兵を盾替わりにしているくせに！」

「別に、呉の兵じゃないからいいでしょう」

波才はそう言ってそこら辺で死んでいる兵の体を盾にしたり、孫策へぶつけて隙を作ったりして応戦していた。波才は、どちらかというと周瑜のように頭脳労働が得意なのだが、そこは元盗賊。戦えな

いわけではない。

「さて、戦場は混乱しているようですし……筆頭……まあ、高順様ですがね。とにかく、貴方と接触するように言われたのですが……どういうご用件でしょうか？」

「戦場で会話をしていると不審に思われるから一応これ」

袁術軍の兵の死体を盾にしながら波才の懷に入れられた四つ折りにされた紙。それを確認した波才は持っていた死体を孫策の方へと放り投げて、距離を取り後方の兵に弓矢を射かけるように命じた。もちろん、致命傷を避けるように。これには、ここで孫策たちを殺せば面倒だが、何もしなければ疑われるため致命傷を避けるように矢を射かけるようにさせた。

「（ま、どっちにしろこちらに不利益は無いんですがね）」

波才にしてみれば純粹に「漢の臣下」と公言しており、馬騰とは違い、未だに不確定要素である孫策の兵力を削る事に忌避感はない。

「さて、私たちはここで退かせてもらいましょう」

後ろから劉備軍の関羽が出てきたため波才は部隊を撤収させた。

「あら、いいの？　なんか、あの子は叫んでいるけど」

「生憎と私は自分の力量を自覚しています。無理無茶無謀は時と場所を選びましようってね」

関羽がなにか叫んでいるが、波才は気にせずに撤退した。武人の誇りなど戦いには必要ない。ただ、弱ければ死ぬという事だけ。

「それに……人を殺しているくせに「万民を救う」などという大義を掲げないで欲しいですね。賊は人ではなく獣？　違うでしょう。それはただ逃げているだけ。そう思っている内はその人間も獣と同じですよ。だって、賊はその「万民」に入ることができなかった民なのですから」

「……はあ。なんか厄介そうな奴らねえ」

孫策は波才の去っていく姿を見ながらそう呟いた。先ほど関羽ははつきり言って相手の人格を否定するような言葉もはいていた。恐らく、関羽は「逆賊董卓の臣下」に向けて言ったのだろが、まあそれは置いておく。それよりも、波才がそれに怒るという様子を見せなかったほうがすごい。

「ああいうのが一番厄介で信頼できるのよねえ」

自分がどのような評価を受けてもそれを気にせずただ主のために動く。そのような人間が臣下にいる董卓とはどれほどのものか。

「……羨ましいわね」

だが、孫策は勘違いしていた。波才は董卓の臣下としての自覚はない。ただ「自分の主である高順が董卓の下にいるから」従っているだけ。もし、高順が董卓の元から離反すれば高順隊は全員ついていくだろう。だが、逆に言えば高順を自分のもとにとどめ続けていれば「汚れ仕事を率先してやる連中」が居続けることになる。

「さて……あとは劉備たちに任せるか」

孫策は折角関羽がやってきたのでそちらに全てを任せて撤退すること

とにした。そもそも、？水関周辺を掌握しているのは高順。下手に近づいたら何が起こるか分からない。

「あ、やっぱり」

関羽は引つかからなかったようだ。落とし穴に兵が落ちた。しかも血しぶきが上がっているところから考えると、中に槍でも仕込んでいたのだろう。

「筆頭、孫策からの書状です」

「ん」

高順は夏侯惇を退けた後に？水関内部で波才から孫策の書状を受け取っていた。その内容はうまく使えばこの壮大な茶番をブチ壊しにできるもの。

『我ら孫呉は袁術の元から脱したい。もし協力をしてもらえるのなら、董卓殿と同盟を結び、今後一切敵対しないことを孫家の名に誓う』

簡単に訳するとこのようなもの。しかも、書状には孫策の名前で血印が押されていたためこちらから裏切らない限り呉が敵対することはないと判断している。

「波才。高順隊で一番早い奴でどれくらい洛陽に向かえる？」

高順は？水関の城壁に移動しながら後ろを付いてくる波才に問いかける。

「そうですね……確か、仙術を齧ったとかいう奴がいました。何でも、『神行法』^{しんこうほう}という五百里を軽々と踏破できる術を使えるとか」

高順隊はその人種や生まれに関係なく「高順に心酔した者の集まり」のため様々な能力を持つ者がいる。その中には仙人崩れという触れ込みで参加したものもある。

「ならば、そいつに洛陽まで行かせる。別に詳しいことは聞かなくていい。ただその書状を見せて是非をとればあとはこちらで判断する」

「御意」

波才は音も立てずにその場から離れた。恐らく、その神行法を使う者の元へ行ったのだろう。高順は酒を煽りながらどうやって連合を瓦解させるかを考えていた。

「さて、孫策との約束の通りにするなら袁術を殺すか？」

すでに、高順の中では同盟は結ばれている。そもそも、断る必要がない。こちらが理不尽なことをしなければ呉は友好関係を続けると言っている。ならば、わざわざ『董卓』がそれを反故にする必要性はない。

「ん？ そっいえば、袁術軍には『七乃』がいたな……クックック」

そう晒つと高順は「散華」を担いで夜の闇に消えていった。

「え？ 袁術軍が先陣を切る？」

「ええ。そうですよ？ 昨日、劉備さんの所の兵が落とし穴に引つかかってくれたのであそこら辺の畏は有りませんし」

翌日、軍議の場で袁術軍の將張勲がそんなことを言った。

「それに、曹操さんの所の天の御使いさんが仰った『火薬』ですか？ 確かに、アレも危険ですけどどうしてもばら蒔いてから発火させないといけません。つまり、その間に懷に入り込むなり盾で防御するなりすればいいだけです」

張勲の言葉はある意味筋が通っていた。そもそも、周りの諸侯からの張勲の評価というのは「そこそこの実力者」である。この程度の事に気づかないこともないという感じで受け取られていた。

「ということで、孫策軍には援護をお願いしますね？」

「え、ええ。いいわよ」

孫策は少し驚きながらも了承した。そして、袁術軍を先鋒とし援護を孫策軍が務めることで軍議は終了した。すでに、？水関の一番乗りはどこも諦めていた。とにかく、ここを抜いて虎牢関へと向かう

ことを考えていた。

「（クスクス。精精、頑張ってください。私とお嬢様は名より実を取らせてもらいます）」

張勳は相変わらずのニコニコとした笑みを浮かべながら諸侯たちを見ていた。

「（待っていてください——高順お兄様）」

第12話 終端への策（後書き）

……クリスマスなんて嫌いだ。カラオケに行ったら深夜1時に追い出された。ちくせう。

それはともかく。今回はいろいろ伏線が出てきました。まあ、大丈夫でしょう。なんか、原作恋姫で「悪人」とスタッフに言われた張勳とこの小説での「悪人」高順の繋がりができたましたが……待て次回！

第13話 ？水関陥落（前書き）

劇中で高順が張勳を真名で呼んでいます。仕様です。とりあえず、例外なんだなあと思ってください。

第13話 ？水関陥落

「先陣は袁術軍か……波才。分かっているな？」

「委細承知」

高順は相変わらず？水関の城壁に立ちながら連合軍を見ていた。

「しくじるなよ？ 七乃」

その呟きはこちらへと向かってくる袁術軍へ向けた言葉だった。

高順と張勳の出会い、簡単にいえば「高順と同じ身の上」である。黒の命令で高順が村を焼き討ちにした際の生き残りが張勳だった。

「……お前はこれからどうしたい？」

「……殺せばいいじゃないですか……それとも、私を無理やり抱きます？」

その時の張勳は、それこそ袁術よりも幼かった。だが、それなりに精神が成長していたのか諦観にいた表情を浮かべて村人を斬り殺して血まみれの高順を見上げていた。張勳が生きているのは本当に偶然。目に付く村人を斬り殺して、一息ついた頃に見つけただけ。

「……」

望みどおりにしようと剣を振り上げたのだが、やめた。

「……殺さないんですか？」

「気が変わった。付いてこい……」

高順はそう告げると張勳を立たせて自身はさっさと去っていった。しばらく張勳は呆然としていたが、何かを思いつくと高順の後を追いかけていった。

「ん？　おい、その小娘はなんだ？」

「……拾った。こいつは俺が育てる」

黒の下へと戻った高順は張勳を黒の前へと連れてきた。黒は張勳の顔をしばらく見た後に喉をくつくつ鳴らした。

「まあいい。お前が育てるならそうすればいい。ただ、ここの連中には幼女愛好者もいるから……精精、そいつらに喰われないようにしろ」

黒はそう言つと高順たちを下がらせた。

「クックク。アイツ……俺と同じことをしているなあ。それが『自分の後継者』か『自分を殺す』ために拾ったのかは知らんがな」

「お前には…『俺たちのやり方』を教えてやる。後は、自分で応用していけ」

「はい。」

高順が張勳を連れて数日が経った。今では、張勳は高順になつている。最初は何故？という疑問を持っていた高順だったが、張勳の目を見ているうちに大体分かった。

「（要するに…私と同じか）」

張勳は自分と同じように復讐のために力を付けている。自分を見る目がたまに憎しみに染まっている。だが、それと同時に『高順に対

して一種の憧憬』を持っているように感じる。

「七乃。お前は私をどう思っている？」

「最初は殺したいほど憎みましたね。あなたの後について行ったのも隙について殺そうと思ったからです」

張勲は高順の『無表情』^{ボーカーフェイス}とは違う『笑顔』^{ボーカーフェイス}を浮かべながら高順を見つめていた。

「でも、今はどうだと言われると首をかしげます。貴方がいたから誰にも襲われずにここまで生きてこれましたし、いろんな知識を得ることができました」

それは真実。そして、高順は自分の行動が黒と同じことに気づいた。

「（私は何をしている？ これは黒と…あの男と同じだ）」

自分も同じように黒に拾われてここにいる。そして、自分は確実に黒の思想に染まっている。つまり――。

「（私がああ男の後継者？ ククッ……悪い冗談だ）」

だが、どこかでそれも一興と思っていた。まあ、どちらにしろ目の前の少女を拾ったということは自分でも気づかないうちに何かを考えているのだろう。ならばそれに従うだけ。

「付いてこい七乃。お前には『弱肉強食の理』を教えてやる」

「分かりました。なら、全部教えてもらいますよ？ お兄様」

なぜ、張勲がそう呼んだのかは分からない。だが、この時高順の『後継者』が生まれた瞬間だった。

「そして、私はお兄様から『弱肉強食の理』を教えてもらってここにいますってね」

袁術を連れて馬に乗る張勳はいつもの笑みを浮かべながらそうつぶやいていた。すでに、高順との間で策は結ばれている。

『七乃。お前は明日、袁術軍を連れて？水関に襲撃をかける。こちらの準備はととのつている。ここまで言えば分かるだろう？ お前は私の教えを受けているはずだ』

昨夜、突然自分の寢床へ現れた高順は孫策との事などを告げてすぐに姿を消した。それだけを聞けばなんのことが分からない。だが、張勳は高順の意思を汲みとっていた。

「（要するに、『袁術』と『張勳』は死ぬ。ってことですね。そのかわりに今後の生活は保証する。まあ、私はお嬢様が無事ならそれでいいんですけど）」

張勳はいつもの笑みのまま軍を進めていた。その歩みは止まることはない。何故なら、高順隊の兵士は頬も痩けており、悪態をつきながら逃げているのがほとんどだからだ。

すでに、？水関に連合が釘付けになってひと月程経っている。連合軍はそれぞれの領地などから物資が送られてくるため、賊に奪われでもある程度は生き長らえる。だが、籠城している側はどうだろうか？ 物資はすでに底を付いており、士気が低い。高順がすぐとも他の兵士は違う。すでに、数合打ち合って逃げる兵もいる。各諸侯は思った。

「所詮は高順のみが突出した部隊だったか」

そのような呟きを漏らしている諸侯を見ながら張勳は内心嘲笑を浮かべていた。

「（これが、全部演技とは誰も思いませんか。所詮は、馬鹿ばかり）」

しかし、それらすべてが演技。その他の諸侯は全員が高順隊はすでに瓦解しかけていると思っっているはず。後ろにいる孫策の顔もそんな感じだ。

「（クスクス。孫策さん？ だめですよ？ そんな考えじゃお兄様の足元にも及びませんよ？）」

高順が持つ魅力は凄まじい。特に、賊や罪人などの所謂「悪人」た

ちは高順のその圧倒的な存在感と思想に心酔する。黄巾党など目ではないほどに忠誠を誓う。

例え『策のために食事はできるだけ抑えろ』という命令を受けても何の疑問も挟まずに実行するほど。

「さあ、お嬢様！　一番乗りですよ！」

「うむ！　さあ、行くのじゃ！」

そして、ほとんどの高順兵が逃げ延びた後に袁術軍は？水関へと入った。孫策軍は周囲の警戒という名目で外に置いて行かれた。この行為に孫権は憤ったが、孫策たちは別に気にしていない。他の諸侯は特に悔しがっていない。袁術の治世の悪さは周知の事実なので、ここで名を上げて別問題はないと考えている。まあ、劉備などの弱小諸侯はそう思っていないようだが。

「…待てよ？　火薬を使ってかけ崩れを引き起こしたのが高順だったら、？水関に罠を仕掛けていないのはおかしいんじゃない！」

曹操の隣で？水関へと入っていく袁術軍を眺めながら北郷はその事に気づいた。

「華琳！　すぐに、袁術軍を――」

北郷がそう叫んだと同時に、？水関が爆音を上げて崩れ落ちた。

第13話 ？水関陥落（後書き）

ということで、張勳は高順と同じような身の上なのでした。

ちなみに、公式で「恋姫の悪人」と書かれた張勳のキャラ紹介の部分を見て「張勳悪人↓悪人といえは高順（この小説の）↓つまり、高順の後継者」という式が成り立った作者は悪くない！ ということで、張勳はこれから波才と同じように高順の手足になると思います。

さて、そろそろ連合軍編も終盤です。終わり方は…まあ、万人受けはしませんね。

第14話 連合崩壊

「以上の結果から…袁術殿と張勳殿を始めとした袁術軍は全滅した
と思っていいかと」

？水関から虎牢関へと向かう道の途中に陣をはった連合軍は報告を
受けていた。？水関の爆発により袁術軍は壊滅した。最初は、生き
ているかと思ったが血のついた袁術の冠や成人女性と思わしきちぎ
れた腕が見つかったため二人は死んだものと考えられた。

「でも、だからといって止まるわけにはいかないでしょ？」

曹操の言葉により、連合軍は虎牢関へと進むことになった。だが、
一部の諸侯はあまり乗り気ではなかった。

「でも、高順の行方が分からないんでしょ？」

孫策は内心で高順が死ぬわけないと思いながらもそう発言した。孫
策に取って高順はすでに約束を果たしている。ならば、次は自分が
それを守る番と考えている。まあ、高順が死んでいても董卓の方に
書状を送っているはずなので、どのみち同盟の件は変わらないのだ
が。

「どうせ、？水関と共に死んでいるか、どこかに落ち延びたに決まっていますわ！」

袁紹はそう言いながら高笑いをしていた。ただ、その顔には？水関を破って嬉しいという気持ちと親類である袁術が死んだことに対する悲しみがあるように思えた。ただ、袁術との仲は良いものとは言えないようだったので、複雑な気持ちなのだろうが。

「…？水関が落ちた、ね」

洛陽では賈？と董卓が報告を読んでそうつぶやいていた。ただ、何故だろうか。それすらも策の内に思えるのは。

「どうせ、高順は生きているわ。気にしないように張遼たちに伝えなさい」

「はっ！」

賈？はそう告げて兵を虎牢関へと向けた。そして、兵が出て行った扉を眺めながら大きく息を吐いた。

「？水関が落ちたって事は孫策との約定を守ったってことでしょうね」

「うん。まさか、？水関を使うとは思えなかったけど」

「ただ、引つかかるのよね。なんで袁術軍がその爆発に巻き込まれたのかってのが」

賈？にはそれが不思議だった。いくら袁術や袁紹が目立ちたがり屋だからといって？水関に一番乗りができるだろうか？絶対に、曹操と孫策のように強豪のほうに出し抜かれると思っていたのだが――

「まさか、高順さんの知り合いが袁術軍にいたから身の安全と引換に……って事はないかな？」

「まさか」

「だよね」

「アハハハ……まさか」

二人は冷や汗を流しながら笑い合っている。絶対にあり得ないといえないのが厳しい。

「もし袁術だったら……あ、別にいいわ。確か、ワガママ娘だけど政治とかには関心はなかったから」

そう呟くと賈？は孫策との同盟の話を董卓と共に詰め始めた。別に、政治に関心がないならある程度のわがままは許すつもりだった。それくらいの資金はあるから。

「とにかく、月……これから忙しくなるかも」

「大丈夫。皆がいるから頑張れる」

洛陽では様々な事が変わっていた。王として覚醒した董卓が賈？とともに頑張っていたり。

「？水関が落とされたって聞いたけど袁術軍がおらんのはうれしいな」

「そうだな」

虎牢関の前には連合軍が陣をはっている。それを見つめるのは張遼と華雄。華雄の怪我はすでに治っている。これも高順が？水関で粘

っていたおかげである。

「しかし……高順を認めないわけにはいかないな」

「せやな。手段を選ばんのはどうかと思うけど、アイツが月っちに忠誠を誓っとるのは間違いない。こりゃ、あとで謝らんといかんな」

「ああ」

二人は高順が死んだとは思っていない。これはある意味信頼だった。そして、張遼は呂布に連絡を入れてこちらへと部隊を率いて進軍してくる連合軍へと突撃する準備を整えていたのだが、突如連合軍の後方から爆音が響いた。そして、大量の砂塵の中から現れたのは――

「「高順!?!」」

「さあ！ 突撃しなさい！」

袁紹の叫びで連合軍は進んでいく。曹操や孫策や馬騰は積極的ではなかったが、その他の諸侯は高順が居なくなつたと考え、士気は高い。呂布も強いが予想不可能な高順よりもある程度予測できる動きの呂布のほうがマシと考えていた。だが、連合軍に取って『最悪』の人間が現れた。

「え？」

爆音と共に手薄だつた連合軍の背後から現れたのは「悪」の軍旗を掲げた高順隊。その数は？水関の時よりも増えている。？水関に突撃した袁術軍の中には連合軍に潜んでいた高順の部下たちが混じつており、死んだように見せかけて？水関から脱出した高順たちのもとへと戻り、現在に至る。ついでに、袁術と張勳は部下の一人である戴宗により洛陽の方へと連れて行かれている。

「な、何故貴方がここに！？」

「別に死んではいないし、わざと姿を消して後ろから攻撃するのにも興だろっ」

ちょうど、高順は劉備軍の後ろに現れたのだが、高順は劉備の質問に答えるとすぐさま袁紹のもとへと走りだした。まるで獣が地を駆けるように体勢を低くしているため、一般兵では捕まえない。

「ちい！」

関羽と張飛が得物をふるおうとするのだが、高順が砂をかけたため怯んでしまい高順を通してしまった。高順隊は波才の指揮のもと暴れている。その被害をまともに食らっているのは劉備軍。

「弱小諸侯から潰す……ま、常識ですね」

波才は小規模である諸侯を真つ先に潰している。

「先に将から潰しなさい！ 混乱しきつた兵士は肉の壁です！」

波才はそう叫ぶと、少し高台へと向かい背負っていた弓を構えた。

「弱小諸侯からと言いましたが……貴方は別ですよ？ 曹操殿？」

波才はそう呟いて矢を引き絞った。

「な、なんですよ!？」

「姫、下がって!」

突如、後方から奇襲を仕掛けてきた高順隊のせいで戦場は完全に混乱していた。虎牢関からも張遼や華雄、呂布といった将が部隊を率いて前線に出ているため救援が来るはずもない。曹操軍はとにかく防衛に努めており、ともに動けない。孫策軍や馬騰軍も同様。そのため、救援など期待できない。

「ぶ、文ちゃん! あれ!」

袁紹軍の将顔良が指さした方向にはこちらに向かって駆けている高順。防衛している兵士たちの首を逆手に持った倭刀と匕首ですり抜けざまに切り裂きながら袁紹の元へと走ってくる。

「させる——え？」

文醜が自分の得物を持って高順に挑もうとした瞬間、耳元を何かが通り過ぎたような音と共に背後から絹を裂くような叫びが聞こえた。文醜が振り向くと喉に匕首が刺さり落馬している袁紹がいた。何が起ったのか分からずに茫然としていると誰かに蹴り飛ばされ地面を転がった。

「こんにちは、そしておやすみなさい。袁本初殿」

その言葉と共に倭刀が袁紹の首に振り下ろされ、断末魔の叫びと共に血しぶきが上がった。

「連合軍総大将が袁本初……董卓軍が高順が討ち取ったア！董卓軍の兵士よ！今までの鬱憤を存分に晴らせ！」

袁紹の首を高く掲げて高順はそう宣言した。それと同時に、波才が引き絞っていた矢を曹操のもとへと放った。

「戦争はまだ終わっていませんよ？」

曹操へと放たれた矢はすさまじい勢いで飛んでいき、曹操へと突き

立つかと思われた。

「華琳様！」

しかし、射線に入った夏侯惇により防がれた。そして、夏侯惇は近づいてきた波才を睨みながらも右目に刺さった矢を引きぬき目玉を食らい口上をあげた。

「卑怯者が…曹操軍の勇猛なる将兵たちよ「残念ですが、口上をきいているほどひまではないです」な?!」

波才は右手を軽く挙げた。それと同時に波才についてきていた高順隊の兵士が曹操軍に斬りかかった。

「まさか口上が終わるまで手出ししないとも思っていましたか？残念でした。私たちは他の将兵ほど優しくありません。ということ…ま、生きていたらまたお会いしましょう」

波才は口の端を吊り上げてそう告げると、その場から逃げ出した。その理由は、虎牢関の方から援軍が来たため、合流するためだった。

「貴様アーーーーー！」

「姉者、落ち着け！ 傷が！」

夏侯惇の叫びは波才には聞こえていたのだろうが、それに答えることもなく波才は振り向きざまに華琳の横にいた北郷目がけて矢を放った。それ自体は鉄球を持った少女に防がれていたが、とにかく曹操軍の動きを一時的に止めることができた。

「張遼將軍、行きますよ？」

「ああ。分かつとる……けど、納得できんで？ このやり方は」

「納得しなくても理解してもらえば結構。手段を選ばずに主を守る
ことが高順隊なので」

「よくも姫をオ！」

「ふん。先に仕掛けたのはそちらだというのに……傲慢だな」

高順は顔良と文醜の二人を相手に圧倒していた。怒り狂って単調になっっている攻撃など見切るのはたやすい。

「さっさと終わらせるか」

そう言っただけで高順は顔良に向けて匕首を投げた。ただ、それは急所からは外れて太ももを切っただけなので、顔良は気にすることはなく高順に大槌を振り下ろそうとしたのだが。

「あ……それ？」

突然、膝から崩れ落ちた顔良は自分が何故倒れているのか分からないうで目を瞬かせていたが、次の瞬間に体を振るわせながらうめき声を挙げた。

「ぐ、ぐるじい……あ……」

「斗詩！？ お前——！」

文醜はさっきの匕首に毒が塗られていたことに気づいた。そして激昂して斬りかかろうとしたが首に倭刀を突きつけられて動きを止めた。

「ま、これも「弱肉強食」ってことだ」

その言葉を聞いた瞬間、頭がぼうつとし始めた。

「あ……れ？」

次の瞬間、視界が暗転した。そして、文醜が二度と光を見ることはなくなった。

「さて、お前も苦しむのは嫌だろう？　今、仲間の元に送ってやる」

文醜の首を斬り、死んだことを確認すると蹲って苦しんでいた顔良の心臓に倭刀を突き立てその生命を絶った。

「さて……孫策と馬騰はもう戦う気は無いだろう。なら……劉備軍か？」

高順は再び劉備軍の方へとかけ出した。すでに、この連合は瓦解しかけている。さすがにこれ以上の攻撃は事後処理が面倒になりそうなので、揺さぶりをかけるだけ。

「それで自己嫌惡の末に狂ってくれば幸いだな」

集めた情報では劉備は「皆が笑って暮らせる世」などを掲げて軍を立ち上げたらしい。そして、今は幽州で善政を敷いているらしいが……。

「『仁君』ねえ……クックック」

高順にとっては理想しか見ておらず「弱肉強食」の世界にいるくせにそれを否定している子供。ならば、そこら辺の矛盾をつけばすぐに狂乱する。

「劉備：貴様が『善』であるというなら……『惡』である私が潰してやろう。物語のように『善人』が必ず勝つとは思わないことだ」

第14話 連合崩壊（後書き）

なんか高順が言峰化してきた気がするなあ。

それと、高順の部下の名前は水滸伝からとっています。とりあえず、全員風クラスの力を持っていると考えてもらって結構です。

とりあえず、次回で「反董卓連合編」は終わります。

第15話 戦争に明確な終わりはないってどっかの軍人が言っていた（前書き）

今回は、短いです。

第15話 戦争に明確な終わりはないってどっかの軍人が言っていた

「華雄將軍！ 孫策軍、馬騰軍が降服しました！」

「何！？ まあ、降服したのなら武装を解除するように伝えろ！
それが確認されたら保護に迎え！」

「御意！」

虎牢関に戻った華雄は兵からそのような報告を受けてすぐに動いた。

「しかし…何故？」

華雄は知っているのだろうか？ 孫策と馬騰が降服したのには高順
の根回しがあったことを。

「ご機嫌いかがかな？ 劉玄德？」

そして、その高順は劉備のもとへと赴いていた。袁紹の首を腰に下げた状態で。もちろん、全員警戒するが高順は気にしない。

「そ、その首……」

「ん？ ああ、先ほどとつた。一応、首をとって置かなければ生き延びているのでは？と思われるのではな」

「ひどい……」

劉備の口から漏れた言葉はそれこそ、子どもが「眠い」と口にするように意図して呟いた言葉ではないのだろうか、高順にとってそれは浸け込む口実に過ぎない。

「ひどい？ では、君たちはひどくないのか？ 「反董卓連合」というものに参加しているではないか。それはどう説明する？」

高順は、普段の無表情とは違い心底楽しそうに顔を歪めながら口を開く。すでに、劉備たちはその雰囲気飲まれており、動くことができない。

「董卓が暴政を行っている？ 調べたのか？ 袁紹から伝えられた情報を鵜呑みにしなかったのか？ 君の噂は聞いているぞ？ 何でも、「皆が笑って暮らせる世」を目指しているとか……だが、この状況はなんだろうなあ」

曹操や孫策などは虚偽であることが分かった上で参加しているし、開き直るだろう。恐らく、揺さぶりをかけても意味が無い。馬騰は純粹に「陛下のため」なので論外。

「君のせいで、洛陽の民は悲しんでいるぞ？ 陛下と共に善政を行っている董卓様になんてことを言うんだってな」

陛下はまだ幼いため董卓が庇護している。今では、仲の良い姉妹のようである。今は状況が状況なので、城に閉じこもってもらっているがもうすぐ外に出られるはず。

「そういえば、話し合いで解決できるとかほざいていたな？ なら、何故こちらと話し合わなかった？ 何故、洛陽に細作を放たなかった？」

洛陽には高順の息のかかった俠がいるため、他国の密偵などが入れやすくに分かる。曹操軍や孫策軍、馬騰軍の密偵は見つかった。恐らく、洛陽の内情を調べようとしたのだろう。馬騰が？水関で高順に疑問を投げかけたのは洛陽の内情と袁紹の言葉が食い違っていたためだろう。

「そ、それは……」

「民のため？ 皆が笑って暮らせる世のため？ その「皆」とは誰なんだろうな？ お前の身内か？ 関羽や張飛といった劉備軍とお前の領内の民だけが笑えればいいのか？ 洛陽の民や董卓軍はどうなってもいいと？」

「——ッ」

ここで言葉につまるところが「甘い」のだろう。曹操ならば「そうよ」とでも嘯くだろう。別に、真実を話せとは言っていない。ここで「それでも私は——」とでも言えば高順はすぐに虎牢関へと戻るつもりだった。

「それに関羽たちも酷いよなあ。今まで賊は人間じゃないとも思っているのだろう？ でも、好き好んで賊になった奴などいないのに。生きるためにはそうするしかなかったのに」

「だ、だが他人を傷つけて「お前がそれを言うか？」」

標的を関羽に変えて高順は揺さぶりを続ける。

「お前とて他人を傷つけて生きているだろう？　？水関で華雄を斬ったよな？　それはその時、お前が華雄を「悪」と判断したから。だが、実際はどうなのだろうな？　虚偽の風説に踊らされて無実の人間を斬った……「悪」はどっちかな？」

凍りついた関羽を放っておいて、次は二人の少女に矛先を向ける。

「そっちは諸葛亮と鳳統だな？　お前らのことも知っているぞ？　うちの部隊に徐福というお前らの同門がいるからな。だが、それはどうでもいい。徐福はお前ら程の軍師なら事の真相くらい分かっていると言っていたぞ？　それを止めなかったのはなぜかな？」

高順は本心では賢明な判断と考えている。「弱肉強食の理」に則れば当然のこと。だが、負けたときの代償を考えていなかったのが問題だっただろう。黒から教えてもらった言葉に「勝てば官軍」という言葉がある。だが、それは勝てばの話。負ければ大罪人として処断される可能性もある。

「さあ、劉玄德。君はどうする？　もしこのままだったら……幽州に官軍が押し寄せてくるかもなあ。そう、全ては君の選択の結果だ。

それに巻き込まれた民衆はどう思っただろうなあ？」

くつくつと笑った後に高順は背を向けて歩き出した。すでに、劉備は混乱の極みにある。もはや周りのことなど気にする余裕もない。それは、張飛を除く将も同様である。張飛が一生懸命に正気に戻そうとしているが、一度揺さぶりをかけられればすぐには戻らない。

「ま、精精呆然としているところに矢を撃ち込まれないようにな」

高順が振り向くことはなかった。

「さて、只今戻った」

高順は一足先に洛陽の董卓たちのもとへと戻っていた。理由としては、孫策や馬騰の事について。

「——と言う事で、呉と西涼の方は気にしなくてもいいだろう。どのみち、こちらが優位だ」

「……あ、アンタはすごいわね」

高順により馬騰率いる西涼軍と孫策率いる呉とのこちらが有利な条件での協定を薦められて賈？たちは驚いていた。

「何、手段を選ばなければこの程度お前でもできる」

確かにそうかも知れないが実際に行動できるか？と問われれば賈？は首をふるしかない。それにここまでうまく言ったのは高順の口の上手さもあるだろうし、張勳という伏兵を持っていたためでもある。

「袁術と七乃については…まあ、気にするな。私の懐から資金は出す。七乃はともかく袁術は何も知らん子供だ。本人は蜂蜜水を飲めれば幸せだからな。ま、犬を飼ったとも思えば問題ない」

高順はそれだけ告げると再び背を向けて玉座の間から出て行った。これからの戦後処理は主に董卓たちの仕事。自分は武器の補充や今回、敵に回った諸侯の領地に部下を放つ仕事がある。

「戦争はまだ終わっていない。特に…曹操。貴様は要注意人物なのでな」

いくらこちらに有利な状況といえど、つけ込まれる隙は必ず存在する。だから、その時のために曹操の喉元に見えない刃を潜ませておく。

「戦争直後のこの混乱状態だからこそ潜り込ませるのはたやすい」

第15話 戦争に明確な終わりはないってどっかの軍人が言っていた（後書き）

ということで、高順にとって戦争は止まっていますよ〜という話。

ついでに、劉備との会話は劉備が開き直ったり、自分の考えを曲げずにいればすぐに帰っていました。

次回は、事後処理です。まあ……曹操とかを軽い刑にしても問題はないです。だって、それ以上に高順がいるんですもの。甘い処分を下しても、すでに高順に監視されている状況だから……

第16話 高順は何氣に先を見据えている（前書き）

前回は書きましたが、高順の部下は「水滸伝」の登場人物からとっています。そのため、梁山泊メンバーと敵対メンバーが一緒に居ますが、名前と能力だけ借りていると思うてください。

若干、修正しました

第16話 高順は何氣に先を見据えている

洛陽の城にある玉座の間には「反董卓連合」に参加した各諸侯が立っており、その向かいの玉座には劉協が座っており、その両隣には董卓と賈？が、その少し前には張遼や華雄、呂布といった武将が劉協たちを守るように立っている。

「それでは、これより今回の事についての処分を下す」

そして、劉協はしっかりとした信念を持つ目で口を開いた。

「今頃は処分が下されている頃でしょうね」

「ああ。ところで波才。『草』はどうだ？」

「曹操の方には『宋江』『花栄』の二人を、幽州の方には『林冲』『李逵』の二人を送りました」

高順は玉座の間には行かずに部下に指示を出していた。高順は劉協と会ったのは十常侍から助けだした時のみ。しかも、十常侍を斬り殺した後に馬車の中を確認したときなので、結構恐れられているはず。

「まあ、どうでもいいか。七乃、袁術の様子は？」

「えつとーまあ、最近は街の子供達と遊んでいるので元気ですよ？」

袁術は意外にもこの街に馴染んでいるようである。まあ、以前みたいに下心丸出しで迫ってくる役人とかがいない分鬱憤がたまらないのだろう。

「七乃。お前は袁術を見ておけ。ただし――」

「分かっています。お兄様たちが出陣しているときの謀略はお任せください」

「ならばいい」

そうしていると部下の一人である樊瑞が建物の影から現れた。

「筆頭。董卓さまがお呼びです」

「分かった。樊瑞、お前は呼延灼を連れて、呉まで行け」

「御意」

樊瑞にそれを告げると高順は玉座の間へと向かった。向かう途中に呉用から聞いた情報ではほとんどの諸侯はすでに帰らされており、大抵がお咎めなしだった。まあ、死人に口なしとばかりに袁紹に全ての罪をかぶせたようである。袁紹の領地は、広大なためそれなりの諸侯でなければ治めることができないということで、袁紹領に近くて有力諸侯でも会う曹操と公孫賛で分けるようにされたらしい。ただ、公孫賛のほうが劉備との共同での治世を進言したらしい。

袁術領は、密約の件もあり孫策たちに。理由としては、「袁術の治世が悪かったという報告があげられているので、こちらで調査を行う。その間緊急措置として孫策に治めさせる」とした。もちろん、その間に孫策の政がよければそのまま引き継がせるという計画も立てている。馬騰は「今回は、袁紹が主導だったとはいえ、陛下の臣

下である董卓殿に刃を向けたことには変わりはない」と言って特に何も言わなかった。

「まあ、どうでもいい。劉備と公孫賛の安い友情ごっこならいくらでもやってくれ。そのほうがつけ入り易い」

その話を聞いたとき、高順は単純にそう思った。そのほうがつけ入り易い。だから、そのようなことはどんどんやってくれと思った。

「さて、そんなことより蜀のほうをどうにかしないといけないか」

蜀のほうはいろいろと面倒である。劉璋は悪い噂しか聞かない。

「……ふむ。先ほどはああ言ったが、友情ごっこは度を過ぎると面倒だ。劉備の理想を手伝ってやるとするか」

そう思い至ると、常に自分の周囲におり伝令役を務めている戴宗に『計画』を授けた。

「黒が言っていたが……正義の味方の物語には途中で強くなる『いべんと』というものがあるそうだ。まあ、頑張ってくれ。ただし——」

高順は幽州の方角を見据えて晒った。

「筋書きを書くのはこちらだ。強くなつたからと言って夢が叶えられるとは思わないことだ」

「高順だ。入るぞ」

高順が玉座の間へと入ると、そこそこの人数がいた。董卓軍の将がいるのは予想していたが、馬騰と孫策の部下までもいるとは思っていなかった。

「来たわね。ところで、今までどこにいたの？」

高順が入って、定位置である柱の横に立ったのを確認すると賈？が高順に質問を投げかけた。

「別に…ただ少し根回しをしてただけだ」

高順の言葉に大半は首をかしげるが、賈？と周瑜、馬騰などは何かに気づいたようだった。

「それよりも、何用だ？」

一応、自分の主である董卓とその腹心である賈？を気にすることなく口を開く高順。大半が絶句しているが、董卓軍はなれたもので気にしてはいない。

「一応、アンタもこの戦争で武功を挙げたからね。華雄たちにも恩賞を与えたけど、欲しい物とかある？」

「ない」

「「「……」」」

高順の即答に玉座の間に沈黙が降りた。

「そのようなものに興味はない。それより、何故西涼軍と呉がいる？ そちらのほうに興味をそそる」

高順はもらえるものは貰っておく主義だが、今は恩賞のことよりもそちらのほうが気になっていた。

「ま、一応この二つの勢力はアンタが戦争中に引き入れているから、いろいろと他の諸侯の前では話せないこともあるのよ。それぞれの武将がいるのはさすがに事情をはなしておかないと面倒でしょう？」

「ま、いいがね。どのみち、私のやることは変わらん」

手段を選ばずに主を「強者」へと押し上げるのが高順のやり方。今回の引き入れも「駒」を増やすために行ったことに過ぎない。それに、説明や同盟についての事もすでに終わっているのだろう。あの華雄ですら黄蓋という話している。まあ、かつて戦った間柄だからだろう。そう思い、柱に体を預けていると馬騰が近寄ってきた。

「久しいな。しかし、お前が誰かに仕えるとは…どのような心境の

変化だ？」

「別に…ただ、「強者」を創り上げるために仕えたにすぎん」

馬騰とは黒の元にいた頃から何回か殺りあっているため互いに顔は知っている。そして馬騰からすれば、高順が誰かに仕えるとは考えられないことだった。

「……あの包帯男の「弱肉強食の理」か。しかし、お前の場合は矛盾していないか？ お前は間違いなく「強者」だ。なのに、現時点で「弱者」である董卓殿に仕えている。これはどういうことだ？」

二人の会話は周りも若干気にしているようで、話し声も小さくなっている。だが、二人は無視している。

「簡単なこと。「強者は弱者を好きにできる」。ただこれだけだ」

「あゝそうかい」

要するに、行動に矛盾は生じていないということ。ただ、これをこの場で言うのはどういう事だろうか？

「（まるで、自分はいつか裏切るぞとも言っているようだな）」

馬騰はそう思い、横目で董卓軍の方を見ると驚いているのは華雄たちだけであり、賈？はどこか納得しているような顔をしている。少し、部屋の中の空気が変わってしまったため、馬騰は続けざまに言葉を放った。

「そういえば、お前もいい年だろう？ 身を固めたりはしないのか？ うちの娘は男勝りだが、可愛いところもあるぞ？」

高順は冷静に馬騰の顔を見た。多分、空気を変えるために出した話題なのだろうが、半分本気である。まあ、いくらお咎めなしとはいえ微妙な状況であるため、娘を人質がわりにでもするつもりなのだろう。別に、ダメな訳ではない。

「お、親父！？」

「あら……いいわね。うちにもいい子はたくさんいるけど？」

冗談なのだろうが、孫策も食いついてきた。まあ、馬騰や孫策にしてみれば悪い話ではない。ここでこのようにすれば裏切ることはないと思わせることも可能。ただ、高順でなければ大丈夫だっただろう。

「血を絶やしたくないということであれば、夜にでも連れてくれば
いい。抱くくらいはしてやる」

「……どういう事だ？」

「そのままの意味だ。愛だの何だの…私は興味がない。そもそも、
こちらを女を知らん訳でもない。必要性があるなら抱くが……それ
までだ」

高順にとって自分の動きを抑えるようなことはしたくはない。誰か
と番になれば手段を選ぶことがしづらくなる可能性がある。つまり、
情が働く可能性がある。だが、『何故か』最近それが『ある個人』
に限り揺らいでいる。

「それに……悪名高い私を引きいれと……いらぬ風評がつくぞ？」

それだけを告げると、いつの間にか横にいた波才を連れて玉座の間
を出て行った。

「あゝアイツの言うことは気にすることはないわ。あれはアイツなりの優しさだから」

高順が出て行った後、賈？がため息を吐きながらそういった。

「ああいう風に言われたらあんたらだって諦めるでしょ？ 政略結婚もいいけど相手を選びなさい」

賈？は一応、フォローをいれた。正直、高順は目的のためなら女を抱くだろう。確か盗賊時代に命令で高官の娘を籠絡して金品を奪ったと言っていた。

「（そう思うと使い勝手はいいのよね。ただ、さっきも言ったとおりいつ裏切るかって言うこともある。でも、アイツは自分の欲のために裏切ることはない。そう『自分』の、ね）」

賈？は内心でそう考えていた。高順を縛り付けるといふなら、それこそ高順と一緒に堕ちていく覚悟が必要だろう。

「（ま、ボクはアンタと一蓮托生だからね……どこまでも一緒に行

「つてやるわよ？」

内心を気付かれないように会話を続ける賈？。そして、他の諸侯が高順を取り込もうとしないように感情を操作しながら。

「（そう…アイツはボクの……ボクだけの「駒」なんだから）」

「筆頭、すで各諸侯の所へ部下を送りました。それと、戴宗から伝令です。蜀の敵顔、黄忠に劉備の噂を。劉備に劉璋の噂を流すことに成功したそうです」

「上等。しばらくは気にすることもない。まずは、領内の盗賊どもを潰せ。もしくは『交換条件』を持ちかける。『最終目標』のための駒にしる」

「御意」

高順は玉座の間を出た後、盗賊時代からの部下の中からよりすぐられた108人の部下を使い、暗躍していた。

「さて……そろそろ動くか」

高順はこれから裏方に徹する事にした。先の戦争に勝ったため、自分が表に出なくても沿う簡単には負けることはなくなった。

「ま、あとで賈？の所に行くか」

自分でも何故そう思ったのかは分からない。後ろにいる張勳は少し不満そうな顔をしている。

「クッククク。なるほどお……これが「愛」か？ それとも「恋」か？ まあ、どちらでもいい。そのような物……飲み込めばいいだけのこと」

「（お兄様……）」

第16話 高順は何氣に先を見据えている（後書き）

なんか、詠がヤンデレちつくに…まあ、ここら辺は次回のおはなしで補完しますのでスルーで。

ついでに、七乃が高順を思っているような節がありますが、まあ正解です。ここら辺も補完します。ただ、言えるのは「高順×詠」であるということです。

劉備の領地に付いてですか、正直どうでもいいです。どのみち、公孫贇は落とされる予定なので……

一応、次の話を書いてはいますがもしかしたら来年になるかもしれないです。でも、年が変わった瞬間に投稿というのも一興か？ まあ、やるだけやってみます。

第17話 閑話：それぞれの独白（前書き）

なんか……微妙な……

第17話 閑話：それぞれの独白

S i d e 賈？

ボクが、アイツと初めて会ったのはまだ涼州にいた頃。確か、黄巾党の討伐に向かっていたときだった。最初は別の賊かと思った。でも、それも仕方ないと思う。

「だって、どう見ても義勇軍とかには見えなかったもの」

机の上の書類を片付けながらそう思う。最初は、物語に出てくる幽霊がそのまま現れたかと思った。纏う雰囲気は張遼たちとは違って下手すれば見逃すほど弱い。顔は悪くはないけど無表情のため怖い。そのため、月は最初若干怖がっていたし、呂布ですら若干苦手な感じだった。

「しかも、その評価を変えようとかはしなかったわね」

アイツは基本的に無表情で猪突猛進で直情径行な部分がある華雄が噛み付いても何も言わずに去っていくだけ。正直、何を考えているのか分らない。

「でも、やることはやる」

ボクが立てた計画。それも、どう鼻屑目に見ても褒められたものではない事も、文句も言わずに遂行してくれる。それでいて、見返りを要求しない。それだけを見れば「有能すぎる駒」

「そういえば、愚痴もたくさん言ってたわね」

最初は父様の事でいろいろ言っただけ、いつからか愚痴を吐くようになった。それこそ、月には言えなかった事もたくさん。

「初恋、じゃないわね。多分、父様を高順に見ていたか……」

そう…アイツはただの協力者のはず。一蓮托生の間柄だけど、そういう感情はないはず。この前、馬騰や孫策が高順を欲しがったときにいらついたのは「ボクの駒」を取られるかもしれなかった。ただ、それだけのはず。

「そう……アイツは「駒」なだけ。アイツだってそう思っているはず。絶対に恋とかじゃない……」

でも、そう思うと胸が痛い。この痛みは、馬騰や孫策が高順を欲し

がったときに感じた痛みと同じ。この痛みを感じるたびに分かる。

実は、高順が好きだってこと。

分かっている。ボクだって馬鹿じゃない。アイツは、ボクの考えを受け入れてくれた。月のためにいろんな策を考えただけど、それを全部肯定してくれた。それでいて、ボクが潰れないように助けてくれた。アイツからしてみればどうでもいいことなんだろうけど、今までそういう相手がいなかったから純粹に嬉しかった。

「確かに、アイツのことは好きだけど……このままじゃボクの一方的な依存よね？」

それは、気に入らない。月は別格としても、高順にだけは依存したくはない。いや、一方的に依存がしたくない。

「ま、そんなことは月が大陸を平定してからでいいわね。どのみち今は愛だの恋だのにつつつを抜かしている暇はない。高順の部下の宋江の報告じゃ、曹操が天の御使いを利用しようとしているけど……まだ終わったわけじゃないのに余裕ね」

宋江からあげられた報告では、天の御使いである北郷一刀を使っているらしい。天の知識というものがどういふものかは知らないけど、こちらは勢力的に言えば、大陸の下半分を掌握したも同然。さらに

は、曹操たちの喉元に高順の部下が潜んでいる。状況はこちらに分すぎるほど。

「霸道を敷く。以前のボクなら脅威に感じたけど……」

曹操は霸道に行く。そのために様々な将を有し、なおかつそれを掌握している。連合軍壊滅前なら脅威に感じた。でも、すでに詰んでいる。馬騰を攻めても、孫策を攻めてもそして董卓軍を攻めても曹操は負けるだろう。何故なら、この三つは同盟を結んでいるから。馬騰にしてみればボクたちが陛下を傀儡にしない限りは裏切らないし、孫策の方もこちらから裏切らない限りは敵対しない。

「だから……大陸の覇者になりたいなら……霸道を捨てないといけないわよ？」

高順が言っていた。『霸道を行く者が天下をとるのではない。天下をとった者の進んだ道が霸道となる』って。要するに、過程よりも結果ってこと。かつてこの漢を築いた太祖も敵対していた項羽を騙し討をしたと聞く。でも、太祖は偉人とされている。つまり、過程が悪かろうとその後の政治がよければ人は評価する。でも、曹操は過程を重視しすぎている。別に悪いことじゃない。でもね？

「でも、アンタにそれを言う資格はないのよ？ 虚偽であれ、目的があったにしろ、袁紹の茶番に乗ったアンタには、ね」

過程を重視？ 袁紹の茶番に乗ってボクたちを大罪人に仕立て上げようとした時点で、アンタの言う『霸道』は破綻しているのよ？ それに気づいているのかは分からないけどね。

「手段を選ばなくなってもいいわよ？ ボクの高順が叩き潰すから」

いつからだろうか？ お兄様を想うようになったのは？ 最初の出会いからして絶対にそういう感情を持つとは思っていなかった。あの人の後について行ったのも最初は殺すつもりだったのに。

「いや、私もお嬢様命と思っていたんですけどね」

本当に自分は女なんだということを思い知らされる。

「ま、競争率が少ないのは嬉しいんですけどね」

お兄様は、基本無表情で必要以上に口を開かないからそれはもう……他人からの評価は悪い。そして、その戦闘方法や言動などもそれに拍車をかけている。

でも、その分一度お兄様に「守るべき弱者」の認定をされれば何があるかと守られる。お兄様は身内には結構優しい。例え、攻撃されてもそれは策のうち。まあ、それはそれとして。

「賈？さ……じゃなかった、賈？殿もお兄様を狙っているようなのよね……」

そして、お兄様も若干賈？ちゃんに興味をいだいている。でも、お兄様から迫るようなことはない。あの人はその感情すら飲み込むか

ら。

「まあ、本当なら出し抜くつもりだったけど……あの子に譲りますか」

お兄様が董卓殿を覇者とした後に何を考えているのかだいたい分かる。伊達に、お兄様の後継者を狙っているわけじゃない。ここをでていく時に私も一緒に行けばいい。お嬢様もいつかは私の元から離れていくはずだから。

「それに、最終的にお兄様の隣にいたほうが勝ちなんですよ？」

そう、最終的にお兄様の横にいた者が勝つ。たとえば、それが死ぬ間際でも。

「認めよう。私は詠が気になっている」

だが、だからといってどうなることでもない。愛だの恋だの興味はない。

「さて、賈？の所へ行くか」

それに、賈？には…そのような感情を抱くことは、な。別に、アイツの体が小さいからとかじゃない。私だって女を知らないわけではない。黒の下にいた頃から、襲う街の貴族の妻や娘に取り入るために色々してきた。だから、女を抱いたりすることに忌避感があるわけじゃない。

「一応は…恩人の娘、だからな。あまり認めたくはないのだが」

感謝もしているし、私に戦い方や今の生き方を教えてくれた存在だから。だが、どうしてもな。

「まあ、同じ穴の貉である私が言う事ではないな」

自分も同じようなことを七乃にしている時点でこのようなことをいう資格はないか。

「なあ黒……アンタは、盗賊時代には賈？や奥さんの事をどう思っていたんだ？」

まあ、あの男なら身内は別格と考えていそうだな。どうせ「俺は強者だから好きにしてもいい」とか言いそうだ。

「だが、私はアンタのようにはできない。私はアンタの思想を受け継いではいるが、忠実に受け継いでいるわけではない」

だから、アンタが考えていそうな「身内は別」とか簡単に考えることはできん。

『クッククク。面倒な生き方をしているなあ。お前は「強者」だから好きに生きればいいのになあ』

「……幻聴か？」

チツ。黒の奴……死んでも面倒な男だ。

「だが……アンの言つとおりなのかな」

第17話 閑話：それぞれの独白（後書き）

ということで、微妙な出来ですがこんな感じです。次回からは、ようやく中盤になるのか？ というか……下手すれば、曹操が自滅しそうな勢い。董卓とかにケンカを売る意味で……。さて、どうなるか。

しかし、黒の存在感が……

ちなみに、このあとがきを書いているときは23時57分です。調子にのって日付が変わったときに投稿しようとして頑張ってみました。

皆様、少し早いのですが新年明けましておめでとうございます。今年も、この駄作者シグマをよろしく願います。

……さあ、ちょうどに投稿できるのかどうか……

第18話 やるならば徹底的に

「やはり…今の状況で西涼や洛陽を攻めるのは難しいわね」

曹操たちは玉座の間で今後の方針を話し合っていた。状況ははっきり言って芳しくはない。大陸の左側は董卓に抑えられており、下の方も孫策が抑えている。さらに、董卓・馬騰・孫策は同盟を結んでおり、どこかが攻められればすぐさま軍を差し向けるだろう。例外は蜀だが、董卓たちからは無視されている。別にこちらでも無視しておいて問題ない。

「とりあえずは……公孫賛や劉備を落とすべきかしら？」

「そう、ですね。この状況でしたら、そうするしかありません」

曹操の言葉に悔しそうに荀？が同意する。袁紹がいなくなったことは嬉しいのだが、状況的にはかなり危ない。なにせ、どれだけ頑張っても大陸の右側しか曹操は得ることができない。その後は、どこかを攻めれば高確率で負ける。

「全てはあの高順とかいう男かしら」

「それにあの副官の波才とかいう男もです！」

曹操が？水関に置いてたった数百の兵で万をこす連合軍を相手取った高順の事を思い出すと、許？が鼻息荒く波才のことを出す。夏侯惇を慕っている許？に取って、その右目を卑怯にも奪った波才を許すことはできないのだ。

「波才といえば……」

「一刀？ 波才のことを知っているの？」

一刀が話したのは、以前捕らえた黄巾党の首領とされた張三姉妹から聞いた話に登場した男のこと。

「まあ、あの子たちも又聞きらしいから信ぴょう性は薄いんだけど、元々は同じ賊だったけど、サポート能力…えっと、補佐能力に優れていて頭も良かったらしい。ただ、黄巾党が結成される少し前に「仕えるべき方を見つけた」っていつてどこかに消えたらしい」

「恐らくそれが高順ね」

一刀の言葉に苟？が続ける。しかし、そう考えると余計に高順とい

う男がどのような男なのかが分からなくなる。しかし、そこで再び話を振ったのは一刀だった。

「実は…天の知識っていうのは未来の知識でもあるって華琳には言っただけだ。その中に高順の二つ名があるんだ。それこそ、とても有名な二つ名が」

「二つ名？ 隊長、それがどうしたんです？」

楽進が不思議そうに首を傾げる。だが、二つ名というのは他称がほとんどのため、その人間の能力などを表すにはこれほどないものになる。ただ、それが一人歩きする可能性もないわけではないが。

「まあ、ね。とにかく高順はこう呼ばれていたんだ。敵対した軍を悉く潰してきたから『陷陣営』と」

「『陷陣営』ね……確かに、？水関での戦闘を見るとそう思えるわ」

一刀の言葉に曹操が納得する。確かに、そのような呼び名を付けられてもおかしくない戦い方だった。

「ただ……皆にもここで改めて言っていたほうがいいと思う。もしかしたら、高順は俺と同じように天の知識を持っているかもしれないな

い」

一刀の言葉に曹操以外が絶句した。一刀の持つ天の知識はそれこそ寡兵で大軍を圧倒できるほどの価値を持つと考えているから。

「でも……アンタの知識がすぐくてもそれを実際に使えなければ意味が無いでしょ？ それに高順が本当に天の知識を持っているかどうかなんてわからないじゃない」

一刀の言葉に反論するのは苟？。本来なら、もっと罵倒をするつもりだったのだが状況はそう言っていられない。

「うん。俺もそう思った。でも、？水関で高順が使っていたのは火薬っていつて、まだ発見されるはずのないものなんだ。それに、仮に存在を知っていても実際に作れるかって言うと難しいと思う」

高順が使う黒色火薬に限らず、火薬は全て製造には細心の注意を払わなければならない。黒色火薬の場合は、吸湿性が高く、静電気や摩擦、衝撃に敏感なため保存状態が悪ければいざという時に着火しなかったり、保存場所が爆発する可能性もある。

「（それなのに……高順の動きとかを見れば……完全に扱えている。この時代の人間があんなに上手く扱えるはずがない。高順は俺と同じだ）」

「……考え込んでいる一刀は放っておいて、とにかく今は足元を固めるしか無いかしら？ とりあえず、公孫贇を攻めることを決めるけど……時期を見て短期決戦を仕掛けるわ」

「『『『御意！』』』」

曹操は大陸の右側を掌握することに決めた。董卓たちをどうするかは右側を掌握し、足元を固めてから決めることにした。

「花栄。どうだった？」

「曹操は公孫贇を攻めるようだ。まあ、当然だな。大陸の西は筆頭たちに抑えられているから、領土を広げるには東しか無い。地理的

「言えば東南か？」

魏の本拠がある陳留の飯屋では領内に潜入していた宋江と花栄が隅のほうで情報交換を行っていた。

「ま、どうせ筆頭や賈？様に潰されるのがオチだ」

「花栄。油断はするなと筆頭が常々仰っている。分かっているだろう？。」

「ああ。俺達のヘマで筆頭たちを困らせるわけにはいかないからな」

宋江たちが声をひそめながら会話を続けていると店の前が騒がしくなってきた。

「なんだ…って……あれは」

「曹操、北郷一刀、夏侯惇、夏侯淵、許？、典韋か」

曹操たちがこんな場所に現ればそりゃ騒がしくもなる。宋江たちは、周りに合わせて驚きながらこれからどうするかを考える。ここでさっさと帰ろうとすれば怪しまれる可能性がある。ということだ、

周りに合わせて逃げることに決めた。

「（で、どうする？）」「

「（とりあえずは、周りの客が帰るようだったらそれに合わせよう）」

二人はそう決めると、不自然ではないようにその場に座った。他の客も曹操の言葉に従い席について、それぞれ飯を食べ始める。宋江が曹操たちの会話に聞き耳を立てると、ただ単に食事をしにきただけらしい。

「花栄。そろそろ出ようぜ」

「ああ」

二人は、勘定を机に置いて店を出ようとしたら、不幸にも事件に巻き込まれた。

「オラア！ テメエら、この女を殺されたくないけりや道を開ける！」

どうやら、ただの賊らしい。人質として女性を捕まえているらしい

が、正直に言えばどうでもいい。だがちょうど自分たちが行きたい方向におり、なおかつやじうまのせいで身動きがとれない。店の中にいる曹操たちもどうにかして動こうとしているのだが、やはり野次馬のせいで動くことが難しいようである。

「ん？　おい、宋江。あれって……扈三娘じゃないか？」

「は？　って、確かに扈三娘だな」

賊に捕まっているのは、高順の部下である『百八星』の一人である扈三娘であつた。一応は、そこら辺の男よりも強いはずなのになぜ捕まっているのか。二人は不思議に思ったのだが、すぐにその疑問は氷解した。

「……寝てやがる」

「あゝ。たしかアイツ、筆頭か波才様が王英の命令がなけりや眠る奴だつたな。しかも、命令を受けても旦那である王英がいなけりや……」

「つーか、なんでここにいる？」

扈三娘は夫である王英と二人で行動するのが基本だつた。なのに、

王英の姿は見えず。そう思っていると、扈三娘が目を開けた。

「あゝ良く寝たよ。あ、宋江！　ウチの旦那がつてあれ？」

「……とりあえず、状況を確認しろ」

宋江に用事があつたらしく、宋江を見つけると顔をほころばせたが、身動きがとれないことに気づき、周りを確認すると自分が人質になっている事に気づいたようである。

「この女！　おとなしく」私に許可無く触っていいのは旦那と筆頭だけよ？」え？」

次の瞬間に、賊は縄で簀巻きにされてその場に倒された。扈三娘が得意とするのは捕縛術。しかも、どこから取り出すのかとてつもない長さの縄を自由自在に操れるため、これから逃れられるのは今のところは火薬で自分の体ごと爆破して焼ききる高順と、平気で他人を盾にする波才しかない。

「さてつと。宋江。うちの旦那から『うちの店がだす新商品の酒』を渡すように言われていたんだよ。はいこれ」

「あ、ああ」

「んじゃねー！」

未だに空気が止まっているこの場所から扈三娘はさつさと逃げていった。恐らく、面倒事に巻き込まれないようにするためだろう。宋江は渡された酒瓶を持ちながら大きく息を吐いた。

「行くぞ花栄。なんか疲れた」

「……だな」

二人はため息を吐きつつその場から離れた。

「今の捕まっていた女……凄腕ね」

「ええ。縄だけでしたが、一切のムダがありませんでした」

宋江たちが去ったあとに曹操たちが先程の事を話していた。

「多分、どこかの商人の婦人でしょう。会話の内容からもおかしいものではありませんでしたし」

夏侯淵がそう話していると一刀が唸り始めた。

「どうしたの兄ちゃん？」

「いや…あの宋江って男の人…というか、名前をどこかで聞いたような気がするね」

一刀は『宋江』という名前に引っかけかりを覚えたが、どうにも思い出せなかったためひとまず置いておくことにした。

そして、後にその名前を思い出したためいろいろと面倒なことになるのだが、今はおいておこう。

「宋江、筆頭からだったのだろうか？」

「ああ。新しい指令だ」

扈三娘から渡された酒瓶の中には、布袋に入れられた紙が入っておりその中に高順からの指令が書かれていた。

扈三娘が言った「うちの店が出す新商品の酒」という言葉。『うちの店』とは高順が所属している董卓軍のこと。『新商品の酒』というのは新たな指令のこと。

「『魏軍に潜伏し、合図をまて』だ」と

それは、埋伏の計。すぐには効果が現れないが、確実に致命傷を与えるであろう策。

第18話 やるならば徹底的に（後書き）

今回は、波才などの評価の話でした。記述を見ると、波才はそこそこの実力者だと思っんですね。皇甫嵩の軍などを結構追い詰めていましたし。

そして、魏に潜入している宋江・花榮のおはなし。ついでに、扈三娘登場。こいつら百八星が高順に付き従っているのは、次回でお話します。

PS・餅を焼いているときにやけどを負ったら、左手だけが志々雄みたくなった……紅蓮腕は無理そうだけど、ゴッドフィンガーは使えるかも……

第19話 動く者たち

「『魏軍に潜伏し、合図をまて』だと」

「要するに『埋伏の計』か」

合図というのが何を指すのか分からないが、指令が来たならそれに従う。それが、自分たちだからだ。

「ああ。花栄……余計な情を抱くなよ？ 俺達は筆頭のために動かなければならない」

「大丈夫だ。俺達は誰にも認められなかった。外見が醜悪、親が罪人、権力者が自分の保身のために街ごと捨てられたり……俺達はそういう連中だった。だが、そんな俺達を拾ってくれたのが筆頭だ」

高順に盗賊時代から盗賊時代から付き従っている宋江たち。その全てが、外見が醜悪であったり、親が罪人の類であったりで故郷から追放された者や、賊に襲われて自分たちを囷にされてすべてを失った者たちである。高順はそのような連中を引き込んだ。

『お前ら、所詮この世は弱肉強食だ。強い者が勝つ。そういう世界

だ
』

高順は最初にこのようなことを言った。そして、その言葉はすぐに自分たちの『思想』となった。そこから、どんどん規模は増えていった。元々、そこら辺の諸侯とは違い、口先ではなく行動で示してきた高順。自分たちに戦闘方法を叩き込み、今まで認められなかった自分たちを認めてくれた男。

『お前らも今まで好きに生きてきただろう？　なら、ここで死んでもいいだろう？』

高順は盗賊を優先的に襲っていた。もちろん、街も襲っていたがどちらかと言えば領主やそれなりの地主の家に入り込んでいた。

『この世は弱肉強食。だが、ただの民を襲うよりはそれなりの連中を襲ったほうがいい』

圧政などを強いていれば良心も痛まないから余計にやりやすいだろう？と高順は続けた。自分たちだって、そこら辺の賊のように未来を生きられるか分からない民を襲うよりは、そっちの方が幾分か楽だ。そこら辺も慕う人間が増えていった要因なのだろう。自分たちにだって、まだ挟持というものがある。五十歩百歩なのだろうが、所詮は自分たちを知らない連中の言葉。

『お前らには話しておこう。私が描く『悪をもって善を成す』という思想の最終目的を』

高順が話した事。それは、ちょうど高順隊の中でも選りすぐりと言われている『百八星』に数えられる108人が集まった時だった。そして、全員がその目的に殉じることにした。自分たちは、外れ者。しかし、高順は自分たちを認めて受け入れてくれた。ただ、それだけの理由だったが、全員が高順に付いていくことにした。

『ひとつだけ確実に言える。この『策』に逃げ道はない。参加すれば悉く死ぬ。一応、次善の策を考えてはいるが……どのみち、死ぬことには代わりはない』

そう言われたが、自分たちは迷うことなく付いていくことを決めた。

『我らは高順様により認められた108人。我らは高順様とならば、どのようなところへも行く所存です！』

108人をまとめていた宋江が代表して宣言した。自分たちは、高順のために死ぬと。

後に宋江を含める108人は、その『最終目的』を実行したがために「稀代の悪人」と呼ばれる高順と、『饕餮』を除く『窮奇』『渾沌』『撓骨』の要素を持っていたとされ、『三凶』と呼ばれた波

才と同じように『百八魔星』と称される事となった。

「劉備をさつさと蜀へとやりたいところだが……下手に干渉すれば計画に狂いが生じるから動けん。まあ、足固めといくか」

深夜の私室で高順は計画を練っていた。昔から、策謀というか謀略は得意だった。それも手段を選ばないものが。やはり、そこは黒の教育を受けていたからだろうと考える。

「と言っても、私がやることは殆ど無いのだがな」

足固めということは、内政になる。正直言って、内政はあまり得意ではない。というのも、内政は手段を選ばなければならぬからだ。手段を選ぶとなると一気に選択肢がなくなるのが高順である。

「つくづく、平和な世では無能だな」

少しだけ口の端を吊り上げる。といっても、殆ど無表情なのだが。

とにかく、高順は自分が今のような戦乱の世でしか生きて行けないことを自覚していた。平和な世では恐らく、どこかで野垂れ死ぬのだろう。

「しかし……「百八星」もよくやってくれる」

百八星の大半が、大陸中に散らばってそれぞれ行動をしている。洛陽にいるのは、董卓たちの護衛を任せられている扈三娘を除く女性たちと、呉用などの智謀に長けた者、公孫勝などの仙術を使うような連中のみ。

公孫勝たちを表に出さないのは、保険である。公孫勝たちが使う仙術は強力なものが多いのだが、大抵が派手なため計画に余計な狂いが生じる可能性があるため、余程のことがなければ公孫勝たちを前

に出すことはない。と言っても、公孫勝たちのような仙人がいるということは、仙人と呼ばれる者がいるという証拠になるので、公孫勝たちにはそれらを見張らせたり余計な手出しはしないように頼み込ませている。

「それだというのに……なにか御用か？ 仙人殿」

「あらうん。気づいていたのね」

どうもみられている気がしていたので、声を出してみたら意外にもあつさりと姿を表した。

「生憎と、仙人には被害を……加えるつもり……は」

声のする方へ顔を向けると、そこには筋骨たくましい桃色の下着を着た怪物がいた。声の質に対して、口調が女のような気にすることはなかった。今までも、男で女のような口調ではな奴がいたから。だが、この姿は予想外だった。

「……」

「あらう？ 私の美貌に恐れをなしているのね？」

確かに恐れはなしてはいるがと思ったが、相手は仙人であるため下手なことは言わないようにした。

「失礼。それより、仙人殿とお見受けするが何用か？　あなた方には手出しはしないが？」

「んー正確に言えば仙人じゃなくて神仙なんだけど……まあ、いいわ。私は貂蟬っていうの。とりあえず、私の仲間に羅真人っていう神仙がいるんだけど、その羅真人の弟子である公孫勝たちが仕えている武将っていうのに興味を持ったからよ」

貂蟬はそう言っただけで高順を舐め回すように見つめる。最初は、外見や言動からソッチの者かと思ったが、眼の奥に理知的な光を見たため警戒を緩めることはなかった。

「へー『今回の』ご主人様にはきついかしら？」

「……何を言いたいかは知らないが……敵対するのか？」

「いやいや。仮にも貴方からすれば『仙人』だから、余計な手出しはしないわよ」

要件はそれだけだったのか貂蟬は風景に溶けるようにその場から消えた。残ったのは苦い顔をしている高順だけだった。

「まさか、仙人が接触してくるとはな」

それほどまでに自分は危険視されているのだろうか？ 公孫勝や樊瑞といった連中を一気に従えているのに理由があると考えたが、今更止まるわけにもいかないし止まるつもりもない。

「さて「高順、いる？」…賈？か。どうした？」

部屋に入ってきたのは酒瓶と二つの盃を持っている賈？だった。

「戴宗から報告が上がってきたわ。曹操が公孫贇を近いうちに攻めるって」

「まあ、そこしか道はないからな。馬騰、孫策、そして私たちを落とすにしても今の状態では、な」

「まあ、ボクたちには一応陛下がいるから攻めるにしても最後かしら？」

「だが、以前のように董卓様が陛下を傀儡にしているという策は使えん。使うことも可能だが、負ければ確実に斬首だ」

そもそも「反董卓連合」の時も全ての諸侯がお咎めなしになったのも奇跡である。袁紹というちよいどいい罪をなすりつける対象がいたからであり、戦って負ければ曹操たちが斬首されてもおかしくない。

「大体、天の御使いという奴がいるらしいが……報告では内政のほうに向いているらしい。だが、どうもうまくいっていないらしい」

「どういう事？」

「何でも天の世界とこの世界の技術に開きがあつて、うまくいく政策といかない政策があるらしい」

賈？はその事を聞いて頷いていた。いくら知識があろうと、それを実現できるかどうかは分からない。賈？自身も似たような経験があるからだ。

「なるほどね。でも、いくつかは成功しているんでしょ？」

「ああ。何でも、街の区画整理や……警備隊だったか？ それらの

政策は成功しているらしい」

この世界でもっとも重要な物とは何だと聞かれれば高順は迷わず「情報」と答える。現に「反董卓連合」において袁紹が流した情報で一氣に大陸は混沌とかした。それ程に情報は有用なのだ。

「でも、それって父様の受け売りなんでしょ？」

「悔しいが……あの男にいろいろ叩き込まれたからな」

酒を飲みながら苦い顔を作る。口にしたとおり、高順の戦い方や戦術などは全て黒に叩き込まれた結果のもの。そこから、応用はしているとはいえ基本は黒から教えられた物。「反董卓連合」の後からちらほらと言われるようになった『陷陣営』という呼び名をつけられるような用兵も黒の教育があつたこそ。

「ねえ……高順。アンタは父様の事をどう思っているの？」

盃に入っていた酒を一氣に呷り呟いた言葉。高順は同じように酒を一氣に呷り、天井を見つめる。

「……恩人でもあり、仇敵でもあり、超えるべき壁でもあつた」

自分にここまでの力を与えてくれた恩人ではあるが、村を焼き家族や友人たちを殺した仇敵でもあった。そして、なにより超えるべき壁だった。だが、正直言つて黒を殺して勝った気はしなかった。原因は、黒が残した様々な資料だった。あれを使えば自分を簡単に殺すことができたはず。なのに、それをしなかった。

「正直……勝ち逃げされた気分だ」

喋りながら珍しく饒舌になっていると自嘲する。酒に酔っているのか、それとも黒の娘である賈？に酔っているのか正直分らない。そして、そのような感情を飲み込むと決めたはずなのに飲み込めていない自分が面白かった。

『よお……所詮、どんなに取り繕うとも『本能』には抗うことはできんぞ？ なんせ、男ほど『本能』に弱い生き物はない。素直になりな。これもある意味「弱肉強食」だ』

「（……幻聴。もしくは、自分の無意識の発言だと思いたい）」

正直、黒が幽鬼となって自分の後方にいると考えただけで死にたくなる。恩人ではあるが仇敵でもあるのだ。それに、全身を包帯で巻かれた男がいる時点でぞっとする。

「ねえ……高順。アンタはボクの事をどう思ってる？」

「何？」

蝋燭に照らされた賈？の顔は酒のせいで赤くはなっていたが、目はしっかりと高順を見据えていた。

「ボクは、アンタが好き……ううん。愛している。アンタはボクをどう思ってる？」

高順は、盃に酒を注ぎながら賈？の顔を見据えていた。

第19話 動く者たち（後書き）

今回の事を纏めると、こんな感じ。

1・高順の部下108人の簡単な来歴

2・貂蝉、高順を観察しに来た。

3・関係が変わるお二人

という感じ。百八星の参入理由は、本編で語られていたとおり。貂蝉は接触こそすれ、干渉はせずに傍観に徹する。

羅真人は貂蝉たちと同じ存在。その弟子が公孫勝たち。羅真人が弟子をとったのは、無印での于吉や左慈のような存在へと対抗するため。

という裏設定があったり。

今回は、まあ……詠ちゃんがヤンデレ覚醒？ そんなおはなし。

第20話 受け入れられた思いと受け入れられなかった思い（前書き）

今回、賈？文和こと詠ちゃんがヤンデレみたいになっています。
読む際は注意してください。感想で「こんなの詠じゃねえ」とかその類の言葉が出てても作者は無視します。許容できる方だけGO！

第20話 受け入れられた思いと受け入れられなかった思い

「ねえ……高順。アンタはボクの事をどう思ってる？」

「ボクは、アンタが好き……ううん。愛している。アンタはボクをどう思ってる？」

頬を染めて、瞳を潤ませながらもしっかりとした視線で呟いた言葉。高順はどうするべきか考えていた。正直、愛というものとは縁遠い生活してきたためそこいらが麻痺しているのだ。だが、賈？が気になっているのも事実。

「（素直になれ、か）」

そして、先ほど黒の幻聴が言った言葉。それは、何故か納得できた。

「（まあいい。好きに生きるのが私だったはず、だ）」

『それでいい。ま、詠を泣かせるなどは言わん。だが、納得した形で別れなければ殺す』

それは、幻聴なのか分からないが、素直に頷いておくことにした。黒はこの瞬間から恩人であり、仇敵であり、超えるべき壁であり、義父でもあるのだから。

「そうだな……私自身、育ちが育ちだったのでどのように言えばいいか分からないが、お前には好意を持っている」

こうは言ったが、正直自分でもよくわかっていない。黒のおかげでここまで育ったが、恋とかそういう物とは無縁だったため、そこら辺は子供と言っている。まあ、知識や実践は豊富だが。とにかく、高順がそう告げると賈？は見とれるような笑顔を作った。

「ボクを最初に認めてくれたのはアンタだった。ボクが考えた策を何も言わずに実行してくれたのはアンタだけだった」

華雄も張遼も呂布も陳宮も、賈？が考えた策を実行することはなかった。まあ、基本が騙し討や敵を罠に嵌めるという物だったから嫌悪感などがあつたのだろうが。

「あいつらは戦って華々しく死ねばいいと思っただけで、私や月、そして領民たちは戦えないのよ？ 飯に負ければどうなるか……ただ支配されるだけならいいわ。でも全員が全員まともな人間とは限らないでしょ？ 十常侍のような連中だっている。下手をすればそこら辺の女たちなんて全員慰み者よ！」

高順もその意見には賛成だった。というか、実際自分たちも同じようなことをやった覚えがある。村を守っていた腕に覚えのある人間たちを殺した後、村を占拠した際に村人が「最初は食糧などを渡してできるだけ穏便に帰ってもらうつもりだった」と言っていた。それなのに、黒たちに歯向かった連中はそれを聞かずに出撃したらしい。その際にこのようなことを言っていたらしい。

『賊に隷属するくらいなら死を選ぶ！』

黒はそれを聞いた瞬間に大笑いした。そして、次のように叫んだ。

『自己満足のせいで村を道連れにするとはな！ 残された者がどうなるか分かっているのかねえ？ 死んだ者には何も出来ないというのに』

黒は心底楽しそうに笑っていた。そして、食糧や隠されていた武器などを奪ってその村を後にした。どうせなら、自分たちに歯向かった連中を止められなかったからこうなつたと絶望させることにした

のだ。

高順は、どうせ死ぬなら村人を逃がす時間稼ぎでもしておけばまた違っただろうにと思っていた。別に、自己満足をどうこう言いつもりはない。自分たちも所詮は自己満足で生きているから。でも、時と場合は選ぶ。

閑話休題

「まあ……確かに、大半の人間はそうだろうな。だが、私から言わせてもらえば甘い。黒が言っていたのだが、『清濁併呑できてこそ一流の武人』だそうだ。その理論で行けば、どこの勢力にも二流しかない」

「そうね。王として一流と呼べるのも、『孫呉の復興』という目的のために『逆賊董卓』と手を組むことにした孫策と、あくまでも『陛下を傀儡にしているから』という理由で連合に参加し、それが虚偽だとわかるとすぐに連合に非協力的に成った馬騰くらいでしょ？ それがいいか悪いかは別として。とにかく、アンタはボクの策を理解してくれた。ボクの思いを理解してくれたの」

そう言つて、高順を熱のこもった視線で見つめる賈？。外見は少女と言つていいものだったが、それに不釣り合いな妖艶さを漂わせていた。

「分かる？　今まで、月を守るために……ううん。月だけじゃないわ。華雄たちも守るために考えた策……でも、誰も認めてくれなかった。策を話しても、それは武人としてはって言ったり、ちよつとあくどいんちゃう？とか言われて……ボクはただ最善を尽くしただけなのに！」

そして、一変して狂乱気味に叫ぶ賈？。窓から波才がこちらを見て頷いていたので、人払いは済んでいるのだろっ。

「お前には私たち武人の気持ちは分からない！？　当然よ！　私は、文官であつて武官じゃない。あいつらみたいに、たつた一人で何人も相手することはできない。それどころか、そこら辺の賊一人に負けるほど弱い。なら、こっやって智謀を巡らせるしか無いじゃない」

「でもね？　華雄たちに否定されていたボクの『策』を理解して、実行してくれたのはアンタが初めてだった。その時、ボクは嬉しかった。やつと、本当のボクを出せるって思った。今まで、言えなかったいろんなコトを言える相手が現れたって」

「まあ、お前の愚痴を聞いていれば大体想像は付いていた」

賈？の愚痴の内容から高順はこう思っていた。賈？は自分たち側の人間だと。黒という父親の血を引いていると納得したものであった。

「うん。アンタから父様の事を聞いて思ったんだ。やっぱり、ボクは父様の娘なんだって」

そう言ってこちらを見つめる賈？。どこか危なげな光があつたが、なるほどたしかに黒に似ていた。

「最初は、目的のための駒だった。でも、アンタと一緒にいると楽しいの。ボクの考えた策を受け入れてくれる。月にすら話さなかつたボクの汚い部分も受け入れてくれる」

賈？はいつの間にか高順の胸に抱きつき、自分を見上げながら言葉を紡ぐ。普段の賈？とは思えないほどに『狂って』いる。

「だから好き。ボクの考えた策を認めてくれるから好き。ボクの考えた策を実行してくれるから好き。ボクの考えた策を成功させてくれるから好き。過程よりも結果を優先してくれるから好き。ボクたちを守ってくれるから好き。ボクの汚い部分を受け入れてくれるから好き。外道と言われても止まらない姿が好き。自分が泥をかぶつても勝利をもぎ取る姿が好き。周りがなんて言っても気にせず自分の道を行く姿が好き。無表情だけどボクたちのことを考えてくれるから好き——」

抱きつきながら自分の思いを喋る賈？。高順はその賈？を見ながら

口角を釣り上げた。

「（黒。賈？は間違いなく貴様の娘だ。見てみる……お前とは方向が違うが、この狂気）」

黒も狂っていた。そして、胸の中にいる賈？も狂っていると言っている。だが、それが賈？が黒の娘であることなによりの証拠でもあった。

「（思えばあの男も狂った切欠は『愛』だったか？）」

賈？の母親と恋仲になり、「弱肉強食の理」により引き裂かれ狂った黒。そして、やっと自分が頼れて、すべてをさらけ出せる対象を見つけたため今までの反動で狂っている賈？。似たもの同士とはこのことだろう。

「（だが、このような相手のほうがかえっていいかもしれないな）」

正直、自分についてくるならば『まとも』では無理だろう。どのような状態にしろ『このような』人間のほうが退屈しないし、面白い。

「だからよかった。アンタはボクの気持ちを受け入れてくれたもん。絶対に渡さない。アンタはボクだけの駒。ボクだけの将なんだ。ア

ンタは目的を果たすために止まらないでしょ？ 例え、自分が死んでも」

「ああ」

これだけは高順も譲れなかった。賈？を受け入れる覚悟はとっくに行っているが、目的を果たすのが最優先。

「でもそれでもいい。そうじゃなきゃアンタじゃないもの。でもね？ それまでは一緒にいて？ 別にボクだけみるとかは言わない。ただ、居なくなるまでそばにいてボクを認めて？ それだけでボクは『ボク』でいられるから」

「そのほうがありがたい。お前を受け入れる覚悟は出来ている。だが、私の目的の邪魔はさせん」

「……勝手な奴」

クスクス笑いながら高順の胸に顔を埋める賈？。高順はただ抱きしめるだけ。

「……ねえ……抱いて？」

顔を上げて呟いた言葉はとても妖艶な声だった。

「筆頭。よろしいので？」

「構わん」

波才は部屋の窓の下にあぐらをかきながら酒を飲んでいる。部屋の窓は開けられており、中には寝入った賈？に腕枕をしている高順がいた。薄い布団で隠れてはいるが、ふたりとも裸だと分かる。

「それにお前も聞いていただろうが、計画に変更はない」

「いえ。筆頭に疑念を抱いているわけではありません。ただ……ただ、賈？殿を残して「波才」……申し訳ありません。出過ぎた真似を」

「言っただけだ。例え、賈？を受けいれても計画に変更はない。首尾は？」

「董卓殿・馬騰殿・孫策殿の領内にいる『不穏分子』の特定は終了しています。今、盧俊義が黄信たちを使い蜀方面の不穏分子を洗い出しているところです」

盧俊義は元々が大商人の出なので、どこでもというわけにはいかないがそれなりに顔がきく。そのため、高順の金銭的なサポートや各地に散らばっている百八星メンバーのサポートを引き受けている。ちなみに、盧俊義は魏にも手を伸ばしているが自分と高順の繋がりを悟られないようにするため、百八星入りする前からの部下であった燕青を仲介として連絡をとっている。

「……こう……じゅん……愛してる……」

そして、あらかたの連絡が終わった瞬間に賈？の寝言が聞こえた。

「筆頭。これからは、できるだけ賈？殿のお側に。危うい状態です」

波才は、賣？が暴走して『計画』に狂いが生じるのを懸念した。そして、高順も理解しているのか頷いていた。

「分かっている。だが『愛している』か。愛と名のつくものにまともなものはないな。『愛憎』『愛執』『愛讐』『盲愛』『妄愛』…どれこれもまともじゃない」

「……筆頭。『愛情』は……どういうものでしょうか？」

波才のそんな質問に少し考えた高順はただ無表情に答えた。

「……所詮は『情け』だ」

第20話 受け入れられた思いと受け入れられなかった思い（後書き）

この二人はこんな感じです。純愛でもない……歪な愛とでもしまし
ようか？

高順も賈？の思いを受けられこそすれ、それに囚われることもない。
今回のサブタイはそこから来ています。

こんな詠ちゃんは好きですか？ 作者は好きです。

PS・今日、地元で成人式があつたので出席してきました。中学時
代の友人たちと会ったときに言われた言葉

「。。。って……老けたね」

外見年齢が20後半のシグマです。

第21話 動き出す諸侯（前書き）

「真・恋姫†無双」で検索したら、上から3番目に来ていたでござる。

こんな、原作にケンカ売っている小説のどこがいいのだろう……

第21話 動き出す諸侯

その日、洛陽の玉座に衝撃が走った。

「曹操が公孫賛を潰した？」

「ええ。先刻、高順の部下の戴宗から届けられた情報よ。曹操が公孫賛を奇襲し、公孫賛は劉備のもとへ逃げ延びる途中で野盗に襲われて死亡。散々髑られて殺されたそうよ？」

賈？は淡々と告げた。この場に董卓はいない。董卓は現在は劉協の後見人という形で劉協と共にいる。ここにいるのは董卓を除く董卓軍の首脳陣だけ。そして、その首脳陣は賈？と高順を覗いて顔を若干青くしている。

『散々髑られて殺された』

賈？はそう言っていた。公孫賛の顔は見たことがあるし、性格も連合軍解散時に少ししか見ていたいが、悪い人間ではなかった。それが戦時中の常と言ってもやはり同じ女性として感じる部分はあったのだろう。

ちなみに、高順は曹操が公孫賛を攻めるという情報を事が起こる数日前には入手していた。すでに、宋江たちは魏軍に兵として潜入している。宋江は夏侯惇、花榮は夏侯淵の部隊にそれぞれ配属されたらしい。とにかく、宋江たちから情報は逐一流れてきている。さすがに、どこにいつ攻めるかという情報を実行の数日前に流すことしかできないが。

「（まあ、これで劉備が公孫賛の仇とかで暴走するなら…死ぬ。そして、蜀はこちらが併呑すればいい。理性を持って逃げて蜀入りするなら……まあ、監視か）」

賈？が今後の方針を話している中で、高順は定位置である柱の横で柱にもたれかかりながら劉備の今後の行動のシミュレートをしている。傍目からは相変わらずの無表情なので話に参加しているのかどうかも怪しい。まあ、元々参加する気はないので華雄たちも用があるときしか話を降ってこない。

「（ま、個人的には劉備が暴走して死んでくれれば楽なんだがな。そのほうが蜀の併合もしやすい）」

一応、現在蜀で最も有能な者とされる嚴顔が気づくように、街で劉備の理想や領地での治世のことを噂させていた。だから、もし劉備が蜀にくれば受け入れる可能性がある。だが劉備が死ねば…どうなるか？正直言って劉璋の支持率は零と言っていい。付き従っているのは劉璋の下で甘い汁を吸いたい連中か自分の好きなように私腹を肥やしている連中のみ。

「（もし、劉備が来なければ我らが蜀をいただく。まあ、敵顔を太守に据えれば問題はないだろう）」

正直、現在もこんな感じなのだ。正直言って、黄巾の乱以前とそこまで変わっていない。変わったとすれば、劉協を取り巻く人間が『ある程度』善人になっただけだろう。

「（さあ……賈？。お前は前が望む策を言え。私が全て現実に見せよう。曹操を殺せと言われれば殺そう。董卓をどのような手段を使っても大陸の覇者にしろというならそうしよう。さあ、どうする？）」

高順と賈？の関係は表向きは変わっていない。だが、賈？の思いを受け入れてから賈？が自分のところに来る回数が増えた。だが、そこら辺の恋人などのように甘い空気はない。どこか歪。賈？は今まで董卓のために動いてきた時に誰にも頼れなかった鬱憤を晴らしているように思える。

「（依存……いや…それとは次元が違うか？）」

正直、自分でもよく分からないので「そういうこと」として納得するしか無い。そのようなことを考えていると、賈？から質問が来た。

「高順。曹操は次、どうするか予想できる？」

「……十中八九劉備を攻める。恐らく、数日のうちにな。劉備と公孫贇は学友で、それなりに仲が良かったと聞く。公孫贇の死亡という情報に混乱しているうちに攻めると言ったものだろう」

高順が大陸中に部下を潜ませているのは董卓軍では周知の事実。そのため、高順はこのような質問をされることもあった。

「高順。だが、それは急ぎ過ぎではないか？ あの曹操が焦りすぎのような気がするのだが」

華雄がそう告げるが、高順はそれを首を振って否定した。曹操が焦っている。たしかにそうだろう。だが、原因はこちらにある。

「状況が奴の想定していたものと違うからな」

高順は現在の大陸の状況が曹操の望んでいる状況ではないことに気づいていた。「覇道を進む」と宣言した曹操がある程度の予測を立てていないはずがない。

「そもそも奴の想定した状況が違い始めたのは、私たちが連合に勝

「つたからだ」

「え？」

高順の言葉に張遼が首をかしげた。自分たちが連合に勝ったからと言ってなぜ焦るのか。それが分からなかった。

「そもそもあの連合の目的は「逆賊董卓」を誅殺するものではない。まあ、袁紹はそう思っていただろうがな。だが、曹操や孫策といった有力諸侯はその時点で漢王室の弱体化に気づいていた。つまり、あの連合において武功を立てて名を上げる。早い話が「今、我らの陣営にはこれだけの力がある」と宣伝して、弱小諸侯などを自分たちに付くように誘導したかったのではないか？ 特に、孫呉は袁術の支配から逃れるためには一枚岩とならなければならなかったからな」

珍しく長時間喋った高順に全員が驚きつつも発言の内容は理解した。確かに、あの時点で漢王室の権威は地に落ちていた。華雄たちもあの戦が終わればかつて秦という大国が出来る前にあつたとされる「戦国時代」がやってくると思っていた。だが――。

「でも、結局その時代は来なかった。いえ、現に曹操が国盗りをしているから『戦国時代』と呼ぶほどの大事にはならなかったと言ったほうがいいわね」

曹操が国盗りを行っているが『戦国時代』が来なかったと宣言した賈？。それは何故か。それは、高順により連合軍に大義が無いことを暴露されたことによる混乱と、賈？により汚職を行っていた宦官や役人たちが一掃され、董卓という誠実な将に守られている劉協の地位向上によるものである。

「（まあ、董卓はともかく、私が誠実かといえば……いや、誠実だな。『結果』を出すことに關しては）」

賈？が高順が推測した情報を元に考えた結果、劉備はどちらにしろ勝てないと判断。

「そうなると……音々音。劉備たちが生き延びるためにはどうすればいい？」

「ええ！？　ねねが答えるのですか！？　えっと……えっと……どこかの諸侯にかくまってもらうか……後は、太守がいない街に逃げこんでそこで再起を図るとか？」

「まあ、概ね間違いじゃないでしょうね。確実に曹操につくことはないわ。でしょう？　高順」

陳宮の答えに満足したのか賈？は再び高順に話を振る。この場にい

る人間で一番国外の情報に詳しいのは高順だ。

「ああ。いるな？ 戴宗」

「はっ」

高順が声をかけると天井裏から百八星の一人である戴宗が現れた。戴宗は、『神行法』と呼ばれる高速移動術を持つため、高順の命令を大陸中に散らばっている百八星に伝えるメッセンジャーの役割を果たしている。何気に、高順からの信頼が波才、宋江に続いて三位だったりする。

「お初にお目にかかります。高順隊の戴宗と申します。では……まず、劉備が曹操につかないことについてですが、曹操は劉備軍の将である関羽に関心を持っています。曹操といえば同性愛者として有名です。まあ、例外として天の御使いもいますがね。とにかく、そのような理由から関羽は曹操を苦手としているようです」

曹操の噂を知ってはいたが、関羽を狙っていることは知らなかったようで、華雄たちが微妙な顔をしていた。だが、張遼がここであることに気付く。

「あれ？ でも、何でアンタが知っとんの？」

「……あそこは入るのは楽なんですよ。諸葛亮や鳳統の目を逃れれば楽に軍に入れる。万民のために立ち上がった義勇軍が始まりですからね。劉備の理想に共感したと言えは潜入するのは楽でした。まあ、私ではなく百八星の他の連中ですがね」

つまり、高順の部下はすでに劉備軍に入り込んでいる。しかも、関羽が曹操を嫌っているなどという情報はよほど上の方にいなければ入手できないはず。

「それと趙雲子龍という武将が劉備軍にいます。時期的には連合解散の後に参入したようです」

戴宗から引き出される劉備軍の新武将の情報。それを聞いたびに華雄たちはそこまで侵入できる「百八星」とそれを統率している高順の凄さを実感している。そして、ふと考える。

——もし、高順が自分たちを裏切れば自分たちは勝てるのか、と

華雄と張遼がそう思った瞬間、高順が二人の顔を見て唇を大きく釣り上げた。まるで、自分たちの考えを肯定しているかのよう。

「——ッ」

目をこすって高順を見直すと、そこには相変わらずの無表情の男がいた。仮にも、あの連合においてたった一人で？水関で董卓のために戦った高順。あの時、自分たちは認めると言っただけ。なら、仲間を疑うことはしてはならない。二人はそう自戒するが、一度考えってしまった疑念を払拭する事はできない。そもそも、高順が何も言わないので不安は募るばかり。

「……」

そして、それを見つめるのは賈？。

それは、どこか歪な空気だった。

「霞たち…アンタのことを疑っているわよ？」

「まあ、そうだろうな」

その夜、高順と賈？は互いの体を貪りあつた後、寝台の中で裸でだきあいながら会話をしていた。

「まあ、アンタの秘密主義は今に始まったことじゃないけど…それより、アンタのことだから公孫賛の最後を戴宗辺りに見届けさせたんでしょ？」

「ああ。別に同盟を結んでいるわけでもないから構うまい」

何故、公孫賛が賊に罅られて殺されたのを戴宗が知っているのか？
それは、戴宗がその現場を見ていたからに過ぎない。なら、何故戴宗は助けなかったのか？ それは高順の命令にはなかったから。
何故、高順は助けるように言わなかったのか？ それは公孫賛はそこまで重要な駒ではないから。ただそれだけ。

「公孫賛は別に死のうが劉備のもとへ落ち延びようがどちらでもいい

い。どちらにしろ劉備の曹操への対抗心などが上がるだけだ」

「クスクス。本当にアンタって冷酷ね」

ここまで冷酷になれる人間がいるだろうか？ 結果のためには過程を気にしない。この男は『策』の成就なら自分の部下だけではなく自分の命も簡単にかける。それを未だにしていないのは『その時』ではないから。

「さて……劉備には踊ってもらわなければな。まあ、そこは関勝に任せるか」

「桃香様。ここは逃げるしかありません」

「何を弱気なことを！」

「だが、愛紗。魏軍ははつきり言ってこちらより上だ。いくら、朱里たちの策やお前が一騎当千の実力を持つとはいえ数の暴力には勝てん」

劉備軍は現在混乱していた。公孫贛軍が魏に落とされたと報告が上がった時から、朱里を筆頭とした文官が降伏か逃亡を提案し、関羽を筆頭とした武官が徹底抗戦を訴えているのだ。現在は、興奮している関羽を武官の中でも冷静な方である趙雲が抑えているところである。

「愛紗さん。？水関の時とは状況が違います。あれは、高順さんが「火薬」とそれを使った様々な策、付近の盗賊たちを引きこむだけの力量、私たちの感情を利用した罠などをしかけていたから寡兵で連合軍を相手できたんです」

その他にも高順と七乃が知り合っていたこと、高順と孫策が秘密裏の同盟を結んだことなどもあげられる。とにかく、あれは高順だからこそ使える戦い方。

「（そう…どう考えても私たちは無理。だって…そのような手段は使うわけにはいかないから）」

劉備軍が掲げる理想のせいで、手段を選ぶことになっている。さらには、劉備は「仁君」などと呼ばれている。そのせいで、「仁君」にふさわしい行動をする必要がある。

—— 全ての人が笑える世を作る ——

この漠然とした理想のせいで、行動が制限されていると言ってもいい。諸葛亮と鳳統が劉備の方を見ると、劉備は公孫賛が死んだという情報を聞かされてから浮かない顔をしている。だが、それに囚われている時間はない。

「でも、逃げるにしてもどうするのだ？」

張飛は関羽のように貞操の危機が無いためか、ある程度冷静である。まあ、逃げるのには不満そうだが。

「皆様…少しよろしいでしょうか？」

「関勝さん」

全員が、どうするか悩んでいるときに口を開いたのは関勝という武将。

「実は…放浪していたときにこのような噂を聞きました……」

関勝から得られた情報。それは、蜀の現太守である劉璋の噂。そのため蜀を取ってはどうかというもの。

「劉璋は暗君です。それを打ち倒しても劉備様の名前に傷はつかない。それどころか、劉備様の治世で感謝するはずです」

関勝の言葉はその場にいた全員に染み込んでいた。

「（さあ…筆頭のために踊ってもらいましょう。なあに…あなた方は何も心配することはない。余計な事を考えない限りは害することはないのですから）」

関勝。高順の部下である百八星の一人。魏定国などと共に趙雲と同時期に劉備軍に潜入している男。武だけではなく知にも長けている将である。そして、関勝の誘導で劉備軍は民を連れて蜀へと向かうことになった。

そして、洛陽では――。

「……そろそろ教えなさいよ。アンタが、領内の盗賊たちや月に不満を持っている旧宦官派の連中を抱き込んでいるのは知っているの。それもアンタの『目的』のためでしょ？」

公孫賛の話題が終わった後に賈？がそのようなことを切り出した。

「……ふむ。存外、お前の行動力をバカにすることはできんな」

高順は素直に驚いていた。一応、秘密裏に進めていたのだが賈？には感づかれていたらしい。

「教えてもらっわよ？」

「ふむ……まあ、教えるのは構わんが邪魔はするなよ？　悪いが、ジヤマをするようなら殺す」

高順は無表情で纏う雰囲気は幽鬼のようではあるが、目の奥には賣？たち軍師のような『それ』があった。だが、今の高順の目には何も無い。それが、高順の元々持つ無表情や雰囲気と合わさり、まさしく『鬼』にふさわしいものになっていた。

「……いいわ。教えて」

しかし、賣？はそれに臆することなく高順の目を見つめた。

「いいだろう。教えてやる」

それは、果たして『主のための策』か『自分のための策』か。

第21話 動き出す諸侯（後書き）

次回、高順の「最終目的」が明かされる！ その時、賈？の決断とは！？

まあ、次回予告をするならこんな感じかな？

公孫贇はあっさりと死にました。そして、裏事情で。。。されて死んだという。いや、むしろ落ち武者狩りにあわなかった原作もおかしい…いや、それは行っちゃダメか。とりあえず、この小説はこんな感じで「人気キャラだから」とか言う理由で生き延びたりはしないです。例外は詠と月。この二人は死なない、死ぬにしてもひどいものじゃないです。

ちなみに、主人公ですが……身内や同盟国の人間以外がどうなろうと気にしません。

つーか、今思った。華蝶仮面と出会ったら…ヤベエ事になりそう。

「美と正義の使者、華蝶仮面参上！」

「何を持って正義と成す？ 素直に言えばどうだ？ 自分の独善の使者と」

と、こんな感じで切開始めそうだ……。

第22話 壊れた人間（前書き）

主人公の言動などがおかしい可能性があります。例えるなら文脈とかいろいろ。ですが、それは仕様です。ぶっちゃけ、高順は不安定で壊れているので。

第22話 壊れた人間

「結果から言おう。私の目的は、董卓という「強者」による大陸統一。そして、それに伴う不穏分子を洗い出しとその粛清だ」

「……でも、それがアンタの命とどう関係あるわけ？ それだけ聞いていれば、別にボクが邪魔する必要はないと思うんだけど？」

高順の計画。それはとても理想的なもの。しかも、高順なら不穏分子の粛清くらい楽にできるはず。なのに何故？

「いいか？ 不穏分子を同時多発的に動かせば董卓軍が精強といえど勝つのは難しい。数としては互角だからな。いくらお前や周瑜などが軍師として優秀だとしても、無理だろう？」

「そうね。例えば、劉備軍を併吞してその兵力を手に入れたとしても難しいわね。それならば、むしろどこかの軍のように統率が取れている……ほうが……まさか」

賈？は分かった。分かってしまった。目の前の愛しい男がしようとしていること。

「そうだ。統率が取れなければ、統率をとればいい。私の悪名はそれなりに知られているからな。あらかた敵がいなくなった時に野心をいだいて離反したとしても違和感はそれほどない」

「アンタ……まさか、最初からそれを！？ 霞たちに危険視されていても弁解をしなかったのも！」

そう思えばいろいろと納得できる部分があった。先ほどの会議において華雄と張遼が高順への疑念を抱いたことにも気づいていた。だが、それを加速させるような高順の態度を不信には思わなかった。それは、高順が他人の評価を気にしないからと思っていた。

「黒が言っていた。私の考えはいずれ身内に殺されるものだ。計画を考えついたとき柄にもなく大笑いをした。まさしく、黒の言うとおりになるからな」

高順は本当に珍しく顔をほころばせていた。しかし、それは自嘲の色に染まっていた。

「分かっている。私が狂っているなど。だが、これこそ我が望み。董卓の治世は素晴らしい。確かに、甘い部分はあるが締めるべきところは締めている。劉備のようになだ甘いだけでもない。曹操のように過程を重要視していない。連合戦の折りに何を思ったかは知らんが、ただ守られるだけの少女ではなくなった。故に為政者として

は優秀だ。ならば、主の善性を肯定するために不穏分子は肅清しなければならぬだろう？ それは強大な「悪」がいればより輝くものだ」

それに、高順は董卓のような「強者」に「弱者」が守られる世を望んでいる。董卓を頂点とする状況に不満を持つ者は邪魔なだけ。だからこそこの計画を考えついた。

「でも、だったら余計にアンタが出る必要はないでしょ！？ 統率を取らせるだけならアンタの部下にさせればいい。アンタの部下ならうまく逃げることでやってできるじゃない！」

「私はつくづく太平の世には不必要な存在だ。乱世は私が道連れにしよう。それに、不穏分子がいなくなればしばらくの間だが、治世はうまくいく」

高順は黒の元で生きてきた時から自分は今のような乱世でしか生きられないと自覚していた。太平の世では自分のような者は不要。居れば無用な不安を生み出すだけ。だから、不穏分子や乱世を道連れに自殺をしようとしている。

「だから邪魔はさせん」

賈？をどかして服を着て出て行った高順の言葉には一切の感情がこ

もっていなかった。

「なんでよ……ボクと一緒にいてくれるって……一蓮托生って言ってくれたじゃない。なんで……なんでよお。死んだように見せかけてどこかに隠棲すればいいじゃない……」

許容量を超えたのか寝台の上で布団に包まって嗚咽を漏らしている賈？。だが、その高順はここにはいない。

「父様の馬鹿あ……なんで……なんでアイツをあんな風にしたのよお。なんで普通の武将としてボクと会わせてくれなかったのよお……」

無論、賈？もこれが言っても詮無いことだとは分かっている。そもそも、自分の父親が高順の村を襲わなければ自分と出会ったこともなかった。だが、これではあんまりではないか？

「やっぱり、ボクは不幸なのかなあ……」

月に一回やってくる「不幸な日」。高順が来てからはなくなったので嬉しかったが、最後の最後でやってきた。よりもよって「最悪な不幸」が。

高順は一人城壁の上で酒を飲んでいた。一応、戴宗が近くに隠れているのだが高順から呼ばない限り姿を見せることはない。

「……私はどこまでいつても「弱肉強食」という理からは逃げられない。それが私の全てだからな。分かるか？　今は「強者」とは必ずしも言えない董卓が、「強者」である私を倒すことにより董卓は「強者」となり、董卓に逆らうものはしばらくでない。少なくとも董卓が第一線にいる限りはない」

高順は一人でつぶやいていた。先程言った事は本音ではあるが、こちらのほうが重要なのだ。高順が本当に望むのは「弱肉強食の理」により自分が倒されることで董卓を「高順以上の強者」であると大陸に知らしめること。高順は自分が周りの諸侯などから「強者」とみられていることには気づいている。だからこそ、それを利用して董卓を「強者」へと押し上げる。

『馬鹿よ……馬鹿……』

部屋を出る時に泣いていた賈？の声が未だに耳に残っている。自分の主を覇者へと押し上げるために死力を尽くす者は数あれど、自分の名前を利用して自分を生け贄にして主を覇者へと押し上げる者がどれだけいるか。

『それに……アンタが死んでも変わらないかもしれないじゃない！　むしろ、アンタが死んだことで動き出す奴らもいるじゃない！』

頭の中では賈？の言葉が次々と鳴り響いている。そして、苦笑する。自分はここまで女々しかったかと。

「だからこそその七乃だ。奴には、私が死んだあとに生き残った部下を率いて董卓に従うことを命じている。つまり「高順」は死んでも「高順の思想」は死なない。そう……「悪をもつて善と成す」を核とした「手段を選ばずに主を強者とする」思想はな」

ここにはいない賈？へと喋るように口を開く高順。目の前にいないからこそ喋ることができる。

高順は自分が『現時点での不穏分子』を道連れにする。自分が死んだあとに出てくるであろう不穏分子は張勳に処理させると決めている。

「元々七乃に目をつけたのは、私の後継者として育てるため。それ以上でもそれ以下でもない」

そして、最後の仕上げとして「師匠殺し」をさせる。こう考えると自分がどれだけ壊れているか理解できる。わざわざ、このようなことを考えついて実行させようとする人間が壊れていないはずがない。

「なあ…黒。アンタはこういう時はどうしたんだろうなあ？」

くつくつと自嘲の笑みを浮かべながら高順は空を見上げる。そこに

は冷たいまでに光っている月があった。

「だが、止まらん。止まれるわけがない。悪をもって善と成す。これほどの「悪」はそうはない。黒…見ている。私は、私の命を持って董卓の善性を肯定しよう。私という「悪」を打ち倒すことで董卓は「善」となる。民衆は「悪」を打ち倒した者へと傾倒する。劉備の政治がまさしくそれだ」

高順は壊れたように饒舌にしゃべり続ける。

「民衆に重要なのは理想でも思想でもない。そう……『自分たちを守ってくれる存在』こそ重要。劉備のような思想は必要ない。曹操のような霸道など必要ない。ただ、その行動で示せばいい。そうすれば自ずと民はついて来る」

高順は盃を握りつぶすと再び月を見上げた。

「そつだ……「弱者」を守るために「強者」を作る。それこそが私の……『俺』の望み」

かつて黒へ刀を突きつけて宣言した言葉。

——「弱者を守るために強者を作る」——

そのために今まで生きてきた。そのために手段を選ばずに戦ってきた。それがすでに眼に見えるところまで来ている。

「だからこそ……油断するわけにはいかない。特に天の御使い。義の首脳陣の中での評価はそこまで高くはないようだが……甘い。天の世界とこの世界は常識が違うはず。つまり我らの思いつかない武器を考えるはず。それすら分からずに過小評価をしているようでは俺には勝てん」

高順は宋江たちから送られてくる情報の中で天の御使い北郷一刀の評価が低い事を疑問に思っていた。まあ、それは一部の者のせいらしいが。とにかく、高順は一刀を警戒していた。

「天の知識というものがどういうものか分からんが、魏国内での政策を考えると少なくとも黒と同じような知識を持っていると考えるべきだ」

黒が残した資料には魏で一刀が献策したという政策も載っていた。つまり、このことから一刀は黒と同じような知識を少なからず持っていると言つ事。

「まさか…仙人が接触してきたのも奴の仕業か？」

天の御使いという事で以前接触してきた貂蟬という仙人とも面識があるのかと考えた高順。そして、一刀の警戒度を上げることにした。

北郷一刀。何気に、高順から高評価を受けていたりする。

「……………高順。絶対にアンタを手放してやるもんですか……………絶対に……………」

高順の部屋で賣？はどこか思いつめた顔でそう呟いていた。その目は焦点が合っていないかった。

第22話 壊れた人間（後書き）

詠の「不幸な日」でした。原作ではギャグだったのに……こっちはめっちゃシリアスに……

高順は、自分の死を持って董卓を「強者」として「弱者」を守らせるという考えでした。他人任せなんて！と思う方もいらっしゃると思いますが、高順は自分がそういう事をできないと自覚しているのです。そもそも、こんな思考の人間が太平の世にいるのはおかしい。と高順は思っています。

さて、次回は主に劉備軍のお話になります。といっても、結局は踊らされていつの間にか董卓軍に併呑されているかもしれません……

第23話 退場する者とさせられる者。

「華雄將軍！ 斥候の報告で、ここより二日の位置に劉備軍が迫っているようです！」

「分かった。お前たちは警戒を緩めるな」

「御意」

華雄はそういつて部下を下がらせた。そして、近づいてきたのは黄蓋。

「しかし、華雄よ。お主の主は何を考えておるんじや？ 劉備たちを蜀へと護衛するなど」

黄蓋の疑問。それは、曹操に領地を追いやられた劉備たちを蜀へと導くこと。黄蓋たちは呉の領内を通るために監視としてここにいる。

「何でも蜀を手中に収めたいらしい。陛下の勅命で劉備を蜀の太守にしてもいいのだが、劉璋が反対するだろうからな。それなら、劉備に劉璋を廃してもらってからのほうがいいだろうということらし

い。まあ、早い話が『劉備の蜀盗りに協力することで今後の立場を優位な物にしておこう』ということだ。ちなみに、そこら辺を許可した陛下の書状もここにある」

「何と言うか……お気の毒としかいいようがないのう。儂らは孫呉が繁栄していけば問題ないから別にいいのじゃが」

「まあ、奴らも「皆が笑って暮らせる世」への協力ができるからいいのではないか？ まさか何がなんでも自分たちが頂点に立って民を導かなければならないという連中でもあるまい？」

もし、そのような連中だとしても世論は付いてこない。むしろ『恩知らず』と罵られるだけだろう。

「とりあえずは待つしか無いな」

「そうじゃな」

昔、いろいろあったが今では酒を酌み交わす仲になった二人。何気に互いの戦術・性格などを理解しているので連携はよかったりする。

「星さん。魏軍はどのような感じですか？」

「こちらに向かって猛進しているな。それまでに逃げ切れればいいのだが……ん？」

先頭にいる趙雲と諸葛亮の前に漢と呉の旗を掲げた軍団がいた。漢の旗を掲げているのは董卓軍、呉の旗を掲げているのはもちろん孫策軍。その軍団がこちらへと近づいてきている。

「こちらは董卓軍が将華雄と孫策軍の黄蓋殿だ！　ひとまず貴殿らには呉の領地に入ってもらう！　その後、陛下より勅命を貴殿らに渡すように命を受けている」

華雄が前にでてそう叫ぶと趙雲たちは啞然とした。どのような理由があれど、このようなことを言うとは思っていなかったらだ。しかも、横には黄蓋がいる。つまりは、孫呉もそれに協力しているということ。

「（なんで？ 待って……まさか私たちが蜀へ行くことがばれていたら？）」

諸葛亮はこの状況に不信感を抱いた。まるで、誰かに踊らされているような手回し。蜀の領地に入る事は許されたものではないが、そこは事後承諾や劉備の治世で文句は言わせないつもりだった。だが、一時的に呉の領内に入り魏軍の追撃を躲してさらには陛下からの勅命があるという。この時点で誰かに踊らされている。諸葛亮はそれに気づいた。

「（内部情報が漏れていたにしろ……桃香様の天下はもう望めない）」

この後の予想はある程度つく。恐らく勅命とはいい噂を聞かない劉璋を廃して劉備が蜀の太守として治めろというもの。つまりは、漢の臣下になれということ。董卓が陛下の後見人になってから漢王室の権威は再び上がっている。しかも董卓の名声は洛陽だけでは収まっていない。

「とりあえず、劉備殿に伝令を送ってもらいたい。先頭の方から呉の領内に入ってもらえば我々が護衛しよう。ついで、奴らもな」

華雄が指を差した方向には小高い丘があり、そこには「悪」の旗を

掲げている高順隊約400人がいた。少数精鋭。この言葉を体現したように高順隊は高順を筆頭に凄まじいまでの威圧を放っている。

「（これは……もしかして、最初から仕組まれていたかもしれないですね）」

諸葛亮は内心でため息を吐いていた。高順と賈？の二人の噂は聞いたことがある。手段を選ばずに主に『勝利』を献上する高順と、それを使いこなす賈？。この二人ならここまでやってもおかしくない。

「星さん。桃香様の下へ伝令を送ってください」

「承知した」

趙雲もすでに自分たちの置かれている状況に気づいたのかすぐに伝令を送った。それを確認した高順たちはすぐさま劉備軍の後方へとかけ出した。

「劉備がどのような選択をするにしろ……こちらが恩を売ったという事実は変わらない。なら……もう少しふっかけるだけだ」

どうせなら少しでも有利な条件をふっかける。外交での基本だ。

「くそつ。鈴々！ 魏軍はどのくらいの規模だ！」

「とにかくいっぱいなのだ！」

劉備軍は弱小と言ってもいい。目立った将は関羽と張飛、趙雲しかない。他にもいないわけではないが、関羽たちと比べると見劣りする。さらには、庇護対象である民ばかりが多い。

「このままではまず」ならばその役目……我らが引き受けた」え？」

関羽の呟きに返事があった。関羽が顔を上げると夕暮れの中でも分かりづらい群青色の鎧を着た集団が自分たちに向かってきた。

「董卓軍高順だ。お前らは民を連れて呉の領内へと入れ。陛下より

勅命を賜っているからな」

「な!？」

高順たちは関羽の返事も聞かないままに義軍へと駆けていった。残されたのは呆然としている関羽たちだけ。

「『現蜀の太守である劉璋が悪政を行っていると民より上申があった。劉玄德。貴様は、これより蜀に入り劉璋に代わり蜀を治めよ。』以上が陛下の勅命である」

「（ほゝ変われば変わるもんじゃな）」

陛下からの勅命を劉備たちに伝えている華雄を見ながら黄蓋は内心感心していた。まさか、猪武者の華雄がこのような役目を引き受けることができるとは思っていなかったから。

「（さて…どちらにしろ劉備にこの勅命を無視することはできんな）
」

「……華雄さん。それは、漢の臣下になれということですか？」

「……陛下の勅命に疑問をもつか……まあ、陛下自身も一度王室の権威が落ちたことを自覚されておられたからその疑問も納得出来る
と仰られている。だが、現実を見る。漢王室は再びその権威を蘇ら
せている。貴様ら…まさか、自分が頂点に立たなければ気がすま
んのか？」

華雄はそう言つて劉備たちを見る。関羽と張飛はまだここにはいな
いが、主要な将がここにいる。だが、大半がこの状況を受け入れて
いるように思える。

「分かったか？ 貴様は漢王室のもとでその理想を叶えるがいい。
先の連合戦のような失敗をしない限り、陛下は貴様の理想を叶える
手伝いをしてくださるそうだ。返事は？」

「……はい。その勅命……拝命いたします」

この瞬間、劉備は天下取りの舞台から姿を消した。だが、ある意味
では幸福だっただろう。曲がりなりにも自分の理想を叶えることが

できたのだから。

「進め！ 下手に呉や董卓たちの領地に入られたら手出しはできん！」

曹操はそう言って兵を鼓舞する。横にいる一刀も焦っているようだった。

「華琳！ あれ！」

「……「悪」の軍旗。高順か」

前線では「悪」の旗と「夏」の旗がぶつかり合っている。どうやら間に合わなかったらしい。

「……でも、あの場所は呉の領内でもないわね……ここで少しでも奴の動きを知っておかなければ」

「待つて！　ここは退いたほうがいい。なんか嫌な予感がする」

「アンタ華琳様の決断に逆らう気！？」

一刀はそういつて曹操を止めようとするが、そばにいた荀？に止められた。確かに、曹操の考えは間違っていない。現在、高順達がいるのは国境付近とはいえ空白地帯。曹操がここらを得たという証拠もない。だから、ここで戦うのはおかしくはない。だが――。

「（嫌な予感する……？水関の時のような……）」

そう。この時ばかりは一刀の意見を聞いておくべきだった。戦力的にも戦術的にも不確定要素が多いこの状況で高順と戦うのは蛮勇以外の何者でもない。

「（スマンが…天の御使い。貴様という不確定要素をそのままにしておくわけにはいかないのではな）」

高順は内心の策を表に出すことなく夏侯惇たちと戦っていた。

第23話 退場する者とさせられる者（後書き）

いよいよ、クライマックスに入ってきます。ちなみに、ラストはただ決まっています。とりあえず、『高順らしい』結末にはするつもりです。

第24話 終わりの始まり

高順隊は魏軍の先鋒である夏侯惇軍と戦闘を行っていた。

「波才！ お前は夏侯惇の相手をしておけ！」

「御意」

高順は夏侯惇の相手を波才に任せると兵士を次々と斬り殺し、波才の方へと蹴り飛ばしていく。

「波才！ 貴様に奪われた右目の仇！」

「おやおや……穏やかではないですねっと」

波才は蹴り飛ばされてきた魏軍の兵士の死体を盾にしながら夏侯惇の相手をしている波才。高順が波才の方へと死体を蹴り飛ばしているのはこのため。人間の体というのはそこそ丈夫であり、使いようによってはそこら辺の棍棒よりも硬かったりする。波才はそこまですぐに大柄ではないが許？並の怪力を公孫勝などから仙術で与えられている。そのため、このような芸当も可能なのだ。

「貴様ア！」

ただ、この芸当はかなり他人からの心象が悪い。夏侯惇にしてみれば大事な部下を汚されているのと同等的なのだ。

「いやいや…『武器』が大量に生産されるから楽ですよ」副長！
例の奴持つてきました！」

後ろからやってきた高順隊の連中が大きな台車に乗せているのは、以前？水関で奪った李典の螺旋槍を解析して創りだした『螺旋大筒』。早い話がミサイルである。さらには、螺旋槍の回転メカニズムも必死に解析して、貫通力を上げたもの。

「本来は攻城兵器だが……中に火薬を詰め込めばこのような芸当もできる。撃て！」

波才の号令と共に螺旋大筒が魏軍の兵が密集しているところへと撃ち込まれ爆発した。中には、戦場や訓練場に落ちていた錆びたり欠けたりしている剣や鎧の欠片や副次効果を狙った油などが入っており、波才の狙い通り爆発による死者よりも中身のせいで負傷者が増えている。中には目が潰れたりしている者もいる。

「いやいや……何でも無駄はいけませんよね？」

盗賊時代は満足な補給ができなかったため、このように欠片ですら武器とする波才たち。威力は小さいが使い方次第という言葉を体現していた。そして、波才は爆発を避けた夏侯惇に向き直る。

「さて、夏侯惇さん？ 後ろの方には曹操さんが来ていますねえ……
…此処で質問なのですが、天の御使い君の役割とはなんでしょう？」

「なに！？ 北郷が今関係あるのか！？」

「いえ？ 『今』は関係ありませんが……私は人の心の機微という
のには敏感なんですよ」

波才はおどけるように口を開く。

「（見つけた……曹操、荀？、許？、典韋、そして……天の御使い）

「
先程の螺旋大筒による火で姿を隠していた高順は目的の人間を見つ
けるとかけ出した。薄暗くなってきた夕方では視認しにくい群青色
の外套をまとう高順を一般兵が見つけることはできなかった。」

「曹操孟徳。覇道を行く者……だが、まだ少女でしかない。あなた
方は曹操という「王」を見ている。もちろん、そういう事はないの
でしょうがね。情報では褥の中でも仲睦まじいようですし。まあ、
私が何を言いたいのかというと、『何故、曹操は北郷一刀を信用して
いるのか』ですね」

「……?」

夏侯惇には波才が何故このようなことを言っているか分からなかつ
た。何故、曹操が一刀を信用しているのか? それは、一刀も曹操
の臣下であるから。夏侯惇はそう答えた。

「ククククククククククク。そう、たしかにそうだ。だが、曹操があゝの青年に求めているのはそれだけではない。形はどうあれ曹操は『北郷一刀』という青年がいるからこそ平静でいられる。いくら太守といえど……いくらあなた方という愛人を持つていても所詮は人間。寄りかけられる存在がいなければならぬ。あなた方は曹操に寄りかかっている。では曹操は？　そう……あの男に寄りかかっている。自覚があるうがなかるうがな！」

人は一人では生きて行くことはできない。どのような立場にいるにしろ寄りかけられる存在がいなければ正常ではいられない。特に曹操は「覇道を行く者」と宣言しているので寄りかけられる存在がいらない。夏侯惇たちは確かに頼れるが、彼らの上に立つものとして弱みを見せることは許されない。だから、一刀こそ弱さを見せられることの出来る存在。北郷一刀という青年は曹操の精神安定剤。波才はそう考えている。

「では、その北郷一刀がいなくなれば！？　死んでしまえば！？」

「ま、まさか！」

夏侯惇が振り向くとそこには一刀の胸に倭刀を突き刺している高順の姿があった。

「華琳様！ 下がってください！」

突如、目の前に現れたのは高順。すぐさま許？と典韋が曹操たちを庇うように前に出る。だが、高順はそれを無表情で見るだけ。

「意外と……やるわね」

曹操は内心焦りすぎたと思っていた。現在の大陸の状況は自分に悪い。それを自覚していたから焦っていた。だから、劉備をここで倒したかった。董卓たちが劉備をどうするかある程度予想が付いていたから。こんなことなら一刀の忠告を聞いて撤退しておけばよかったと自嘲していた。

「別に……それに目的は曹操。貴様ではない」

「え？」

「グ——ッ……やっぱり狙いは俺か……？」

次の瞬間、目の前にいたはずの高順は消えた。許？や典韋すら気づかない速度で、自分の隣にいる一刀の胸に倭刀を突き刺していた。

「『無拍子』……実に使いやすい」

高順の必殺の技『無拍子』。相手の呼吸などに合わせる必要があるが、そのコツさえ掴めば一対一においては正しく『必殺』となる。

「天の御使い……貴様の力量が未知数なので……こうさせてもらった」

「……なるほど……でも、俺にも意地があるんだ！」

胸に突き刺した倭刀を動かそうとした瞬間に、一刀が腰に取り付けていたヒ首を高順の右目に突き刺した。

「チイツ！」

反応が遅れた高順は右目に匕首が刺さりながらも一刀を蹴り飛ばした。我に返った許？と典韋が雄叫びをあげながら高順に得物を振り上げるが、横から宋江と花栄の飛び蹴りを食らい地面を転がった。

「筆頭！」

「問題ない。目的は達成した。退くぞ！」

「御意！」

右目を抑えながらばらまいた火薬を発火させて宋江と花栄の援護のもとその場を離れた高順。許？たちも追おうとするが、一刀のほうが先決を考え駆け寄った。さらには、宋江たちの土壇場の裏切りでココにいた連中もある程度動きが止まっているので追撃は難しいと感じたのだろう。

「一刀、一刀！」

曹操と荀？が必死に止血をしようとしているが、焼け石に水で効果が全くない。

「あ、そっか……宋江って『水滸伝』の登場人物か……すっかりしていたなあ。それなら高順と繋がりあったか」

一刀は血を吐きながらそう呟いていた。『水滸伝』に出てくる宋江を筆頭とする『梁山泊』のメンバーはどちらかと言えば「悪人」だった。だったら、多少の差異はあれど高順に従うのも納得できた。あの男も悪人だろうし。

「ごめん……華琳。俺……ここまでっばい。華琳の覇道を間近で見るとって約束だったけどね」

そういつて弱々しい笑みを華琳へと向ける一刀。華琳はただ首をふるだけ。許？と典韋は武官であるがゆえに一刀の状態を察したのか必死に泣くのを我慢しているようだが、我慢出来ていない。

「桂花……ま、言わなくても……いいと思うけど……華琳を頼む」

「……」

普段は罵倒しかいっていないはずの荀？ですら必死に泣き声を隠そうとしている。

「華琳。お願いだから……俺が死んだからって暴走しないでくれ。多分、高順はそれを狙っているはずだ」

この状態になつては遅いのかもれないが、高順の狙いの一つに気づいた。高順は自分を殺して曹操を無理やり戦わせようとしていると。無論、それだけではないのだろうが今はそれが思いつく。

「桂花……一応な？ 俺だつてばかじゃないから……俺が知っている限りの天の知識をまとめた書類を部屋の机の中に置いてあるから……それ、使ってくれ」

一刀も馬鹿ではない。もしものために書き留めておいた『天の知識』がある。それを自分はうまく扱えなかったが、苟？ たちならうまく扱えるだろうと確信している。

「……華琳」

「……なに？」

自分を泣き顔で、だが母のような慈愛に満ちた笑顔で見つめている曹操を見上げる。一刀は素直に思った。自分は幸せものだったと。

「……愛してる」

「私も……」

そう言つて曹操は一刀と口づけをする。誰も何も言わない。全員泣いていた。唇を離れた曹操はもう事切れた一刀の体を抱きながら嗚咽を漏らした。

「……桂花。すぐに撤退の狼煙をあげなさい」

「はい」

曹操の言葉に逆らう者は誰もいなかった。一刀の体を抱きしめながら曹操は唇を噛んだ。

「高順。貴様だけは……私の手で殺す……ッ」

静かに一刀の骸を抱きしめながら曹操はそう呟いた。

「右目が代償か。だが……問題はない。むしろ、これだけで済んだことを喜ぶか」

部隊を置いていた天幕に戻り、消毒だけした高順は右目を眼帯で覆いながらも次の策を考えていた。

「天の御使いは殺した。曹操……貴様はどう出る？　どのみち、決戦は逃れられん」

だが、心のどこかで早まったことをしたかもしれないと呟く声があった。このまま行けば曹操は必ず自分たちと戦うだろうが、その際に自分も死ぬかもしれない、と。もし、曹操が手段を選ばずに自分を殺しに来ればどうなるか。

「……計画に若干の修正を施すべきか」

最悪、自分が死んでも張勳がうまく動けるようにしておくように修正を加えた。

「……七乃。もしかしたら『師匠殺し』はさせずに死ぬかもしれん」

曹操との戦いで自分が死ねば、張勳に師匠殺しをさせる必要もない。自分が死んだことで脅威はなくなつたと考えた馬鹿が動くだろうが、それこそ張勳に始末させればいいと考えた。

「どのみち……私の策は成就する」

例え、どうなろうと最終的な「董卓を強者とする」目的は果たせるため問題はない。

この戦闘の後、曹操は大陸の東側を得て軍備を整え始めた。董卓軍

は蜀の太守となった劉備を従わせ、同じように軍備を整え始めた。

そして、この『戦乱の時代』とも呼べない時代の終端が目前に迫った。

董卓軍対魏軍という形で――。

第24話 終わりの始まり（後書き）

……一刀くん死にました。いや……批判が来るのは覚悟しています。ですが、高順の性格上不確定要素である一刀を生かしておくわけにはいかないのです。

一応、一刀が曹操に暴走しないように警告したので暴走はしませんでした。実はその分……って感じです。

さて、この「悪人無双〜高順伝〜」もこれを含めて四話です。まあ、いろいろ駆け足ばいとは思いますが、最後までお付き合いをお願いします。

第25話 悪人の終わり（前書き）

戦闘描写は高順を主軸に書いているので、物足りない部分があると思います。ご容赦のほどお願いします。ついでに言えば、すでに魏軍は詰んでいる状況なので、せめて高順だけでも倒したいと布陣しています。

第25話 悪人の終わり

「董卓軍対魏。呉と蜀には手出しをさせずに、純粹に勝負ってところかしら？ 曹操が軍備を整えて攻めてきたのには驚いたけど」

五丈原において両軍が睨み合っていた。曹操はあの後、劉備たちの領地を得たことにより軍備を整え、董卓軍に宣戦布告した。董卓たちも望むところなのでその宣戦布告を受け入れた。そして、賈？は孫策と劉備には手出し無用と通達しておいた。これも「董卓」が「強者」となるために必要だからだ。

「詠……そろそろ行ってくる」

「……行く前に一言いい？」

砦の中で先程まで情事を交わしていた二人は共に部屋を出て行く。その直前に賈？は高順に一言告げた。

「ボクを殺して。アンタが居なくなるのは耐えられない。だから、死ぬならボクを殺してから行つて。前言ったわよね？ 自分のジャマをするなら殺すつて。ボクはこの戦でもアンタの盛大な道連れの時も邪魔してやる。アンタが死なないように邪魔してやる」

賈？がだした結論。それは、高順が死ぬなら自分も死ぬということ。だが、高順にとって賈？という存在は重要な物。董卓が「強者」として存在するためには賈？の存在は必要不可欠だから。以前、ジャマをするなら殺すと言ったが本心ではない。

「アンタの考えはわかる。この決戦で死ぬかもしれないし、この決戦が終わった後に盛大な自殺をする。どっちにしろ、死ぬのが後か先かの違いしか無いから。だから、殺して？ アンタの手で殺してよ！」

賈？自身も何を言っているのか分かっていないのだろう。高順への思いが暴走したが故の行動。

「もう…ボクにはアンタが隣にいない事は考えられないの。もう…月以上の存在になっているのよ？ 責任とってよ……」

高順は倭刀を鞘から抜くと賈？に向けて突きだした。しかし、その突きは賈？の顔の横を通り過ぎ壁に刺さった。

「……すまん。殺すことはできん。それに……天の御使いを殺したからな。私を殺さねば奴らも収まりがつかんだろう」

「……意気地なし」

賈？も分かっていた。高順が止まることができないと。でも、一言言いたかった。自分はあるたのせいでここまで苦しんでいるんだと。

「……私は止まらん。が、もし止めたいなら好きにしろ。その時点で前が「強者」ならそれに従う」

高順はそう言い残して部屋を出て行った。賈？はその言葉の意味を反芻しているとくつくつと喉を鳴らして笑った。高順らしからぬ言葉。恐らく、アレが高順の最大限の譲歩なのだろう。だったら――
|。

「そっか……そうよね。ボクがアンタより強ければアンタのこと好きにしていんだものね」

賈？はそう呟くと顔を上げた。そこにあつたのは黒と同じように狂いながらも理知的な光を宿した目だった。

「アイツに頼めばなんとかいけるかしら？ 交渉次第よね」

賈？はそう言っている場所へと歩を進めた。

「筆頭！ 部隊の展開、終了しました」

魏軍を見ながら高順は波才からの報告を聞いている。こちらは、将の数としては少ないが一騎当千の呂布がいる。高順は呂布よりも強いとされているが、それは手段を選ばない場合のみなので除かれている。

「しかし、馬騰がくるとはな」

西涼から馬騰の名代として馬超が韓遂や馬岱たちを連れて援護に来ており、やりやすいといえばやりやすい。

「敵はどうやら荀々や郭嘉といった軍師を連れてきているようです」

「そして、程？のように守戦が得意な軍師は本国の守備か」

程？がいないとはいえ、魏軍は全力を投入していることになる。そして、高順隊が配備されている右翼には夏侯惇や楽進の部隊が配置されていることから高順をどれだけ危険視しているかが分かる。

「波才。この戦い……どうなると思う？」

「確実に言えるのは、筆頭と私は集中攻撃を受けるでしょう」

高順と波才は一刀を殺したことで、夏侯惇の右目を奪ったことで恨まれている。宋江たちがこちらに戻ってきてからの情報は入ってこなくなっただけ、恨まれているだろう。

「宋江には？」

「自分たちが死ねば引き継ぐように言っています」

「上等」

高順は強いとはいえ、手段を選ばないからこそ強い。無拍子という技があるうと高順には突きしかできない。無拍子の突きはその動作の少なさや視認できる部分の少なさから一撃で殺せるが、一刀を殺したときのように刀を掴まれて反撃を受けるようなこともあり得る。それが、夏侯惇などの武将なら楽にできるだろう。一刀がしたみたいに、体に刺さった倭刀を掴んで高順を斬り殺すことくらい。

波才は実力で言えば陸遜や呂蒙クラス。精精、一般兵よりも強いというくらい。それを相手の虚を突いた戦法や相手の心に入り込む話術で底上げしている。それが効かなければ精精数合打ち合って死ぬのが関の山。

「波才。思えば…お前が最初に部下になったな」

「ええ。筆頭と出会ったときに心が告げました。私が仕えるのはこの方だと」

二人が初めてあったのはとある戦場。そこで波才は高順に忠誠を誓った。そこから規模は徐々に増えていった。それに伴い信頼できる部下も増えてきた。だが、高順にとって最も信頼できるのは波才だった。

「行くぞ」

「御意」

二人は分かっていた。多分、自分たちは策の成就を見る前にここで死ぬだろうと。だが自分たちは死んでもいいように布石を大量に打った。自分たちが死んでも宋江が高順隊を率いて行動する。自分たちが死んでも張勳が賈？の命令に従って動く。自己犠牲と言われればそれまでだが策の成就のために生きてきたのだ。

「だが……そう簡単に死ぬわけにはいかん」

高順はそう呟いた。

「（筆頭。申し訳ありません……私は貴方に逆らいます）」

波才は内心そう呟いた。

「隊長の仇イ！」

「遅い」

戦闘が始まった。高順隊は右翼に展開していたが、そこには夏侯惇・夏侯淵・楽進・李典が攻撃を仕掛けてきた。最初は夏侯惇と楽進のみだったが、いつしか混戦して現在に至る。呂布の方には荀彧などの策士がいるため時間をかけて足止めをする。その間に自分たちを潰すつもりなのだろう。

「早めに決着を「今や！ やれ！」何！？」

火薬を取り出そうとした瞬間に、李典の合図で高順に水が大量にかけられた。

「隊長が残してくれた資料に書いてあったんや！ 火薬つちゅーものは湿気ったら使い物にならんってな！」

正確には再び乾燥させるまでは、だが。戦闘中にそんなことができるはずもなく高順は火薬を使うことができなかった。

「チツ…やり辛いですね」

「我らがすでに詰んでいるのは華琳様も分かっている。だからせめて貴様らだけでも倒したいんだよ」

波才も夏侯惇と夏侯淵の連携に手間取っていた。夏侯惇の虚を突こうにも夏侯淵がそれをカバーするように矢を射掛けてくるので戦いづらくなっていた。他の高順隊も同様だった。

そして、夏侯淵の言葉。それは、負け戦と分かっているが高順たちだけでも倒したいと言っている。それは、一刀という存在を守れなかった贖罪か。

「貴様だけは殺す！ 例え負けても……隊長の仇だけは取る！」

「私たちの戦闘方法を研究したか」

高順は素直に賞賛した。一刀が残した資料から自分に関係ある項目を抜き出して実行することができる力量に。そして、それらを残した一刀に。

「だが、こちらにも目的がある。そう簡単に死んでやるわけにはいかん！」

倭刀「散華」を抜いて楽進と李典を相手にしている高順。だが、援軍として于禁隊が現れたことで形勢が悪くなった。

「波状攻撃を仕掛けるの！ 無拍子とかいう技を使われたら刀を握って動きを止めるの！」

「そこまでか！」

まさか、無拍子の弱点までついて来るとは思わなかった。だが、だからといって殺されるわけにはいかない。

「『螺旋』！」

向かってきた兵に向かい上半身を捻り、その反動と「散華」の回転を加えた突きを繰り出し、上半身に大きな穴をあけた。

「もらったア！」

『螺旋』の反動で一瞬の隙ができた高順に楽進が気を両足に纏わせ
て突進してきた。

「『猛虎蹴撃』！」

「ええい！」

その蹴りは高順の体にまともに入り地面ごと高順の体をたたきつづ
した。だが、高順もそれで止まるわけもなく「散華」を楽進の足を
斬り飛ばすが――。

「もら「今や！ やれ！」」

楽進に追撃をかけようとした瞬間に再び液体がかけられた。だが、
今度は水ではなく。

「油だと！？「火を射かけえ！」」

油だった。火矢を回避していくが、外套にかすった瞬間に一気に火
が高順を襲った。さらに懷に入っていた火薬も火で乾燥し、発火し
始めた。

「グアアアアつアアアア！」

火だるまになりながらも樂進の腹に「散華」を突き刺し、李典と于禁へとかけ出してそれぞれの体を斬っていく。だが、炎で周りが見づらくなっており、なおかつ樂進たちはそれぞれの部下に抱えられて後方へ下がっていった。

「チツ……ここまでか。宋江！ 我が策……必ず成就させる！」

次の瞬間、高順は全身火だるまの状態で崩れ落ちた。それを察知した波才は夏侯惇の斬撃をその体で受け止め、夏侯惇を蹴り飛ばした。

「筆頭！」

後ろから夏侯淵の矢が射かけられその背中に矢が次々と刺さりながらも走ることをやめずに高順の体を崖の下へと蹴り飛ばした。崖の下は滝。運がよければ生き残れる。

「筆頭。貴方は生きて……策の成就をその目で見てください。ここは……私が」

波才はこちらに向かってくる夏侯惇やその部下たちを見ながら笑っ

た。しかも、いつの間にか三羽鳥の部下もこちらにやってきている。恐らく、数人は楽進たちを後方へと連れていき、残りが自分たちを殺そうとするためにこちらに向かってきていているのだろう。

「さあ……何人道連れにできるかねえ！」

その瞬間、波才は夏侯惇隊に突撃していった。そして、ちょうど中心に入り込んだ時に隠していた火打石で自らの服に火をつけた。

「ッ！ 退k」

夏侯惇が波才が何をしようとしているのかに気づき、兵を下がらせようと叫んだ瞬間に波才を中心とした大爆発が起こり、夏侯惇隊は爆炎の中に消えた。さらに、花栄が崖の上に火矢を放ち、それを察知した高順隊が一斉に撤退していった。それは、？水関の時と同じようにかけ崩れの合図だった。

「姉者！」

夏侯淵の叫びはかけ崩れの轟音に吞まれて消えた。

「申し上げます！ 高順様が楽進・李典・于禁に深手を負わせたものの行方不明。波才殿は夏侯惇隊と楽進たちの部隊を巻き込んで火薬による自爆を行い、がけ崩れを誘発。それにより、夏侯惇隊と楽進たちの部隊は壊滅状態で夏侯淵隊はその救護のため身動きが取れません。また、高順隊はそのままこちらに帰還してきます」

董卓軍の本陣にもたらされた情報。それは、高順と波才が死亡または行方不明になったというもの。その情報は少なからず董卓軍に打撃を与えたが、もう止まらない。

「でも、相手の戦力を大きく削ったのは事実ね。夏侯惇・夏侯淵や三羽烏を一時的に戦闘不能にしたのは大きいわ。すぐに、呂布たちに突撃するように言いなさい。高順隊には好きに動くように伝えろ」

「御意！」

本陣で指揮をとっていた賈？は淡々と兵士に命令を下していた。それを後ろから見ているのは董卓。

「詠ちゃん」

「大丈夫。ボクはまだ動ける。それに……ちゃんと策は打った」

董卓は賈？が高順を好いているのを知っている。だから、高順の生死が不明となったときに若干不安に思ったが、賈？はそれを表に出していない。

「そう……ちゃんと策は打った。頼んだわよ……七乃」

「ふう。波才さんには感謝ですね」

張勲は川から出ると服を脱いで水を絞りながら相変わらずの笑顔で
傍らにいる人影を見つめた。ボーカーフェイス

「ごめんなさいです。でも……お兄様が悪いんですよ？ 私たちを
置いて死のうとするから」

かたわらの人影はやけどで爛れているが、間違いなく高順だった。

「お兄様はもう「弱者」です。「強者」である私や詠ちゃんに逆ら
っちゃダメなんですよ？」

そういつて張勲は愛おしそうに高順を見つめていた。

第25話 悪人の終わり（後書き）

高順が負けました。一刀が残した資料により火薬は無効化され、波状攻撃により無拍子を封じられ…といった感じで完全に曹操は「打倒高順」を目的に戦をしかけています。要するに、董卓軍に負けるのは覚悟していたという感じです。

さて、次回が最終話。その後にエピローグがありこのおはなしも終わります。もう少しお付き合いのほどお願いします。

最終話

戦争は終結した。高順たちにより夏侯惇や三羽鳥といった主要な将が戦闘不能になり、そこを呂布や張遼、華雄につかれ本陣まで食い込まれた魏軍は降伏。曹操は捕らえられ、処刑を選んだ。魏軍の主要な将もそれに殉じ、処刑の道を選んだ。だが、劉協は五胡襲来の危険性があると考え、元魏軍を五胡との最前線に送り処刑の代わりとした。無論、人質として曹操を洛陽に軟禁した。五胡と手を組む可能性もあつたのだが、曹操はそのような気はないと宣言した。しかも、今は亡き北郷一刀の名前に誓つたので偽りはないだろう。

「高順をこの手で殺せなかったのは残念だったけど……もう逆らうつもりはないわ。それにね？ 私の中に……一刀との子がいるから……死ねないのよ」

董卓との会談で曹操はそう告げた。処刑を望んだ後に子をはらんでいる事が分かった後の曹操はどこか落ち着いた雰囲気を持っていた。恐らく、このまま子を育てていき一生を終えるつもりなのだろう。

そして、片足を亡くした楽進は木の棒を義足として曹操の侍女として働かせてもらいたいと土下座をしていた。賈？は不満げだったが、劉協が許したので従うほかなかった。まあ、楽進はすでに戦える体ではないため扈三娘が監視役兼護衛役として側につくことになった。一応、処分は下したが曹操などが董卓軍と戦つたことにより戦争で死んだ旧魏軍兵の家族などが暴走する可能性もあつたからだ。

「結局、私は一刀の警告を無視して戦いを挑んだ。その時点でもう私が動く資格はないわ」

曹操は自嘲を浮かべながらそう呟いていた。

高順が居なくなった後に端を発したように董卓に不満を持つ連中が蜂起したが、宋江率いる元高順隊によりわずか1日で鎮圧され、高順の策通り董卓は大陸での「強者」となった。董卓の庇護のもと劉協は漢王室の再興のために奮起し、かつての威光を取り戻していた。

「はい。「弱者」をいたぶる「なんちゃって強者」はとつと死んでくださいね」

張勳は袁術を育てながらも、宋江たちを率いて悪政をしく連中を肅清していった。

「進めえ！」

華雄や張遼、呂布といった武官たちは五胡と戦い、旧魏軍の将兵を監視しながらも自らの腕を磨いていった。

「いい？ 王として清廉潔白なだけじゃだめ。時として高順のように手段を選ばない冷酷さも必要なの。清濁併吞できてこそその王よ」

孫策は孫権に自分の知る限りの王としての心構えを教えつつ、政務などを孫権に引き継がせていった。それに伴い、呉内でも徐々に黄蓋や周瑜、韓当などといった旧将から陸遜や呂蒙、周泰といった新将などへの移行が進んでいた。

「桃香様！ 南蛮の孟獲が攻めて来ました！」

「え！？ えつと……とりあえず、董卓さんに伝令を入れて！」

蜀の太守となった劉備は、最初は不満だったようだがいつしかこの立場に納得し蜀内の安定に尽力することになった。

「ふう。今日のお仕事は終わったよう」

「董卓様。お茶でございます」

董卓はそう言って大きく背伸びをした。後ろには戴宗と呉用が控えている。戴宗は、高順より自分の死後は董卓に仕えるように命令されていた。戴宗は何気に護衛から伝令と幅広く活動することができる。呉用も軍師として優秀な結果を残している。

「詠ちゃん……今どうしているかなあ」

董卓は窓から見える空を見上げながらここにはいない親友を思い浮かべる。彼女と会ったのは年に一度か二度ほど。それ以外で会う機会は殆どない。

「一応、文なら私が届けますが？」

「ううん。そんな事なくていいです。何時までも、詠ちゃんに甘えるわけにはいかないから」

董卓はそう言って戴宗と呉用を連れて散歩に出かけた。

「起きてる？ 包帯を取り替える時間よ」

とある森の中に庵が一軒建っていた。その庵の寝台に全身に包帯を巻いている男がいた。そして、その男に甲斐甲斐しく世話をやく一人の少女。

「詠、か」

包帯の男、高順はしゃがれた声で少女の名前を呼んだ。

川に落とされ、張勲に助けられたとはいえ全身火だるまになった為、筋肉のほとんどは使い物にならなくなり全身を動かすことも、声をあげることも難しくなった高順をここまで支えてきたのは賈？だった。

戦争終了後に賈？は董卓軍を抜け、洛陽の街のはずれにあるこの庵で高順と暮らし始めた。高順が生きているということを知っているのは、賈？と董卓と張勳と高順隊のみ。一応、護衛として花榮や関勝といった人間が庵から離れた場所に住んでおり、張勳が月に数回高順に会いに来るが、それ以外にここを訪ねてくる人間もない。董卓も何時までも賈？に頼るわけにはいかないと、此处に来るのはそれこそ年の移り変わりくらいしかない。

「ほら……動かないで」

「……ああ」

包帯をとるとそこには目を逸らすほどの酷い焼けただれた皮膚があった。だが、賈？はそれすら愛おしそうに薬を塗った手で撫でる。そして、ゆっくりと包帯を巻いていく。

「父様もね？　きっと母様のところに来ればよかったのよ。そうすれば死ぬこともなかった。だから、アンタは父様のようににはさせない。ボクがずっと見ていてあげる。ボクがずっと……ずっと……」

高順に後ろから抱きつきながら幸せそうに頬を緩める賈？。高順は自分の首に回されている腕を引きつる皮膚を無視しながら握る。

「（もう……私は「弱者」だ。ならば……「強者」である賈？に従うほかはない。それが私だからな）」

「悪人」としては有名になったが、最後の最後で自らの手で目的を達せられなかった高順は自嘲を浮かべながらも「弱肉強食」に従い、賈？の庇護のもとで生きて行くことを決めた。

数十年後、再び漢王室の権威が落ちたときに大陸は再び混乱し始めた。その中で「悪」の軍旗を掲げた青年が現れた。

「所詮この世は弱肉強食。弱者である漢王室はいらん。今度は我ら

が「強者」となり「弱者」を守る！ 霸権を狙う者よ……我らを倒せるものなら倒してみろ！ 我が名は高？なり！ 我が父高順の教えに従い……我が主を「強者」とするために貴様らには死んでもらう！」

その青年は、曹操の娘である曹丕と共に乱世を駆け抜け、父親である高順のように手段を選ばず、母である賈？から教えられた軍略で後に「晋」の成立に尽力した猛将として曹丕と共に祀られたという。

最終話（後書き）

あとがきは、次回

エピソード

母様。ボクに好きな人ができました。そう言いながら、愛しい人の待つ庵へと歩いて行く。アイツは油物があまり好きじゃないから、さっぱりとしたものもいいかもしれない。

「董卓軍だな？ 悪いが、そちらの責任者と話をしたい」

アイツと初めて話した言葉はそれ。その時は、何も思わなかった。でも、今ではここまで思うなんて。

「母様が言っていたっけ。父様と出会った時も最初はどうとも思わなかったけど、一緒にいるうちに『何がなんでも一緒に居たい』って思うようになったって」

そう考えると、ボクや母様って独占欲が強いのかな？ そして、その相手がいなくなると駄目になるのも母様と似ている。やっぱり、ボクは母様の娘だ。

「七乃には悪いけど…これだけは譲れない。アイツとはボクが一緒にいるんだから」

張勳もそれが分かっているから影に徹して不穏分子を肅清したりしているんだろうな。まあ、アイツも高順を好いているのは分かっているからボクもうるさくは言わない。

「それと曹操には悪いけど、アンタが天の御使いを想うように…ボクだってアイツを思っているんだ。だから、もしかしたらアンタとボクの立ち位置は真逆だったかもしれない」

高順が天の御使いを殺した。でも、その逆もありえた。だから、ボクは曹操に一方的ではあるが親近感を覚えていた。

「でも…これが現実。ボクは高順を手に入れて、アンタは天の御使いを失った。ただそれだけよ」

曹操には悪いって何度も言うけど、本当にそのとおりだから仕方ない。ボクは『高順を手に入れるために強者』を目指した。曹操は『大陸を手に入れるために強者』を目指した。ただそれだけの違い。その結果がこれ。

「まあ、もう終わったことだから別にいいわね。さて、早く帰ってアイツの世話をしないと」

多分、ボクの決断は周りから見れば間違っているんだろう。高順を生かすために、七乃と波才を抱き込んだ。

「張勳。ちよつと付いてきて」

「はい？」

最終決戦の日にボクは七乃を連れて波才の部屋までいった。そして、こちらを見ている波才を前に言った。

「波才。高順をどんな形でもいいから生き延びさせて」

張勳は波才の部屋までに行く途中でボクの目的に気づいたのか波才の首に剣を突きつけていた。波才は目を瞑って少し考えた後こう言った。

「筆頭が倒れたら我々が展開する右翼にある崖に落とします。です

が、それまでです。それ以降のことは確約できません」

多分、波才がそう言ったのは『あの場での強者はボクだったから』ということ、それと波才もどこかで高順に死んでほしくないと思っていたからだと思う。

まあ、とにかく波才を脅した結果がこれ。高順は全身に大やけどを負い、長時間喋ることもできず、一人では寝台から起き上がることできない体になった。でも――。

「でも、高順はボクのものになった」

ボクがいなければすぐに死ぬ。多分、ボクは狂っている。でも、この気持は高順が好きだって気持ちちは狂っていない。

「絶対に離さない。絶対に邪魔はさせない」

今までボクは月のために我慢してきた。その月から「好きに生きて」と言われた。月の周りには戴宗や呉用がいる。呂布たちもいるから大丈夫だということなんだろう。元魏軍も曹操が人質となっている以上は反乱は起こさないだろう。だったらボクは好きなように生きる。

「賈？文和はもう終わり。これからは詠として生きていく……」

さあ、俺が見えてきた。高順とどんな話をしようか？ 今日街で見かけた半裸の野太い変態のことでも話そうか？ それとも――。

「母様、父様。ボクは今、幸せです。周りから見れば狂っているかもしれないけど、間違い無くボクは幸せです」

「貂蟬。北郷一刀は死んだが…この外史は滅びに向かっている。どういう事じゃ？」

「簡単な話よ。この外史における「主人公」はご主人様じゃなくて、賈？文和の父親だったから」

そこは何も無い空間。そこで、貂蟬と卑弥呼の二人が会話をしていた。

「しかし、賈？文和の父親はすでに死んでいるのではないか？」

「ええ。でも、あの男の血は賈？文和に受け継がれている。つまり、この外史において「主人公」の条件とは「黒という男の血を引いている者」ということよ」

北郷一刀には外史を存続させる能力がある。だが、この外史ではその役目は黒が担っていた。

「要するに黒という男がご主人様より早くこの外史に流れ着いたことで『世界』は黒を『天の御使い』として認識したの。そして、黒が死んだことで外史は崩壊しようとした。でも自分が崩壊することを認められなかった『世界』は気づいた」

「黒の血を継ぐあの少女か？」

「ええ。外史はその存在を保つため黒の血を継ぐ賈？文和という少

女を「主人公」とみなしたわけ。なんせ、その頃はまだご主人様はこの外史に現れていなかったからね」

貂蟬の言葉、それはこの外史の主人公は一刀ではなく賈？だと宣言したもの。

「そういう事で、この外史はどんなに薄くなろうと賈？文和の血が途絶えなければ崩壊しないのよ。ある意味、私たちのような存在からしてみればありがたいわね。この外史が崩壊することはほぼありえなくなっただから」

貂蟬はそう言って笑みをこぼす。好意を持っている一刀が死んだことは残念だったが外史が存続していくのは嬉しい。それに、仮に黒の血筋が途絶えても外史は代替案として一刀の血筋を重要視するだろう。

「ま、この外史はこれでいいじやろう。貂蟬。次の外史に行くぞ」

「はいはい。それじゃあ……賈？ちゃん？頑張りなさい？」

もうこの外史に来ることはないだろう。だから、この外史の主人公に声援を送る。多分これからつらいこともあるだろうからそれに負けないように声援を。

エピローグ（後書き）

最後はミザリーとかそんな感じのエンドです。まあ、高順らしい最後です。

魏軍の処分に納得いかない方もいるとは思いますが、まだ五胡がいるため下手に処分するより、曹操を人質として運用したほうが戦力的には助かるのでこのような形にしています。それに、一応楽進も人質ですしね。

外史の設定とかはこの小説のみの設定なのでツツコミはなしの方向で。黒も考えようによっては天の御使いなのです。ということ、こんな感じに。

一応、別エンドでは黒の手紙が発見され詠が天の血を受け継いでいることが発覚するというものもありましたが、くどくなりそうなのでカットです。

さて、この「悪人無双〜高順伝〜」にお付き合い下さりありがとうございます。ございました。ログみたら投稿から一ヶ月ほどしか立っていない…： どれだけ現実逃避していたんだ自分？

とりあえず、今回は以前発表したとおり島左近が恋姫世界にやってきます。一刀とセットで動かすので、一刀をどの勢力に入れるかのアンケートをお願いします。

1 魏

2 呉

3 蜀

4・劉備軍

以上からお選びください。蜀と劉備軍を分けているのは特に意味はありませんがどうせなら分けようと思いました。ついでに、ヒロイン（左近の）は誰がいいか…と言っても黄忠・嚴顏・黄蓋くらいしか思いつかない。魏だと…ギリで張遼？まあ、とにかく次回作も御願します。

ブローグ

「——んちゅ——はむ——高順。どうだ？　気持ちいいか？」

「ああ」

部屋の中で銀髪の女性が包帯で全身を隠す男の股間に顔をうずめている。銀髪の女性は顔を上げると男に向かい情欲に染まった瞳を見せた。

「その……次は……私も」

「ああ。華雄……来い」

高順と呼ばれた包帯男は銀髪の女性——華雄を抱き寄せる。そのまま二人は繋がった。

彼らは同じ村に育った『幼馴染』だった。共に体を鍛え、共に毎日
を過ごし、村でも何時結婚するかなど噂になるほどだった。だが、
ある時そんな毎日は崩れ去った。

「高順――！ どこだ！？」

華雄は燃え盛る村の中を走っていた。突如、村を襲った野盗は村か
ら食糧を奪うと火を放って村を出て行った。華雄は、隠れていた小
屋から抜けだして高順を探し始めた。自分の両親は、自分を小屋の
隠し部屋の中に放りこんで離れていった。多分、生きてはいない。
それがわかるからこそ、高順を探す。

「高順……どこにいるんだ……」

華雄は高順の家に向かったが、そこには誰もいなかった。だから、必死に高順が行きそうな場所を探す。

「……っ！ 高順！」

そして、ようやく見つけた。野盗の一人らしき男の胸に倭刀を突き刺している高順を。そして、野盗を蹴り飛ばした高順はそのまま倒れた。その瞬間、高順は何かを呟いていた。

「『弱肉強食』か……」

近寄ると高順は全身にひどい火傷を負っていた。それこそ、華雄でも一瞬分らないほどに焼け爛れていた。

「高順！」

華雄は必死に呼びかけるが、意識を失っている高順は返事をしない。華雄は高順を背負って村から脱出を試みた。そして、なんとか近くの森の中に姿を隠すことができた。

「ひどい……薬草は……」

そして、落ち着いて高順を見ると専門知識のない華雄でもわかる。もうどう仕様も無いということが。だが、それでも村から持ち出せた包帯や酒などで消毒をして必死に自分にできる処置をする。

「死なないでくれ…もう、お前しかないんだ」

なんとか鎮火した村から使えるものを探しに行ったときに見た。自分の知る人たちが死んでいる光景を。村の生き残りは、自分と高順のみ。

「高順……」

「華雄…お前……弱肉強食という言葉はどう思う」

突如、意識を取り戻した高順は華雄に向かいそう告げる。その目はまるで飢餓状態の人間が食糧にありつけたような『この世の真理を知ったような』目だった。

「高順…？」

「あの野盗が言っていた。『弱肉強食』こそ真理だと」

包帯で包まれた右手を天にかざしながら高順は笑った。自分たちは弱者であつたが故に村を焼かれたと。

「なあ…華雄。お前はどっ思う？」

包帯の間から除いた目は寧猛な光を宿していた。華雄はその輝きに魅入られた。

「高順……そろそろ私たちも規模が大きくなってきた。ここでどこかの諸侯に仕官したほうがいいのではないか？」

盃に入った酒を呷っている高順に扇情的な着物を着た華雄が寄り添っている。村が焼け落ちて十数年が経った。あれから高順は、『弱肉強食』を掲げて生きてきた。華雄はその横で生きてきた。

「…そうだな。宋江。どこかい仕官先はあるか？」

「戴宗に探らせていますのでしばらくお待ちください」

高順が掲げた『弱肉強食』という理に惹かれたならず者たちが集まり、いつしか拠点としている涼州だけではなく、大陸の南の方でも噂になるほどの集団となってしまった。

規模としては約百十人。そのすべてが高順の『弱肉強食』を掲げて生きている。だが、彼らは高順に逆らうことはしない。何故なら、彼らより高順は『強者』だから。

「まあいい。行くぞ、華雄。そろそろ体が限界だ」

「ああ」

高順は華雄を連れて自室へ向かった。

「筆頭。我らは、貴方たちにどこまでも付いていきましょう」

宋江は高順と華雄が去っていった方向を見ながら頭を垂れた。

「高順：お前はいなくならないよな？」

高順の延命のための情事が終わり、若干赤身がかった肢体を高順の胸に乗せながら呟く。華雄はこうやって高順と肌を触れ合わせているのが嬉しかった。全身の火傷など関係ない。自分が見つめる男は、将来を約束した仲なのだから。

「ああ。どうせ、死ぬ時も一緒だろう」

自身の胸に乗っている華雄を抱きしめる。比翼の鳥。そんな言葉が高順の脳裏によぎった。

簡単な説明

大半は、「悪人無双」高順伝」と変わらないが、黒がないこと。高順が志々雄真実になる。華雄が駒形由美になる。波才のポジションに宋江がいる。など結構変更されていたりする。ということ、主役キャラのみの変更部分をあげてみた。

高順

生まれ育った村を焼けだされ、全身に大やけどを負う。そのため、志々雄真実と同じく火傷による汗腺の体温調節機能が壊れ、一日に数回ほど華雄と体を合わせなければ体温が際限なく上がる。また、「悪人無双」みたいに「仕える主を強者へ押し上げる」という思想は持つておらず、「強いから従う」というポジションになる。ちなみに、火薬を使わなくても劣化『紅蓮腕』を放てる。早い話が、シヤニンングフィンガー。それ以外は、基本的に「悪人無双」と同じ。

華雄

ここでのヒロイン。村を焼けだされ、高順しか頼れる者がいなかったため高順に依存しており、高順と長時間離れることを極度に嫌う。高順の体の世話を全て行っており、『医者でなければ直せないような怪我』などの場合を除き、他人が高順の体にベタベタ触るのを嫌っている。高順の為なら何でもするが、彼女の体に触っていいのは高順だけらしい。戦闘能力も原作より高くなっている。

宋江

「悪人無双」の波才の立ち位置にいるキャラ。高順の腹心。高順と華雄に忠誠を誓っている。

高順一派

梁山泊百八星から完全パクリ。高順のカリスマに惹き寄せられている。全員が、高順に忠誠を誓っている。

プロローグ（後書き）

本当は、詠ではなく華雄がヒロインだったんだ。でも、お蔵入りになったんだ。何故なら、ち。こ太守じゃないけど、高順と華雄がほぼ毎回情事を行う事になったからね……いや、やってもよかったんだけど……その時は度胸がなかったんだ。

もし、お望みなら続きを書きますよ？

なんで、島左近のような善玉が書きづらくて、高順のような悪玉が書きやすいんだ？ 作者はこんなにもピュアな人間なのに（え

ちなみに、これは「シグマのネタ草案倉庫」にも投稿しています。

第1話 奇兵隊（前書き）

なんか、皆の反応に驚きつつ書いてみた。

島左近より書きやすいつてどういう事？

第1話 奇兵隊

「『奇兵隊』が仕官を？」

「はい。奇兵隊の呉用という男がそのように申しております……それで、賈？様に判断していただくこと」

賈？は兵士の報告を聞きながら、どうするか考えていた。隣の董卓も若干不安そうな顔をしている。

奇兵隊。掲げる文字は、首領である高順の『高』でなく『悪』の文字。大陸の北西部を拠点として活動している集団。評判としては、半々。数々の村を支配下に置き食糧などを貢がせているが、その代わりに盗賊たちから村を守っている。その行動は、批判もあるが支配下においている村の防衛は完璧なので、村人からは恐れられつつも感謝はされているようである。

首領の高順の情報は多い。例えば、全身の包帯で見分けが付きやすい。戦闘能力も高いようで、並み居る盗賊をたった一人で倒したという逸話があるがそれ以上に恐れられているのが『火の神に愛されている男』という噂。

「盗賊の顔を掴んだら焼けただれたとか、掴んだ剣が溶けたとか……非現実的ね」

ただ、この噂は「全身を火傷しており、体温を調節することができなくなった代償の力」とされている。事実、包帯の隙間から覗く皮膚は火傷のそれだという。

「でも……奇兵隊を配下にすれば、ここら一帯を制圧したも同意」

奇兵隊がここら一帯の盗賊たちを肅清したため、奇兵隊を配下にすれば治安維持は楽になる。奇兵隊を配下にするには戦って勝たなければならぬと言われていたが、あちらからやってくるとは運がいい。そう思った。

「とりあえず、会いましょう。呉用だったかしら。そいつを連れてきなさい」

賈？はまず会って話をすることに決めた。隣には董卓がいるが、一応呂布や張遼という武人も傍にいる。最悪、董卓を守り切るのは可能。

「つまり、貴方たちは私たちにつくと？」

「ええ。最近、黄色い布を付けた盗賊が多くなっています。それに対抗するにも、どこかの諸侯に付いたほうがいいと考えたもので」

また、これには後ろ盾を必要とした高順の考えも入っていた。すでに、漢王室の権威も下がってきており、各地に散らばる諸侯の力が増大してきている。つまりは、近いうちに群雄割拠の時代が来ると見ている。

「我ら奇兵隊は、何でもしますよ？ それこそ……貴方がたの望むことをね」

呉用は言外に「汚れ仕事も引き受ける」と言っている。呉用にとって、目の前にいる少女たちと舌戦で負けるとも思っていない。自分は善人ではない。だが、それ故に他人の心が手に取るようにわかる。

高順の部下『百八星』が一人『智多星の呉用』。彼の本分は謀略である。

「ぎゃあああ！」

「シッ——！」

刀で風をきる音が響く。熱で肉が焦げる匂いがする。誰もが顔を背ける戦場に男が一人立っている。その男は、鋸状の刀で盗賊の攻撃を捌くと向かってきた盗賊の首をつかんだ。

「紅蓮腕」

「——」

喉を掴まれ人間とは思えないほどの熱で皮膚を溶かされた盗賊は断末魔の悲鳴をあげることすらできずに事切れた。

「黄巾……こいつらの数がふえている。何かあるな」

「高順」

たった今殺した男を見ながら高順は思考を巡らせていた。そして、いつの間にか横には華雄がいた。そして、いつものように腕を絡ませ濃厚な口付けを交わす。これは、一種の儀式。華雄による高順が生きていると確認するための儀式。

「華雄。お前はと思う」

「…多分、漢という国が保てなくなってきたいるんだと思う」

まだ唇が触れそうな位置で二人は言葉を交わす。

「多分…来るな。俺たちが掲げる『弱肉強食』の時代が」

「ああ。来るよ。でも、私はお前から離れない。絶対に、だ」

そう言って華雄は高順が掴んでいた盗賊の死体を蹴り飛ばし、高順

を独占する。高順も華雄を抱き寄せる。華雄を独占するために。

「……ふむ。寝台の用意を済ませておくか」

それを少し離れたところから見守るのは宋江。二人の時間を邪魔するなど、宋江にはありえないこと。そして、戦闘終了後に行われる高順の『熱抜き』の準備をするためにその場を離れた。早くしておかなければ、あのまま外で行いそうなので怖い。何気に苦勞な宋江であった。

「やはり、お二人にはゆっくりとしてもらいたいしな」

訂正。こいつもどこかおかしかった。

第1話 奇兵隊（後書き）

奇兵隊……まあ、高杉晋作のあれですよ。特に意味はないですよ？

しかし、これは書いていてどうかな？と思うのは作者だけだろうか？

さて、ここで二つアンケートを。

まずは、高順たちの所属について。反董卓連合までは董卓軍に入ります。そうしなければ、董卓軍が速攻で潰れるので。ということで、反董卓連合編の後の所属を決めてもらおうかと。

1・魏に入る。赤壁の戦い？ 黄蓋の策なんざ潰してやんよ！

2・呉に向かう。孫策暗殺？ 外道な策はこっちの専売特許だ！

3・むしろ、独立勢力として傭兵集団だ！

まあ、この中からお願いします。他にもあればそっちでもいいんですけど。

そして、次のアンケートは「高順と華雄」について。

こいつらの狂愛具合をどうするか。

1・神（読者）は言っている。「作者よ、自重をすんじゃねえ、と」

2・このくらいでok

3・作者、自重しろ

とうとうとで、お願いします。

第2話 出会い

「真桜、沙和！　ここはもう駄目だ。早く逃げろ！」

「で、でも「全員……食らい尽くせ」え？」

これは、とある村の出来事。楽進・李典・于禁たちが訪れていた村。本来ならば、官軍がやってくるはずだったのだがそれより早く高順が部下を連れて現れた。

「あ、貴方は！？」

「ここは、俺らのシマだ。手を出した報いはうけてもらおう。それと、お前はなんだ？」

「あ、私は楽進といいます。その……貴方は？」

「私は華雄。こっちは高順だ」

この村。傭たちは旅の途中で訪れたので詳しくは分からなかったよ

うだが、奇兵隊の縄張りだった。縄張りの村には奇兵隊の一人で仙人の公孫勝の『影』がそれぞれ待機しており、異変が起きたら公孫勝に連絡が行くようになっていた。

「お前ら……ここまで保ったのは褒めてやる。だが……ここからは殺し合いだ。さっさと去れ」

刀を鞘から引きぬき、隣の華雄とともにゆつくりと賊に向かっていく高順。銀髪の少女楽進は高順に近寄って自分も戦うと告げる。しかし、高順は楽進を見下ろして口角を釣り上げて一言。

「これより先に大義なし。あるのは、原初の理弱肉強食」

もとより、高順に大義などない。ただ、自分たちの支配する村に攻撃を仕掛けてきたから殺す。自分たちの生命線の一つである村を守るために殺す。生きるために殺す。ただ、それだけ。だが、その言葉に楽進は無意識のうちに同意してしまった。

「いいか？　俺らに必要なのは結果だ。卑怯？　卑劣？　そんなものの『殺し合い』には存在しない。お前に……他人から罵られる覚悟はあるか？　自分がどんなに汚れても結果を残す覚悟はあるか？」

その言葉と共に斬りかかってきた賊の眉間に刀を刺し、そのまま片手で徐々に刀を下ろしていく。骨を削る音、肉を削ぐ音、血が地面

に落ちる音が戦場に響く。賊はその光景に絶句する。楽進たちはその場に腰を落としてしまい震える。華雄は高順を愛おしそうに見つめる。

「さあお前ら……やれ」

高順の号令と共に動きを止めている賊に向かい奇兵隊が斬りかかる。動きを止めていようと命乞いをしようと全て平等に殺していく。確かにそこには高潔な『賊から民を守る』という大義などない。

「ん？ どうした。気に入らないか？」

「……」

こちらを睨む楽進を嘲笑いながら高順は頭頂部のみで繋がっている賊を蹴り飛ばす。

「気に入らないなら強くなれ。いいか？ この世は弱肉強食。この世に存在する時点で誰もこの理から逃れることはできない。故に、俺もいつかは殺される。だが、簡単には死なないがな」

楽進は感じた。高順は、確かに卑怯・卑劣な手段を使い敵を殺す。だが、それ故に自分がいつか死ぬことも覚悟している。『弱肉強食』

。弱者は強者に喰われる。

「貴方は…自分が死ぬのも覚悟しているのですか」

「ふん。簡単に死ぬつもりはない、がな」

飛んできた賊の頭を蹴り落とし、そのまま踏みつぶした高順。高順は自分がいずれ『自分以上の強者』に殺されることも覚悟している。無論、簡単には殺されるつもりもない。

「筆頭。敵の全滅を確認しました」

「そうか。なら、引き上げるぞ」

高順は部下の報告を聞くと即座に引き上げることを決めた。今回の賊は大規模だったため官軍が現れることも予測できている。なら、なぜ留まって報告などをしないのかと疑問に思つかもしれないが、理由としては官軍の中には自分たちを毛嫌いしている連中がいる。まあ、早い話が官軍との無用な衝突を避けるためでもある。高順の部下は元々ならず者が多いのが理由でもある。

「あ、あの！ 私を連れて行ってください！」

「え？ な、風！？」

高順が華雄を連れて村から去ろうとしたときに、樂進がそんな事を言った。李典や于禁は信じられないように驚いていた。高順は樂進の顔を見て一言。

「…お前は、何故俺達に着いて来ることを選ぶ？ 言っておくが、俺らには貴様が望む大義はないぞ？ 結果のためなら騙し討ちだろうがなんだろうがするぞ？ それがお前の望みか？」

「……」

樂進からの返答はない。ただ、高順を見つめるだけ。

「（ふむ……別に興味はないが、面白そうではあるな）」

高順は、樂進に自分の思想や技を仕込むのも一興と考えた。そして、ただ一言「来い」と告げて華雄を連れて歩き始めた。

「すまん。お前たちとはここで別れる。だが、私は……強くなりた
いんだ」

旅の仲間であつた李典たちにそう告げると樂進は高順たちの元へと走っていった。

「風ちゃん……」

「…風……」

残された李典たちはその後姿を見送ることしかできなかった。

「では改めて聞こうか？ 何故、俺達についてきた」

盃に入つた酒を呑み、傍らには華雄を侍らすいつもの格好で高順は目の前に座る樂進を見据えた。

ここは、奇兵隊が拠点としている廃村。奇兵隊の大半がいるこの村に楽進はやってきた。

「私は強くなりたいんです。官軍などは信用できない…奇兵隊の噂は知っています。確かに、悪なのかもしれない。でも、結果としては人々を守っているには変わりありません」

別に高順としてはそんなつもりは毛頭ない。しかし、結果のみを見ればそうなっているのも事実。ならば、そこも利用させてもらう。

「なら……奇兵隊に入るか？ 言っておくが、俺らは『弱肉強食』と『結果』を重視する。他人から罵られることも、恨まれることも覚悟できるか？」

「はい！」

高順の見立てでは、楽進はよくも悪くも純粋な部分がある。ならばそこに浸けこみ、教育をすれば、忠犬になる可能性がある。

「華雄。明日から楽進の教育を頼む…教え方はお前の好きにしろ」

「ああ」

華雄も高順が何を考えているのか分かっているため、不満はない。むしろ、高順の為になることなので進んでするだろう。

「とりあえず、俺達には真名がない。呼び方は好きにすればいい。お前が真名を教えるかは好きにしろ」

そして、楽進は自らの真名を高順と華雄に預けた。

楽進が—— 風が選んだ道が正しいのか、それはまだ分からない。ただひとつ言えることは、決して楽な道ではないということだけ。

「筆頭。呉用より伝令です。董卓軍との交渉を終えたので、こちらに顔見せできて欲しいと」

「…分かった。とりあえず、俺と華雄、風、宋江、公孫勝を連れて

行く。残りは、ここの廃棄の準備をしておけ」

そして、時代が動き出す。

第2話 出会い（後書き）

凧が高順に着いて行ったのは、心の何処かで高順の言葉に同意したから。そして、高順を「いい奴」と誤解してしまった事も上げられる。でも、華雄の教育で高順至上主義になりそうな気がする。まあ、ある意味高順は「いい奴」ですよ？ 結果として村々の安全を確保しているのです。

凧はるる剣の瀬田宗次郎のポジション。でも、忠犬になる。むしろ狂犬？ ところで、華雄と凧って似ていない？

盛岡に行っていた友人と連絡がとれた…どうやら無事でした。

P S ・ネタとして「学園黙示録×真・仮面ライダー」を書いたけど需要あるのか？

第3話 高順と華雄

「筆頭。あれは一体？」

「……華雄の教育だろう。まあ、洗脳と取られてもおかしくはないだろうが」

高順と宋江の視線の先では、華雄が凧に何かを教えている。ただ、聞こえてくる単語の大半が「高順」なので洗脳にも見える。

「だが、当然だな。凧よりも華雄が強い。故に、凧が文句をいう筋合いもない」

無論、聞く人が聞けば暴論なのだろう。だが、ここではそれこそ真理。弱者の全ては強者に依存する。高順はこう捉えていた。無論、過度なやり方は先読みがしづらいため自粛するように言っている。

高順は砦を歩きながら呟く。宋江はそれに付き従うだけ。だが、一つだけ聞きたかった。

「筆頭。何故、楽進を？ お言葉ですが…あれは純粹です。下手を

すればこちらを裏切る事も――」

宋江の言葉に高順は口角だけを吊り上げた。

「だからこそ……いろいろ仕込みやすい。それで、俺らを裏切るのもよし。忠犬のまま死ぬもよし」

宋江は、珍しく高順が心から嬉しがっていることに気づいた。そして、華雄と凧を見る。

「（似ている。髪の色…顔立ちも…）」

顔立ちが似ているのはただ単に偶然だろう。だが、何故だろうか。会話の内容などを考えなければ母娘に見える。

「（まさか、筆頭は楽進を娘として見ておられるのか?）」

だが、高順を見てもそんな事は感じ取れない。となると、考えられるのは――。

「（自分の意思を継ぐ存在? いや…むしろ、楽進がどう生きるかを観察?）」

宋江はいろいろ考えたが、途中で思考を中断した。例え、どのような理由があろうとも高順は『弱肉強食』を掲げて生きるだろう。ならば、自分がいろいろ考えるのはやめておいたほうがいいと確信した。

「それに…華雄も少しは成長してもらわんとな」

「…そうですね」

高順は誰よりも華雄を愛している。そして、高順は誰よりも頭がいい。勉強ができるという意味ではなく『知恵が回る』という意味。だからこそ、華雄の危うさを知っているのだろう。

「依存が悪いわけではない。あの時の華雄にはそれしかなかった。俺もあいつにすぎるしかなかった」

華雄は精神的に、高順は肉体的に依存しあっている。だから、高順はある程度冷静なのだろう。そして、華雄を愛しているからこそ今の状態が危険であることに気づいている。

「精神的に成長するためには、他人と会話するのが一番だ。これで華雄も少しは矯正されるだろう」

そう告げると、皆に戻ってきている呉用のもとへ向かう。宋江は何も言わずに後ろを歩いて行く。

「高順は、私にとって全てだ」

華雄は風に向かってそう告げた。それは正しくそうなのだろう。二人が村を追われたときはまだ十やそこら。その際、高順はすでに自身の道を決めていた。だが、華雄にはまだ決めきれなかった。よく女性のほうが精神的成長が速いと言われる。だが、それも状況次第だろう。今まで貧しくとも幸せだった世界から放り出された少女に精神的に成長しろというのは酷だろう。

「だから怖いんだ。お前が悪いわけじゃない。でも、高順の感心が私から離れていくのではないかと思うのが怖いんだ」

凧はそう言つて弱々しい笑みを浮かべる華雄に驚いた。彼女が戦場で見た華雄は高順の横から離れない女傑。だが、目の前の女性はその姿と一致しない一人の女性。

「こうしているのも、高順に言われたからだ。高順に嫌われたくないから——」

凧は悟った。華雄の行動基準は高順が優先されていることに。しかし、同時に思う。もし自分が同じ位置にいたらどうなるかと。

「（多分……私もすぎるかもしれない）」

自分は両親に育てられ、そして旅に出た。途中で真桜たちと出会った。だが、村にいた頃に華雄と同じ状況に陥ったら？　もし、隣に頼れる存在がいれば？

「高順は動けるようになると、私を連れて放浪を始めた。最初は、今のうちに部下もいなかったから、街などで日銭を稼いだ。高順はあの外見だから、人身売買などを行っている場所での護衛。私は、普通に飯屋で働いた」

人身売買、という言葉に反感を覚えた。しかし、華雄は生きるため

ならば何でもしたという。非道い、などとは自分たちのような立場にいる人間にしてみれば関係ない。なぜならそのようなことをしなければ生きて行くことができないからだ。

「だが、高順は私に体を売ることだけは禁じた。その時、私は高順の『特別』だと理解した。高順の体が際限なく体温が上がってそれこそ、火を起こすことができるくらいになったときに高順は言った」

曰く、熱を鎮めるために抱かせろと。無論、それで熱を鎮める事ができるだろうが、それはあまりにも華雄を無視した言葉だろう。だが、華雄はそれを受け入れた。

「高順の『特別』になれるならそれでよかったから」

華雄はそう言って儚く微笑んだ。

「華雄は俺の『特別』だ」

宋江と公孫勝、呉用、戴宗というそれぞれ『副官』『工作部隊隊長』『筆頭軍師』『隠密部隊隊長』という幹部と董卓軍への編入する際の話し合いが終わり、全員でお茶を飲んでいるときに高順はふと呟いた。

「『特別』とは？」

呉用が湯のみを机に置いて聞いた。その他の人間も同じように耳だけを傾けている。

「俺が生きるためには定期的に何らかの方法で体の熱を抜かないといけないのは分かっているだろう？」

「無論」

高順の言葉に公孫勝が頷く。彼は、奇兵隊にいる仙人の中でも頂点に立つ。つまりは仙術を使える。そのような男が自分たちの頂点に立つ高順の怪我を治療しないわけがない。だが、高順はそれをよしとしなかった。

「これから言うことはひとりごとだ……ついでにこれは酒だ」

宋江たちは高順が茶を酒と言ったときにその意思を察した。高順がたまにこうするのは知っているから。

「あいつは俺が風の教育を任せたせいで俺の感心が風に向くと考えているようだ……あり得んな」

包帯で表情が分からない上に、そもそもが狂気や嘲りなどという負の感情以外を表に出すことがない男。だからこそ、こうやって惚気を聞くのが楽しかったりする宋江たち。

「俺は性根が歪んでいるからな。だが……それでもずっと手元に置いておきたい物くらいはある」

高順は自分が歪んでいることを許容している。そうでなければ騙し討ちなどを進んではしないだろう。だから、直接「愛している」などと言えない。

「華雄は俺の物……故に、どうするかは俺の自由だ。愛でも壊すも、な」

くつくつと喉を鳴らして笑う。ただ、そこには自嘲も混じっているように感じる。高順が華雄を愛しているのは本当だろう。ただ、それは言ってしまうと歪んだ物。

「（ふむ……人の業とは怖いものだ）」

かつては世俗を嫌って山にこもり仙人となった公孫勝。かつては嫌った人の業。だが、こうしてみるとこれも面白い。

第3話 高順と華雄（後書き）

ということで、今回はこんなおはなし。

高順は自分が歪んでいることを自覚しています。言ってしまうと、華雄に対してはツンデレというかヤンデレ？

次回は、ようやく董卓軍に入ります。

第4話 董卓軍入り

「お初にお目にかかる。我が名は高順。こちらは、我が伴侶にして半身華雄。後ろにいるのは、我が部下楽進、宋江、公孫勝、呉用、戴宗」

そして、元々が学のない集団なので礼儀がなっていないのは容赦して欲しいと告げ目の前の玉座に座る董卓に膝を折った。

ここに連れてきたのは、華雄と楽進。そして、奇兵隊でもっとも高順に近い四人。他の人間はとりあえず城の外に陣を張り待機させている。

「此度は我らの仕官の願いを聞き届けていただき誠にありがとうございます」

董卓だけではなく、賈？や張遼といった重鎮たちも絶句した。外見は包帯で、噂も悪党としか思えないような事をやっている集団の長と聞いていたので、高順がこのような対応ができるとは思っていなかったのだ。

「しかし、私は内政には向きません。内政などはこちらの呉用をお

使ってください」

高順は自分の出来る範囲というのを理解していた。自分にできるのは内政ではない。戦場で日常で、ありとあらゆる所で相手を陥れる策謀と武、そして部下を従わせる魅力こそが高順ができること。故に呉用を推薦したのだ。奇兵隊は多種多様な人材がいる。

「分かりました。それでは、高順以下奇兵隊の者たちの仕官をこの董卓が認めます」

この時、董卓軍に「最凶にして最恐」の部隊が編入された。

「せや。ウチと勝負せんか？」

そして、張遼こと霞が高順に向かいそのようなことを言ったのだが、高順は断った。理由をあげるならば、ただ一つ。

一応は、仲間なので殺すのは忍びないということ。

高順にとって模擬戦・訓練に限らず武器を手にとるという行為は総じて『殺し合い』である。故に、高順は戦場以外では武器を手にとる事はない。それこそ、襲われた際の自衛の時である。無論、その際も襲ってきた相手は例外なく殺しているが。

「なので、力量を図りたいのなら他の奴をどうぞ。宋江に言えば、戦いたがっている奴を教えると思うので。それとも、華雄。お前がやるか？」

「……お前が言うなら」

華雄は高順がやれと言われれば迷わず戦うだろう。だが、同時に恐怖している。自分がもし負けた時に高順の関心が離れることを。実際はそのようなことはないのだが。

「せやなあ。ウチかて模擬戦で死にたくはないし」

霞も高順たちの事を知っているから、高順とはあまり戦いたくない。先ほと言ってみたのも実際に見てみて判断したかったから。その結果は『危険』であるということ。呂布こと恋なんて高順の『危険性』を本能で察知しているのか若干警戒している。

「ならば、筆頭。私が張遼殿と戦ってみたいです」

さてどうするかと考えていた中、戦ってみたいと言ったのは風。彼女はある意味で師に恵まれていた。高順という手段を選ばない武人。華雄という高順の動きを助けるためだけに強くなった武人。他にも、

様々な『特徴』を持つ者たちの戦い方を見続けていた凧は戴宗の戦い方を参考にすることにした。

戴宗は『神行法』という移動術だけではない。噴射拳と名付けた技を持つている。これはその名のとおり氣を拳から衝撃波として噴射する技。凧には氣を扱う才があった。故に戴宗に噴射拳を教えるもらった。

「だから、今の私の實力を測ってみたいのです。張遼殿には失礼かと思いますが」

「ええよ。ウチもそういうのは嫌いじゃないし」

そんなこんなで凧対霞の模擬戦が行われることになった。まあ、凧はある意味で奇兵隊の實力が測れる場所にいる。そして、凧対霞の模擬戦が行われることになった。

「ほう。随分と成長しているな。華雄。何を教えていた？」

「別に。私はただ『臆せば死ぬ』という事だけ教えた」

高順は体の右側にしなだれかかっている華雄の腰を抱きながら模擬戦を見ている。模擬戦は互角といえば互角。しかし、やはり張遼という歴戦の猛者相手では現時点での風はまだ力不足。

「……精精、目に砂をかけるくらいはして欲しいものだ」

「いや、それは武人としてはどうなのよ」

高順の言葉に賣？こと詠がツツコミを入れるが、高順はそうやって生き残ってきているので自身の発言に自信を持っている。詠もその心情は理解できる。自分は他人を陥れる策謀を得意とする軍師。

「そういえば、これだけは聞いておきたいんだけど…アンタらは月を害する？」

「いや。少なくとも『強者』であり続けるのならば害することはせんし、途中で裏切ることはない」

さらに付け加えるならば、結果が出るまで高順が董卓の下を離れることもない。たとえるならば、董卓が大陸中の敵になったとしても董卓が死ぬか勝つか、それが明確な結果として出ない限りは離れるつもりはない。そう告げると詠は目を見開いていた。さすがにこの発言は予測していなかったのだろう。

「一応は、お前らに仕えているからな。結果が分かるまではお前らに従う」

それでも高順は契約はしつかりと守る。村々を支配していた時も搾取る代わりに保護はきちんと行っていた。このようなところも村人たちから一定の支持を得ていた理由なのだろう。

「……意外と義理堅いのね」

「クックック。そうでもなければ、流浪の集団としては生きてはいけんよ」

そもそも董卓軍に接触したのも今後の後ろ盾を考えてのことである。自分たちはそれなりに有名だとしても大陸北西部の涼州のみ。しかし、現在皇帝を擁している董卓軍についたとなれば名が売れる。例え、董卓軍が潰れたとしても自分たちの名前は大陸に知られる。後は、どこかの諸侯に使えるなり独立勢力として傭兵となるなりいく

らでも選択肢が増える。

「ふむ。善戦はしたがやはりまだ凧が勝つことは難しいか」

高順が話を切り上げ模擬戦を見ると凧の首もとに霞の刃を潰された訓練用の偃月刀が突きつけられていた。

「いやあゝ中々強かったで。高順、これもアンタの仕込みか？」

「いや。俺じゃない。俺はただ拾っただけだ。実際に仕込んだのは華雄だな」

霞の言葉に高順はなんでもない様に返す。実際、これは当たっている。高順は精精自身の掲げる『弱肉強食』の理念を言っただけ。実際に育てたのは華雄である。さらに言えば氣の扱い方を教えたのは戴宗。高順は何もしていない。だが、凧の中には高順は確かに頂点にいる。

「ですが、筆頭は私に道を示してくださいました」

高順と初めて会ったときに確かに高順は自身に道を示した。それが良いのか悪いのかはまだ凧には分からない。だが、『正しい』事には違いない。凧はそう思っていた。

「ほう。ならば、お前がこれからどう生きて行くか見させてもらう」

「はい。とくにご覧ください」

くつくつと笑う高順と自信たっぷりの顔で笑う風。それを暗い顔で見つめている華雄がいた。

「（……歪、ね）」

詠は誰にも気づかれないように顔をしかめていた。

第4話 董卓軍入り（後書き）

というわけで第4話です。

戴宗の噴射拳ですが、元ネタは作者の好きなアニメの一つ「ジャイアントロボ―地球の静止する日」より持ってきました。もちろん、設定は若干違っています。

ちなみに、奇兵隊で出番が多いのは宋江・呉用・公孫勝・戴宗です。

さて、次回は華雄がヤンデレるかも……

第5話 華雄

「まだだ…まだ私は…行ける」

華雄はただひたすらに自らの得物である金剛爆斧を振るう。高順が以前言っていた『無拍子』を我が物とするために。

高順が『無拍子』と名付けた技。一切の予備動作をせずに攻撃や移動を行うこと。これは相手の虚を突く形になるため奇襲や暗殺にも役立つ。高順はその技をすでに自在に扱える。特に一对一の戦闘では現時点で負けなし。

「風もどんどん力を付けている。負けられない…高順の隣は…私だけのもの。私だけが高順を理解できるんだ」

ただひたすらに大斧を振る。足元に貯まるほどに全身から汗を流しているが、決して留めていない。高順は言っていた。

『無拍子は考えて行動するものではない。本能…反射だよ』

つまりは考える前に動くということなのだろうと華雄は思っている。

だから、ひたすら大斧を振り続ければコツがつかめると思っている。

「……え？」

突然の衝撃。華雄は一瞬何が起こったのか分からなかった。そして、少ししてから自分が倒れたということに気づいた。

「脱水……」

公孫勝から言われた『脱水症状』を思い出す。そういえば、どれくらい大斧を振り続けていたのかは分からないが、一回も休憩していなかったと思いつつ立ち上がるうとするが体が動かない。段々と霞んでいく視界。誰かが声を上げながら駆け寄ってくるのが見えるが華雄はただ高順のことだけを考えていた。

「（これじゃ……高順に捨てられる）」

そう思いながら華雄の意識は途絶えた。

「お！ 目え覚めた」

華雄が目を覚ますと自分を覗き込んでいる霞の姿があつた。どうやら、意識が途絶える前に駆け寄ってきたのは彼女だったらしい。そして、頭がひんやりとしているので今まで看病していたようである。

「とりあえず、水飲みい。ほい」

霞から渡された水を一気に飲み干すと、また水を注がれた。恐らく、ちよつと多めに飲んでおけということなのだろう。そして、それを飲んで出された肉まんを少し食べて一息ついた時に霞が表情を正して華雄を見据えた。

「で？ なんで、倒れるまで訓練しとつたんや？ 夜中に訓練するのは…まあ、武人の鑑かもしれんけどな」

「……」

押し黙る華雄を見て深く息を吐くが、引く気はないようで華雄を見

続けている。華雄は水を飲むと口を開いた。

「風がお前と戦って、そこそこ善戦していた」

「せやな。まあ、ウチも本気ではなかったけど多分もっと鍛えればウチが本気出しても負けるかもしれんな」

霞は盃に入った酒を飲みながら風との模擬戦を思い出す。あの時は、本気を出してはいなかった。無論、真剣に戦っていた。本気を出すことと真剣に戦うことは同じではない。まあ、それはともかくとして。霞から見た風は『将来有望な伸び代のある武将』である。だから、最初はそれに焦ったのかと考えたが華雄を見る限りそうではない。

「高順が風に関心を寄せていた。だから私から関心が離れるんじゃないかと思ったんだ」

「……え？」

「高順が風に生き方を見させてもらうといった。つまり、高順が風を目にかけるということだ」

独占欲。というか、高順から関心を寄せられなくなるのが怖いのだ

ろう。霞は外見は立派な女なのに内面がまるで子供のような華雄を複雑な心境で見ていた。

「私と高順は幼い頃から一緒だった。その時は、武人となることなく村で畑を耕しながら一緒に暮らしていけると思ってたんだ」

華雄は徐々に、しかしはつきりとしやべり始めた。恐らく、タガが外れかけているのだろう。

「でも、村が炎に包まれて私は一人隠されていたんだ。そして、外がある程度収まったのを確認してから外に出た。そこで見たのは近所のおじさんや朝にあいさつしてきた同い年の女。お調子者だった一つ上の男。そいつらが死んでいる光景だった」

霞は顔をしかめた。恐らく、華雄は絶望したのだ。突然、自分たちに襲いかかった理不尽に。だが、それについて自分が何かを言うことはできない。なぜなら、自分も同じ状況ではどうなるか分からないから。それも、どう考えてもまだ少女という年齢だったのだろう。武人として覚悟を決めていたわけでもない。突然、そんな状況に陥ったのだろう。

「だから、高順を探した。高順は昔から要領がよかったから生きていると思ったから。そして、見つけたんだ。盗賊の一人の懐に入り込んで剣をその体に刺している高順を」

華雄の顔は晴れやかだった。霞は知らずのうちにそばに置いてあった酒を飲んでいた。酔えない。酔うことができない。喉はカラカラに乾いている。だから、酒を飲んでいるのに酔えない。華雄のどこまでも昏い目を見たから。

「高順は全身にひどい火傷を負っていた。それこそ、一見すれば高順と分らないほどに。でも、私は分かったんだ。あれが高順だった」

饒舌に喋る華雄。霞は生唾を呑んだ。体が震える。

「（な、何や……これ。こんなウチは知らん）」

「だって、高順の事が好きだったから。ずっと、一緒に入られるとおもっていたから。だから、高順が生きていたから私は一人じゃなくなつた。そして、私に生きる道を示してくれたんだ」

クスクスと笑う華雄。霞は知らずのうちに机の上の水差しを掴んでいた。人は理解出来ないものに恐怖するという。霞にとって目の前にいる華雄がそれだった。

「高順のためならなんでもできる。人を殺せというなら殺す。抱かせると言われれば喜んで差し出す。私にとって高順は愛する男で私

の全てだから」

だが、その狂気もすぐに収まり今度は親とはぐれた子供のような空気をまとう。霞は乱れた呼吸を整えながら水差しの水を飲み始める。

「だから、高順が私を捨てるんじゃないかと思うと怖いんだ。高順が風を大事にして私を捨てるんじゃないかと思うと……だから、もっと強くならなければならないんだ。高順の隣に立ち続けるためにはもっと……もっと」

「……難儀やな」

霞も考えすぎなどとは言えない。こればかりは本人の心持ち次第だから。それに、このように考えがぐるぐるになっている人間には肯定とも否定とも取れない中庸の返答をしたほうがいいというのは経験でわかる。

「……ふむ。こればかりは俺の落ち度だな」

「「ッ!!」」

突如、聞こえてきた声。霞は盃を落とし、華雄はその声を聞き一気に恐慌状態に陥った。扉をあけて入ってきたのは着流しを着た包帯

男——高順だった。

「ち、違っんだ！ これは…これは…違う。私は「気にするな。お前の本心が聞けただけでも僥倖だ」あ……ああ」

高順がゆっくりと華雄と霞の方へ歩いて来る。華雄は耐え切れなかったのかボロボロと鳴き始めた。霞はどうやって状況を鎮めるか考えるが、高順が手で制した。

「まあ、俺自身歪んでいるからな。こればかりは謝るほかないな」

そして、高順は包帯に包まれた手ではあるが華雄の頭を撫でた。

「張遼。済まなかったな。華雄が迷惑をかけた」

「あゝそれは別にええんやけど……」

霞としては華雄の看病だったので別にいい。だが、華雄がどうにもきになる。

「心配するな。明日にはこいつも治っているさ。ま、これからちょっとお話だな」

震えながら俯く華雄を抱えて笑う高順。そのまま高順は霞の部屋を出て行った。

「……………なんや……………前評判は最悪やったけど……………身内には甘いんか？」

奇兵隊の噂を知っていた霞。だが、その筆頭という高順の悪名はそれなりに知っていた。だから、高順が自軍に來ると知ったとき正直反対だった。だが、ああやって華雄を見る目は優しいものだった。まあ、それでも怖かったが。

「ん〜。もしかしたら、悪人ではあるけど分別はあるっちゅーことか？」

まあ、悪人の時点で分別も何も無いのだろうが、敵対しなければいい奴では？と思い始めた霞だった。

「高順…その……」

華雄は高順と共同で使っている部屋の寝台の上で小さくなっていた。自分を見ているであろう高順を見ることができないから。

「ふむ。あえて言うならば…馬鹿か？ 俺がお前を捨てるなどという戯言をよく考えつくものだ」

高順はくつくつと笑いながら華雄の顎に手を当てて自分のほうを向かせる。

「だが…お前は昔からそうだな。一度後ろ向きになるとそれが延々と続く。董卓殿との謁見の時にお前を伴侶にして半身と告げたはずだがな？」

「あ……」

確かに、董卓との謁見の際に高順は華雄の事を『我が伴侶にして半

身』と告げた。高順にとって華雄は切り捨てるという選択自体が存在しない人間なのだ。

「まあいい。ここで改めて命令してやる。華雄。お前の全ては俺のものだ。愛でも壊すも、な。だからこそ…お前は俺の傍にいろ。俺の命令なくして死ぬことは許さん」

「あ……ああ。私はお前のものだ。だから、ずっと傍にいさせてくれ！」

華雄は泣きながら高順に抱きつく。華雄は嬉しかった。高順が命令してくれたから。

「（我ながら救われんな。だが…俺のような狂人はこうすることしかできない）」

どこまでも壊れている二人。恐らく、死ぬ時も一緒なのだろう。だが、それでいいと高順は思う。形はどうあれ自分が華雄を『愛している』のは事実だから。

第5話 華雄（後書き）

なんか狂気が足りない気がする。クトウグア辺りを召喚すべきか？
若しくは、ティンダロスのワンちゃん辺りを……。

次回は、多分黄巾党編。でも、すぐ終わるかも。

無拍子などは、作者が知り合いの薬丸自顕流の師範代の人に昔聞いた事を元に行っているので、諸説あるため「この小説ではこうなんだ」という感じで思ってください。

第6話 高順と曹操

「クツクツク。随分と正直に生きているな」

高順は右側に華雄、左側に凧を侍らせて眼下に集まる黄巾党を睥睨する。最近になって大陸中で暴れまわっている黄巾党。やり方、理由はどうあれこれこそまさに「弱肉強食」の縮図。だが――。

「盛者必衰という言葉もある。自分たちが常に勝ち続けるとは思わないことだ。掛かれ」

無論、この言葉は自分たちにも返ってくることは理解している。だが、ただ暴れることしかできない連中と比べるわけにもいかない。

「一人、二人、三人、四人」

高順は次々と黄巾兵を斬殺していく。凧は突貫しているが、華雄は常に高順の隣で大斧を振るう。これがこの三人の戦い方。そもそも凧は途中参加だし、華雄が高順の横にいるのは高順の体が原因である。高順は全身の火傷のせいでたまに動きづらくなることがある。その補佐のために華雄は横にたっている。

「高順。そろそろ」

「ん？ もうそんな時間か」

そして、もう一つは高順の戦闘可能時間を測るという役目も華雄は持っている。高順は体内の熱を汗などで取り除くことができない。そのため、戦闘可能なのはどんなに頑張っても大体一時間ほど。といっても、本陣などで水を体に掛けて体を冷やせばまた戦えるのだが。

「風、戦闘は？」

「はい。張遼將軍が黃巾党の後ろから攻撃し、敵はちりぢりです。それと陳留より曹操殿の軍が現れました」

「あれ、か」

華雄が見る方向には『曹』の牙門旗を掲げた一軍。とにかく、謁見ならばあちらから来ると判断して高順は宋江に指揮を任せると華雄と風をつれて陣へと戻っていった。そして、今回はいろいろと事情があるため、華雄と風が高順の体に冷水を徐々に掛けることで体温を応急処置的に下げていた。そして、天幕の外には宋江と呉用が控えている。高順の火傷を外に見せないためである。

「筆頭。張遼殿が曹操殿とその臣下の方を連れてきました。どうやら、顔合わせをしたいようです」

「もう少し待て。今、包帯を巻いている」

風が体を拭き、華雄が包帯を巻いている途中に宋江から声をかけられたので暫く待つように伝えさせる。すると、すぐ近くに張遼が陣を張ったのでそこに来るように伝えられた。

「曹孟徳、か。噂はそこそこ入っているが……どんな人間かな」

口角だけを吊り上げたその笑いは包帯をしていない顔と合わせり恐怖を与えるものだった。

「失礼。随分と遅れてしまった」

華雄と風を引き連れて霞の陣の天幕に入ると、金髪の少女とその後方に控える黒髪と青髪の顔立ちの似た二人の女がいた。霞は高順が入ってきたことを確認すると、紹介を始めた。金髪の少女が曹操、黒髪の女性が夏侯惇、青髪の方は夏侯淵と分かった。

「貴方が高順？ 噂通りの顔らしいわね」

「敵を萎縮させるくらいはできるぞ？ 何なら見てみるか？ 2、3日程肉が食えなくなっても責任はとらんぞ？」

会っていきなりの言葉に風が眉をひそめたが、高順は別に気にしていない。むしろ、活用できる場面ならば自分の顔を使うのが高順である。探るための曹操の言葉も意味を成さない。

「俺の噂を知っているなら探ることはしないほうがいいぞ？ 程度が知れる」

「……そのようね。ごめんなさい」

曹操としては高順がどんな人間かを測るつもりだったのだろうが、高順が別に気にしていないことに素直に諦めた。どうも高順には揺

さぶりなどが効きそうにない。

「それより、張遼。何のようだ？」

「いや、別になんもないで？　ただ単に顔合わせっちゅーか、な？」

本当に特に意味はないのだろう。若しくは、自軍にはこんな人間がいるということを知らしめたいというのもあるのだろう。

「それだけならば俺は戻る」

「へえ。戦闘が終わったらずに帰るといふのは本当だったの？」

曹操も高順の事を調べていたのだろう。といつても、高順の周囲には戴宗率いる隠密部隊がいるため流される情報が選択されているのだが。

「ああ。これでも万年重病人なんでな。健康には気をつけないければならんだらう？」

「そうね。こんなご時世だもの。私も気を付けないと」

互いに本心を見せない会話。ふと見れば霞がぐったりしていた。そして、高順が華雄と凧を連れて出ていこうとしたときに曹操が凧に声をかけた。

「そついえば、真桜と沙和があなたの事を心配していたわよ？ 貴方さえよければこつちに来てでも歓迎するけど？」

「……なるほど。曹孟徳殿はそのような人間か。革新的なお方と聞いていましたが私の見込み違いだったようです」

凧はそう言つて嘲るような目を曹操に向ける。夏侯惇が激昂して剣を抜こうとするが曹操がそれを止めた。

「気を悪くしたなら謝るわ。ただ、貴女と彼女たちはかつての旅の仲間と聞いていたからね」

曹操は内心で自分の行動を恥じた。悪名と同じくらいに勇名も知れ渡っている高順たち「奇兵隊」。そして、実際に高順に会つて思つたこと。

この男は獣。それも、賊が持つような卑しいものではない。虎や鷹のように獰猛でいて知性を感じさせる目。故にいずれこの男は自分の道に立ちふさがる。そのため、できるだけ人材を奪いたかった。

だが、結果として自分に対する不信を植えつけただけ。

「（それも当然か）」

こればかりは素直に認めよう。失敗以外の何者でもない。

「（結局、私もまだまだってことね）」

こつちを見下して鼻を鳴らしてすでにいない高順たちの後を追った
風を見ながら息を付いた。

「曹操殿。悪いことは言わんから、高順に手を出すのはやめておいたほうがええで？ 下手にちよっかい出して華雄や樂進に殺されても知らんよ？」

「私たちがいるからそのようなことはありえない！」

霞の忠告に夏侯惇が声を荒げるが、霞は肩をすくめる。

「うちも最初はそう思ってたよ？ でも、華雄も樂進も高順が望めば道連れにするくらいはやってのけるで？」

奇兵隊は獣の群れ。高順という王に従う群れ。故に群れの頂点に立つ高順の命令には全員が従う。陰謀渦巻く場所にいる自分からすれば羨ましい事この上ない。だから嫉妬していた。まあ、それはともかく。

「他の場所じゃ知らんけど、特に涼州近辺じゃ知れ渡つとる。一回、悪徳領主が高順を罫にはめて怪我を負わせたんよ」

そしたらどうだろうか。翌日には奇兵隊やその信奉者である盗賊集団がその領主の屋敷を襲撃したのだ。

「恐ろしいわね」

だが、曹操が見た限りでは忠誠を誓っているわけではなさそうなので、付け入る隙はあるかとも思っている。

第6話 高順と曹操（後書き）

ちよつと今回はクオリティが低いかもしれないです。

とりあえず、現時点で風も高順に傾倒しています。とりあえず、そこから辺はあとで書きたいと思います。

次回は、さつさと反董卓連合編に入りたいと思います。

第7話 蠢く者

「黄巾党が壊滅したか」

「はい。首領とされていた張角らは曹操に捕縛され斬首されたと」

華雄を右側に、鳳を左側に侍らしながら高順は宋江からの報告を聞いていた。高順たち奇兵隊の詰所は高順を筆頭とする幹部、各部隊の隊長たちが集まっていた。

「それと、戴宗が洛陽にいている部下からの報告で十常侍が何やら不穏な動きを」

「どうやら自分たちの身の危険を察知したらしいな」

「筆頭！ 董卓様が軍議を行っらしいです」

董卓軍とは別ルートで大陸中の情報を集めて、その確認を行っていたのだが戴宗の部下が軍議を董卓たちが行う事を伝えに来たため、一時確認を中断し玉座へと向かうことにした。

「華雄、風行くぞ。宋江、出陣の準備をしておけ」

「『御意』」

「来たわね。まあ、アンタの情報収集の速さは知っているから手短に言うわ」

玉座の間には張遼などを始めとする董卓軍の全武将が集合していた。そして、賈？から告げられた言葉。

「十常侍が私たちを洛陽に来るように言ってきたわ。まあ、あつちの思惑は分からないけど、陛下がないがしろにされているという噂もある。そこで、奴らの思惑に乗ることにしたわ」

ざわめく玉座の間。しかし、高順は静かに口角を釣り上げていた。

「まあ、張遼たちは今まで通りでいいんだけど。高順。アンタにはやって欲しいことがあるの」

「十常侍に取り入れ。そして、董卓軍に不利益な自体が起きた場合は殺せというところか？」

「ええ」

「クツクツ。まあ、好きにやらせてもらうが……もしかしたら十常侍が『見知った顔』になっているかもな」

「それは魅力的な言葉ね」

言外に十常侍を殺して首を挿げ替えるか、自分たちが十常侍になると言っているが、突っ込む勇気のある人間はいない。

「高順さん。気をつけてください」

「任せておけ」

董卓も心配そうに高順に声をかけるが、張遼たちは心配していない。

まあ、仕方のないことである。

「とにかく、そのような方針で行くわ。残念だけど、多分謀略ではあっちが巧いと思うわ。全員、気を引き締めて」

「」「」「御意」「」「」

「了解した」

こうして董卓軍は洛陽へと拠点を移すことになった。

「張讓様におかれましてご機嫌麗しいようで何よりでございます」

そして、洛陽に着くと高順は華雄と宋江を連れて十常侍のまとめ役である張讓の元へと秘密裏に——それでも、董卓軍にとっては予

定通り——訪ねていた。

「うむ。高順とか言ったか……しかし、貴様は董卓殿の部下だったはず。何故、私の下へ？」

「いえ。あのような小娘に付くよりも張讓様についたほうが得かと」

高順は宋江に目配せをすると、宋江は黙って張讓に金寿を渡した。張讓はそれを受け取ると実に嬉しそうに笑った。

「ホッホッホ。よろしい。貴様のことは記憶にとどめておくでしょう。しかし、貴様には誇りというものは無いようだな。まあ、所詮は下賤の輩と言う者じゃな。その顔もどうせ貴様の不徳ゆえじゃろ？」

「お恥ずかしい限りで……」

張讓の嘲笑にも高順は膝まずくだけ。高順は別にどれだけ蔑まれようが結果さえよければよいため気にしない。そもそも『いずれ殺す人間のわがままを聞いてやる』くらいの度量は持っていると自認している。

まあ、華雄は内心で高順から「張讓を殺せ」という命令を今か今か

と待っていたのだが。ちなみに、宋江は張讓の太りきった体を見て「何を食えばここまで豚のように太ることができる？」と関係ないことを考えていたりする。

「筆頭…華雄様は何故お怒りなのですか？」

新たに与えられた高順の部屋で風はお茶を淹れながら高順に質問していた。風は戦闘以外は高順の侍女の役も担っている。

「何…：張讓が俺を下に見たのが気に入らないのだろう」

「当たり前だ！」

華雄が一時期情緒不安定に陥っていたが、高順がフォローを入れたことで持ち直した。そのせいか、若しくは高順のフォローの結果なのかは分からないが、華雄は高順と風の前ではこのように不満を顕

にする事が多くなった。それでも、高順至上なのは変わらないが。

「気にするな。お前は、肉を喰うときに戸惑うか？　そういう事だ。あの男はいずれ殺すことになる。それまでは精精ご機嫌を取っておく」

他の十常侍にも賄賂を渡しており、ある程度董卓の好きにすることを確約させている。

「宋江。董卓様たちは？」

「とりあえず、陛下との謁見は済ませたそうです。董卓様は筆頭を紹介できないことを悔いておられました」

「問題ない。俺は影に徹する。華雄、お前は奇兵隊二番隊以下を率いる。凧には董卓軍の一部隊を任せるように賈？に言っておいた」

「な……」

「筆頭、何故ですか！」

高順の命令に異を唱えるのは珍しいと思いつつも、まあ仕方のない

ことが、と考えて自分の策を告げた。

「俺の行動を悟らせんためだ。それに、董卓軍に武将が少ないのも問題だろう」

董卓軍が脆弱という訳ではない。だが、張遼や呂布以外に猛将がないのも事実。

「安心しろ。別に、董卓軍の将として動かないわけではない。ただ、少し仕込みをしておくだけだ」

「仕込み、ですか？」

風の言葉に高順は首をかしげた。

「ああ。そうだ、一応紹介しておくか……入ってこい」

高順の言葉と共に入ってきたのはニコニコと笑っている一人の男。

「お初にお目にかかります。小生は、司馬懿仲達。この度、奇兵隊に参入させていただきました」

司馬懿仲達。華雄はその名前に聞き覚えがあつた。名族司馬家の異端児として有名な男。知略に優れており、一部では『国士無双の生まれ変わり』とまで称されているらしいが本人は名家の人間としてはありえない性格をしているらしい。故に、異端児として扱われているとか。

「司馬家からはすでに勘当されていますがね」

司馬懿は笑顔のままそう言った。こうして、奇兵隊に一人の男が加わった。

「ところで、お前の年齢は？」

「。。。ですが？」

「え？ 私と同年？」

凧と同年という司馬懿。凧は、司馬懿の落ち着きなどを見てすぐ落ち込んだという。

第7話 蠢く者（後書き）

新キャラの司馬懿です。こいつには、華雄や凧ではやり辛い策をやってもらう予定です。その内容はお楽しみということ。ちなみに、凧とカップリングを考えています。つまりは、高順と華雄たちの次の世代といった感じで

第8話 司馬懿の策

「天の御使い？」

「ええ。懇意にしている商隊の長に聞いたところ幽州に天の御使いが降り立ったとか」

「そうなのか？」

「でも、確かにそんな感じの予言は聞いたことがあります。玄崩は何故知っているんだ？」

「ま、小生にも情報網はあるのでな」

司馬懿はすでに司馬家から勘当されているということで、真名である「玄崩」を名前とすると告げた。無論、「司馬懿仲達」の名前は有効活用するらしい。そして、今では夙の補佐に付いていた。夙の補佐ではあるが、実際は高順の下にいる幹部である華雄、宋江、呉用、公孫勝、戴宗、夙と同等の地位にしていること。新参者ではあるが、すでに奇兵隊の筆頭軍師である呉用並の知略を持つため奇兵隊の「弱肉強食」というルールのおかげでこの地位にいる。

そして、玄崩がその地位に上り詰めたのはかつて司馬家にいたときに築き上げた大陸中を日夜動き回っている商隊を利用した情報ネットワークをもつから。科学が発展しておらず現代でいう「オカルト」が信じられているこの時代においてはこれ以上無い強みになる。

「情報は武力以上の力だからな」

高順は情報の有用性を知っている。情報操作次第で、勢力図を一気に塗り替えることも可能なのだ。

「まあ、それはそれとして…天の御使いは今どこにいる？」

「幽州の義勇軍にいたとか。そして、その義勇軍の長であった劉備玄德という少女と共に二頭体制で義勇軍を率いているとか」

「待て。それはまずいんじゃないか？　つまり、王が二人いるのだろっ？」

華雄の言い分は的確だった。皿もその歪さが分かる。二頭体制ほど面倒なものはない。何故なら、その頭二人の意見が対立すれば組織は動かなくなるだろう。勿論、二頭体制が悪いとは言わない。だが――。

「天の世界の常識を持ち込まれても困る。天の御使いは神輿と天の世界の技術を吐き出すための装置でいい」

それが許されるのは頭二人が『同じ世界の住人』であればこそと華雄は思う。天の世界の事など自分たちは想像できない。だから、知らない世界の常識を基準に考えられては困る。

「玄崩。幽州の情報を集めておけ」

「御意」

どちらにしろ天の御使いが義勇軍の運営に関わるなら、天の世界の戦術や技術を使うだろう。ならば、それをいただくでしょう。高順は晒った。

「使えるものは使わなければな。そう思うだろう？」

高順が顔を向けると、華雄も凧も玄崩も同意の頷きを返した。

「なに？ 十常侍が？」

「ええ。どうやら、陛下が月と一緒にいるのが気に入らないらしいのよ」

高順が玄崩と共に裏方になってからおよそ半年が経った。その間、高順は玄崩を連れて十常侍たちに取り入っていた。特に、玄崩の知り合いの商隊などから齎される潤沢な資金は十常侍にとっては欲しい物だったらしく、いろいろと動きやすくなった。

「つまり、陛下を傀儡としている逆賊董卓を倒せ、と」

「ええ。あんたの所にも誘いが来ているんじゃないの？」

ふむ、と高順は記憶をたどる。確か、張譲に「そろそろ立ち位置を

考えたほうがいいぞ？」と言われた事があった。あれが合図か。

「で？ お前はどつする？」

「戦うしか無いでしょう？ まあ、勝ち目はないかも知れない。でも、月を殺すわけにはいかない。だから、『董卓』を殺す」

「……ま、こちらは雇われている身だ。命令には従うさ。で？ 十常侍は好きにしているのか？」

「ええ」

「そうか……なら、華雄たちにやらせるか。鬱憤が溜まっていたよ
うだし」

そう言うと、天井裏に視線を向けた。天井裏というか、高順の周囲には常に戴宗の部下が二人付いているためこのように会談の内容などをすぐさま部隊に届けることができる。高順はこの方法で常に十常侍たちの先手をとっていた。

「ま、明日には十常侍が入れ替わっているんじゃないか？」

「本当に、あんたが敵じゃないことに感謝よ」

詠が思う一番恐ろしい人間。それは、戸惑いもなく暗殺などの非道な策を取れる者だと思っている。

「ま、お前もこの董卓軍の終わりが見えているだろう？」

「ええ。軍師だからね。色々、情報を考えるとどう考えても董卓軍は終わる。なら、せめて十常侍や誘いに乗ろうとしている連中に刻んでやるわ。自分たちの愚かさを」

詠は毅然と言い放った。詠にも分かっている。例え、勝っても負けても自分たちは終わると。それならば、せめて喉元に食らいついで力を削いでやる。

「いいだろう。ならば、こちらも手段は選ばんぞ？」

「いいわよ？ 月の命が保証されれば…全ての汚名は私が被るわ」

そう言って二人は顔を見合わせて笑った。自分たちは同類かも知れないと思ったから。

翌日から宮廷で奇妙な事件が起こり始めた。例えば、十常侍の一人が突然腹を押さえて苦しみなばら死亡したり、貴族の一人が眠っている際に『偶然』壁に立てかけてあった剣が落ちてきて頭に刺さったりと。

「多分、世が乱れるという暗示だろうな」

そのような噂が宮廷に駆け回った。しかし、次々と宦官や貴族が死んでいく。その事態を恐れたのか張譲は袁紹に檄文を飛ばした。

曰く「この宮廷の怪異も逆賊董卓が何かしているに違いない」と。しかし、董卓と懇意にしていた宦官なども死んでいたため、袁紹もさすがに一瞬戸惑ったがすぐに各諸侯へと檄文を飛ばした。そして、段々と反董卓連合が出来上がりつつあった。

「一体、何故このようなこと——」

張譲は酒を飲みながら焦っていた。彼には気づいた。確かに董卓と懇意にしていた宦官なども死んでいた。だが、懇意にしていたとはいえ、元々は自分の命令で董卓に擦り寄っていた連中。つまりは、張譲たちの派閥と言っている。

「張譲殿。お疲れさまでした」

「こ、高順！」

高順は華雄を連れて張譲の部屋に現れた。しかし、問いただそうとした瞬間にその首は体を離れ地面に落ちた。

「……あつけないものだ。さて、華雄。死体をそこに転がせ」

「ああ——こんな感じでいいか？」

「上出来だ。さて、あとは——」

科学などが発展していないからこそ少し合理的な死亡現場を作るだけで簡単に騙される。さらに、医師などもすでに『入れ替えて』いる。張譲は『事故死』である。

「さて、これで随分動きやすくなる。後は『董卓』を殺せば問題はない。行くぞ」

「ああ」

「さて、それではお願いします」

玄崩は風を伴って商隊の長の所に来ていた。そして、商隊に潜り込んだのは数十人の兵隊。彼らは反董卓連合に入り込み工作をしてもらう者。

「劉備たちが義勇軍を率いるはずです。そこにもぐりこんでください」

そして、この数日後、高順たちが守る？水関に反董卓連合が到着することになった。

第8話 司馬懿の策（後書き）

この時代って殺人とかもごまかしやすいですね。一刀などの存在がなければいくらでもごまかせる気がする。

それと、情報操作の方法を握っていると結構チートな存在だと思う。そこら辺どう思います？

次回からいよいよ反董卓連合編。暴れるぜー暴れさせるぜーという気持ちです。

第9話　？水関へと至る道

「詠！　高順たちが居らんのやけど……」

朝一番に玉座に入ってきた霞はそう報告してきた。すでに、董卓軍の将は集まっており自分たちの配置はどこになるかと待っていた。

「心配ないわ。高順たちには？水関に行ってもらってる。アンタたちに知らせなかったのはボクの落ち度。それは謝るわ。でも、高順たちが？水関に行ってくれているおかげでこちらとしては少しだけ考える時間ができた」

「確かに、高順の戦運びは巧いから時間稼ぎは出来るやろうけど……ちよつと、きつない？」

「心配ないわよ。多分、？水関周辺に罠とかいろいろ仕掛けるわよ」

「ちなみに、ねねは高順どのから色々と罠を教えてもらったのです。恋殿は虎牢関に行く可能性が高いから虎牢関にでも仕掛けておけると言われたのです」

「……それと、恋の武器の錆を落としてくれた」

何でも、どうしても取れなかった鎧を高順が部下を呼んで落としてくれたらしい。さらには、十常侍たちもすでに肅清済みというのだから仕事が早いにもほどがある。

「とにかく、高順たちが足止めしている間にこっちは策を考えるわよ。月、もしかしたら『董卓』を殺すことになるかも知れない」

「うん。大丈夫だよ詠ちゃん」

自分を置いて話が進んでいるのに思うことはあるが、詠が自分のことを思っていてくれてるので、何も言わない。それに、王はどっしりと構えるものだとかえられたから。

「孫氏いわく『兵は神速を尊ぶ』だったか？ だというのに、檄文が送られてからひと月経つのに……未だに現れんか」

高順は？水関から眼前に広がる荒野を見下ろしながらそう呟いた。未だに反董卓連合はここに現れていない。戴宗の部下の報告ではここより数百里ほど離れたところに陣を張ってそこで軍議やらなんやらを行っているらしい。

「まあ、人間が複数いるんだ。考えがまとまらないのも理解はできるが……」

「そもそも、私たちのような部隊が珍しいのではないか？」

襦袢に身を包んだ華雄がいつの間にか横に立っていた。しっかりと着込んだわけではなく両肩を出すという扇情的な格好だが、すでに？水関は高順たちの砦となっているので、こんな格好でも何も言わない。

「私たちは独立部隊と言ってもいい。賈？からもそんな事を言われているだろ？ いつでも切り捨てられる部隊。だけど、その代わりになんでもできるじゃないか」

「ふむ。まあ、特殊な立ち位置なのは納得だな」

高順はそのまま少し考えた後、華雄を連れて？水関の中へ引っ込んだ。

「畏とはかかると分かっているにもかかわらずしてしまうものを言う」

「……玄崩どうしたんだ？」

「いや何。すこし、教授してやろうと思ってな」

玄崩は荒野に立ちながらくつくつと笑う。その隣には胡散臭そうな目で玄崩を見る風。その周りには穴を掘ったり、岩壁に細工を施している工作隊の姿があった。

「とりあえず、岩壁の畏は注視すれば分かるようにしてもらおう。

その代わり、落とし穴はしっかりと隠蔽してもらう」

新参者のはずなのに指示を出す。そして、それにしっかりと従う兵士たち。高順の躑の結果である。

「何故、そんな事を？」

「小生は常々人を観察するのが趣味。その結果、人は目先の事項に囚われやすいと知った」

だから、少し注意しておけば分かるような罠を仕掛けた。

「まあ、完全に引つかかるかと言われると保証はできん。だが、どちらにしろ『罠がある』とすれば慎重になるだろう」

「なるほど」

「それに、筆頭の許可をいただいて涼州の盗賊たちを動かすこともできる。さすがに、領地が盗賊に襲われると集中できまい」

玄崩は、この連合軍に参加する諸侯がそれぞれの上位幹部を大量につれてくるのを予期していた。当然だ。この連合軍はそれぞれの名

前を知らしめるためにはもってこいの場所。そのために最低でも上位10人程の武將を連れてきている。つまり、それぞれの領地には良くてもそこそこの実力を持つ将しかないことになる。まあ、実際は違うかも知れないが。

「しかし、連合諸侯にとって領地を任せている将よりも、こちらに連れてきている将の方が信任が篤いのは事実。ならば――」

ならば、こちらとの戦いに集中できないようにすればいい。

「すでに、合図は出している。連合が？水関に到着するであろう頃に動くようにも」

「……お前、本当に何者だ？」

凧は玄崩が分からない。裏切るような感じはない。だが、どこか危険な感じがする。

「そうさなあ……小生は司馬家でも異端と言われた。曰く、人を見下している。神算鬼謀などという言葉では表せない思考をしている。あの男は鬼子だ、などと」

玄崩はくつくつと笑う。凧はその姿が高順と重なって見えた。ただ、

違うのは思考の方向。

「筆頭は素晴らしい。純粹なまでに弱肉強食という理で生きている。そこら辺にいるような『自分は他人を踏みにじりたいが、自分が踏みにじられるのは嫌だ』という馬鹿ではない。自分が踏みにじられるのも納得している。私が見てきた者の中にはいなかった」

「だから、筆頭の下に来たのか？」

「然り。まあ、私の身の上などはどうでも良いこと。今は、罨を仕掛けるのが先決なり」

「ああ」

未だに玄崩のことは分からない。ただ、高順に心酔しているようなのでとりあえず少しずつ分かっていけばいいと思う。

「さて、全員集まったところで総大将を決めたいと思います。まあ、この中でそれが可能な者は限られていますけどね！」

曹操は痛む頭を抑えていた。別に、袁紹が総大将になりたいのに自分から言うのは嫌だということに悩んでいるわけではない。そこに思うことはあるが、なにより頭痛の種なのはここにいる連中。劉備や天の御使いはただオロオロとしているだけ、孫策たち呉はただ傍観しているだけ。こいつらは何しに來ているのだ。曹操はそう毒づいた。

「ちょっと、いいかしら？」

「あら、なんでしょうか華琳さん？」

「別に、総大将は誰がやってもいいわ。ただ、分かっているの？水関を守るのは高順や華雄といった『涼州の賊』の頂点に立っている連中よ」

賊の頂点と言っても、例えば冀州や呉ではそこまで重要視はされない。でも、病に倒れている馬騰の名代の马超は冷や汗をかいている。彼女は知っているのだ、高順がどという男かを。

「马超。その顔は高順の事を知っているわね？」

曹操のその言葉でその場にいる全員が马超に注目した。それで気圧されたのか心持ち体をのけぞらせるが、息を吐くとポツリとしゃべり始めた。

「その…涼州や西涼は賊も馬を使ったり、その…五胡ともかわりがある連中もいるんだ。だから、その中で頂点に立っているのははっきり言って難しいんだよ。でも、高順はそれをやったのけた。数々の村を縄張りにして賊から守る代わりに食料とかを貢がせていた」

その言葉に噛み付いたのは誰だろう？　だが、話はまだ終わっていない。

「高順は並み居る賊をその武で従わせていた。その…賊にとつちや、高順はそれこそ理想なんだよ。高順に付いておけば、死なないしそれなりに好きな生き方ができる。勿論、それに迎合せずに潰されていった連中もいるけど」

「それに、高順は罨や謀略にも明るいと聞く。？水関に行くまでに無事で済むのかね？」

そんな事を言ったのは、数ある義勇軍の内の一つ隊長だったはず。商人とも親しいらしく？水関に高順がいるという情報を持ってきたのもこの男。だから、この男の発言にも全員が注意した。

「とりあえず、総大将は袁紹殿にいただき、？水関をどう攻めるかを考えたほうが建設的だと思うぞ？」

そして、その言葉と共に諸侯は総大将を袁紹にし、？水関をどう攻めるかということに焦点をおいた。その経過を劉備や天の御使いはただ見ていることしかできなかった。

第9話 ？水関へと至る道（後書き）

とりあえず、策が詠ルートよりえげつなくなっています。こっちでは火薬を入手していないので、こんな感じになっています。

ちらつと一刀が出てきましたけど、次回辺りから出番は増えるかも。

第10話 ？水関の戦い（前書き）

短いし、内容も微妙だけど許してください

第10話　？水関の戦い

「逆賊董卓に組する者たち――」

「ふん。御託を並べずに攻めてくればいいものを。一応、大義名分はあちらにあるのだからな」

高順は砦から連合軍を見下ろしながらそうつぶやいた。高順は、檄文が大陸に流され袁紹が諸侯に董卓討伐の傘下を促した瞬間から戦争は始まっていると認識している。故に、様々な裏工作を行っていた。涼州にいた時に支配下に置いた盗賊たちに曹操や袁紹といった有力諸侯の領地を好き勝手に襲うように。

「まあいい。そのほうがこちらもやりやすいからな」

高順は包帯の隙間から見えている火傷の痕を指でなぞると晒った。

「久しぶりの大規模な殺し合いだ。楽しませてもらうおう」

「高順。いつでもできるぞ？」

高順の隣に立つのは華雄。戦争前だというのに艶やかな襦袢に身を包んでいる。恐らく、連合軍にその姿を見せれば激昂は必至だろう。

「そうか。なら、準備と行くか」

「ああ」

これから二人は寝台へと向かう。高順が本気で戦えるように熱を冷ますのだ。

「くつくつく。実に面白い。何がだ？ それは勿論あちらの動き。連合を組んでも所詮は利害により繋がっている。故に、連携が取れているとは思えない」

玄崩はそう言つて連合軍を嘲笑う。その隣では凧が額に手を当てて大きく息を吐いている。

「玄崩。嬉しいのはいいが……根回しは大丈夫なのか？」

高順が守るのは『難攻不落』と称される？水関。高順は賈？と何かを話し合っていた。しかも、賈？と二人きりで。つまりはそれだけ重要な計画なのだろう。ここで、失敗すればどうなるか分からない。凧はそう諭すが――。

「問題はない。それに、小生が筆頭の不利益になることはしないさ。とりあえずは、守戦だな。ひたすら守りに入る。まあ、お前らには適度に攻撃を仕掛けてもらう」

「……なら、いいが」

最近、高順は凧と玄崩を『一人』として考えている。別に、凧はそれで構わないのだが正直に言うなら玄崩の相手は疲れるのだ。理由をあげるなら以下の通り。

- 1 . 何かにつけて大仰な言動
- 2 . 常に含み笑いで胡散臭い

- 3・人間観察が趣味なので、基本的にフラフラしている。
- 4・風がお気に入りなのか風のそばにすることが多い

「（……疲れる）」

でも、最近は慣れてきたのでそうでもない。それに、自分の傍にすることが多いため、半ば風専門のトレーナーになっている。その恩恵ももちろんある。人間観察が趣味というだけあって風ですら気づいていない不調などを見抜いているのだ。

「クツクツク。どうした？ 見たところ……右足の動きが悪いな……鍛錬もほどほどにしておきたまえ。戦乱はすぐそこなのだからな」

「分かっているさ、ん？ 筆頭からの呼び出しだ」

いつの間にか後ろにいた戴宗配下の密偵から高順の呼び出しがかかっていることを伝えられた二人は、監視を部下に任せて砦の中へと入った。

「来たか」

そこにいたのはいつものように華雄を横に侍らせながら酒を飲んでいる高順だった。

「さて……改めて『奇兵隊』の幹部連中に集まってもらったのには訳がある。お前らにも説明しておこうと思ってな。俺と賈？が計画している謀をな」

高順から告げられた『計画』。それは、董卓を殺す事に他ならなかった。

「孫策様！　？水関の門が開きました！」

「出てきたのは！？」

「恐らく、高順配下の司馬懿と楽進です」

？水関から出てきたのは、玄崩と風の率いる部隊。

「高順は姿を見せず、か」

高順はそれこそ武勇は知られているのだが戦場に出ることは少ないとされる。噂では病を患っているため、長時間動くことすら難しいなどと言われている。華雄が常に傍にしているのはそのためだという。しかし、その分高順の武は呂布並とも言われている。要するに実際にどれだけの力を持つかは分かっていない。

「まあいいわ。とにかく行くわよ！」

孫策の言葉と共に呉の兵が前進し始めた。その他にも曹操軍なども同様。しかし、？水関から出てくる高順配下の兵は積極的に攻めてくることはないため一進一退の攻防になっている。

「破ア！」

「ぬお！ あの娘っ子、氣を使うのか！」

呉と戦っているのは楽進隊と司馬懿隊。魏と戦っているのは宋江率

いる部隊。その全ての部隊の動きが統一されている。しかし、やはり戦力の差は明らかなのか段々と混戦状態になってきている。

「一つ、二つ、三つ――」

しかし、その中で司馬懿はただ薄く笑いながら扇子で数をかぞえている。そして、それは百を数えた瞬間に事態は急変した。

「クッククク。中々いい感じに混沌としているじゃねえか」

「だが、それこそお前の望む戦場だろう？ 高順」

？水関の門が開き、一組の男女が現れた。全身に包帯を巻き腰に倭刀を佩いている高順。大斧を左手に持ち高順に寄り添う様に立つ華雄。

「さあて……大義などというどうでもいいものは捨てる。所詮、俺達は殺すことしかできない連中だ。派手にやろうではないか」

包帯の隙間から覗く目は寧猛な光に染まっていた。

第10話 ？水関の戦い（後書き）

ちなみに、この華雄ルートでは主役キャラにはそれぞれモチーフがあります。まあバレバレですけどね。

高順↓志々雄真実

華雄↓駒形由美・本条鎌足

凧↓瀬田宗次郎・悠久山安慈

玄崩↓佐渡島方治

以上です。華雄のモチーフに鎌足がいるのは戦闘力的な意味。凧に宗次郎と安慈がいるのは高順の弟子的な意味と「二重の極み」的な意味。玄崩に方治なのは作者が方治好きだから。

第11話 高順という男 追加したおはなしです（前書き）

今気づいた新事実。一話分抜けてた！ 本当に申し訳ないです

第11話 高順という男 追加したおはなしです

「あれが高順」

戦場は静寂に包まれていた。本来ならあり得ないこと。しかし、謎に包まれていた高順が姿を表した。そして、その全身を包帯で包んでいるという異様な風貌という要素が合さりこのようにあり得ない事態を呼び込んだ。

「ん？ 随分静かだな。玄崩、何があった？」

「筆頭がお姿を見せたのが原因かと」

「ほう？ 随分余裕なんだな連合軍は。自分たちの領地などが襲われていることは知らないのか？」

「恐らくは」

「ど、どついつ事よー！」

高順と玄崩の会話に入り込んできたのは孫策。彼女を見た高順は呆

れたような目をしていたがすぐに口角を釣り上げ嘲笑した。

「お前ら…俺が董卓軍にいと知っていたはずだよな？ 俺はかつて涼州の野盗たちの頂点に立っていたんだぞ？ その時のツテを使っただけだ。まあ、地理的な問題で大陸南部は無理だったが」

高順の言葉に焦りだしたのは魏軍。高順たちの言葉が真実ならば自分たちの領地はどうなっているのか。若干浮き足立ったが、それも一人の少女により収まった。

「落ち着きなさい！ 領地に残っている貴様らの同胞たちはそんなに弱いかな？」

護衛されながら歩み出てきたのは曹操孟徳。外見は少女ではあるが、内に秘める風格は隠しようもない。

「ほう？ 随分と落ち着いているな」

「領地に残した部下は信頼できる連中ですが。それよりも、随分とふざけた策を弄するのね？」

曹操は高順に対して舌戦を仕掛けるつもりらしいが、高順は口角を釣り上げるだけ。

「ふざけた策、ねえ？　そうとしか考えられないならばお前もそこまでということだ。誰が『領地のみ』を襲わせているといった？　連合軍は巨大だからな。補給線は大事だよな？」

「……そういう事ね。でも、ある程度の蓄えは本陣にあるから今すぐ焦る必要は無いわ」

曹操は内心で高順の問いに舌打ちをした。確かに、蓄えは連合軍本陣にもある。焦る必要は確かにない。だが、人間は食料などの追加がなくなると言われれば不安になる。恐らくはそれが狙い。

「では……戦おうか。華雄」

「ああ」

高順は鞘から刀を引き抜くと刀を右手に鞘を左手に持ちゆつくりと歩き出した。その横には華雄がぴったりと寄り添う。風はすぐさま二人の前に立ち両手に氣を集める。

「玄崩」

「御意。総員、抜刀！ これより『弱肉強食』を開始する！ 生き残った奴こそ正義！ とにかく勝て。我らには『誇り』も『大義』も必要なし。ただ『勝利』こそあればいい。掛かれ！」

玄崩の号令を聞いた全ての董卓軍兵士がそれぞれの得物を持ち直し、今まで消極的だったのが一気に積極的に攻勢を仕掛け始めた。さらに言うなら砂で目潰し、一人の敵にふたりがかり、死んだ兵士の体を盾替わりなどやりたい放題。

「貴様らに誇りはないのか！？」

その叫びは孫策だったか曹操だったか。彼女らにとってこのような戦いは戦いではないのだろう。だが、高順は群がる敵を惨殺しながら晒す。

「誇り、ねえ。殺し合いに必要なかね？」

高順にとって『誇り』とは必要のない物。そんなモノは必要のない世界に生きてきた。村を焼けだされた時に悟ったから。弱ければ死に、強ければ生きる。それこそが高順が信じるもの。

「大体、お前らに言われたくはない。お前らとて気づいているだろうが。この連合の絡操になあ？」

「——ッ」

孫策も曹操もそして軍師たちも苦い顔を隠せなかった。聡い人間は気づいていた。袁紹の檄文の内容が現実と違うことに。だが、自分たちの目的のために檄文の内容を真実としたのだから。

「その行為のどこに『誇り』がある？ ああ、別にお前らの行動を責めているわけではない。自らの目的のために他人を踏みにじり、じぶんの行動を正当化する。実に結構なことだ」

高順は鞘を腰に佩くと左手で呉の兵士の顔を掴んだ。すると、徐々に兵士の顔から煙が上がり、周囲に肉の焼ける嫌な臭いが漂い始めた。

「いい加減に『大義』『誇り』などというお為ごかしはやめて本能のままに殺し合おうぜ？」

ゴキリ——と左手に掴んでいた呉の兵士の頭からそのような音が聞こえた。すでに兵士は絶命しているのか全身に力が入っていない。

「シャアアアア！」

そして、一步の踏み込みで孫策の懐に入り込んだ高順は左手に掴んでいた兵士の体を孫策に叩きつけ、その兵の体ごと倭刀で切り裂いた。その行動が予測できなかったのか孫策は苦い顔をしながら距離をとった。

「人間死んだらただの肉塊だ。生憎と俺は呪いの類は信じていない。死者は何もせんよ。悲しむ事も怒ることも。死んだ人間の仇？ そんなモノ自分たちが納得できないから誤魔化しているだけにすぎん。違うか？」

兵士が振りかぶった剣を左手で受けとめ右手の倭刀で首筋を切る。その際にブチブチと肉を引きちぎる音が響く。

「まあ、どうでもいいことか。さて、続けよう」

「……その刀……」

「これかい？ とある山の中に引き籠っていた鍛冶屋からもらったものだ。何でも、鋸のように小さな刃を互い違いに作ることで刃こぼれすること無く斬り続けることができるらしいが……どうなんだろうね？ まあ、使いやすいから気に入っているんだがな」

喋りながらだが、高順の戦闘能力は高かった。なによりも恐れがない。常に笑っている。

「貴様…恐怖はないのか？」

切り結ぶ夏侯惇がそう聞くが、高順は笑っている。

「恐怖ねえ。生憎とガキの頃に死にかけたのでな。今更この程度のことでは恐怖するほど初心じゃねえ」

通常、どんなに鍛えようと目の前に迫ってくる剣には萎縮してしまふ。夏侯惇や呂布でさえも若干の躊躇などがある。しかし、高順にはそれがない。

「当たり前だ。高順も私も壊れている」

華雄は甘寧を相手にしながらこれまた笑う。二人は自分が壊れていることを受け入れている。それに気づいたのか甘寧は顔を少し青くする。今までこのような連中は見たことがなかったから。

「シャアアアア！」

「ぐ——ッ」

高順は他人よりも一步深く踏み込める。それは対人戦——それも一対一の戦闘においてはこれ以上無い強みになる。しかし、弱点もある。

「——ハッ。やるな」

「……その顔……」

それは、回避を考慮することができないということ。故に踏み込む際に攻撃を受けてしまう。

「これかい？　かつて住んでいた村が野盗に襲われた際に負った火傷だ」

夏侯惇の攻撃で顔の包帯が切れ、そこから目を覆うような火傷の痕が現れた。顔に皮はなく血管が浮き出るほどの醜悪な顔。

「醜い……」

それを呟いたのは誰だったか。しかし、高順は嘲笑を浮かべるだけ。

「別にお前らに好かれようとは思わんさ。それに、外見よりも内面だろう？　それが理解出来ないうちはまだまだ半人前だ」

「それに…むしろお前らがそう思うなら私は嬉しい。だって、高順を独占できるからな」

華雄はくすくす笑いながら甘寧を蹴り飛ばすとそのままゆっくりと高順の隣にたった。その後方では風が呆れたような顔をし、玄崩がいつもの含み笑いの表情をしている。

「なるほど…奇兵隊には比翼がいるって聞いていたけど貴方達のことだったのね」

曹操は一つの噂を思い出していた。戦場でも日常でも離れることがない男女が奇兵隊にいるという噂を。元々、高順が華雄を連れていたことからある程度の予測は付けていた。しかし――。

「ん――あむ――」

華雄はまるで自分のものだと言わんばかりに高順にくちづけをし、そのまま顔を舐め始める。ぴちゃぴちゃと水音がする。それは、淫靡で妖艶な光景。夏侯惇や周泰などは顔を真赤にしているが、曹操や孫策は硬い表情を崩していない。

曹操は自分も天幕で『そのようなこと』をするため微妙だが、こつやって見せつけるようにくちづけをするわけがない。しかし、華雄は実際にそうしている。そして、彼女の目には見覚えがある。

「（依存、か）」

「筆頭、華雄さま。とりあえず、皆で包帯を巻き直されたほうがいいかと」

何時までも続きそうなので風がそう進言すると華雄は少しムツとした表情になったが、高順が頷いたためすぐに表情を戻した。高順が許せば自分はどうでもいいらしい。

「ふむ……まあ仕方ないか。後は任せる」

「御意」

「委細承知」

本当ならまだ戦いたかったのだろう。しかし、高順は自分の火傷の危険性を知っている。下手に斬られればそこから化膿することを知っている。高順は引き際を知っているらしい。

「とりあえず、適当にやったら引き上げておけ。こちらは寡兵。数で押されれば意味が無いからな」

第11話 高順という男

追加したおはなしです（後書き）

あばばば

第12話 流転する状況

「玄崩。戦況は？」

「一進一退。現在、宋江殿が総指揮をとっていますが…まあ、守るだけなら問題はありません」

「水関の攻防は防衛にまわった奇兵隊が若干有利になっていた。というのも、奇兵隊は補給線を攻撃したり、諸侯たちの領地を野盗に襲撃させたりしてとにかく連合軍を混乱させた。元々、防御力に優れる？水関。そして、常道非道両方に優れている連中。規模でならば倍以上の連合軍相手にまともに渡り合っていた。」

「しかし…どうするのですか？このまま？水関に籠っていても状況はよくなると思いますのですが…」

「風…もう少し自分で考えろ」

「あ…は、はい」

風は高順の叱責に萎縮したようだが、当の高順は笑みを浮かべている。まるで成長を楽しむかのよう。

「玄崩。風に『策』を教えてやれ。俺はしばらく寝る」

「御意」

高順は華雄を連れて奥へ入っていった。そして、残されたのは公孫勝などの幹部連のみ。

「ふむ。では、戴宗の部下が洛陽からの『連絡』を持ってくるまでは守戦か？」

「そうなるな。まあ、私たちに任せておいてくれ。玄崩。君は風に説明してあげなさい」

「了解しました師父」

師でもある呉用から風に策を説明するように言われたため玄崩は風を連れて自室に引っ込んだ。

「さて、風。今回の策の全貌を話しておこう。まあ、ぶつちやければ『董卓』殺害と『高順率いる奇兵隊』の実力を諸侯に知らしめるためだ」

「その『董卓』殺害がよく分らないんだ。あの子を殺すわけじゃないんだろ？」

風頭には洛陽で善政を敷いていた心優しい少女が映っていた。高順の命令ならば殺すことも厭わないが、できることならば殺したくない。

「いかにも。董卓殿を殺すのは契約違反だからな。適当な宦官…もしくはそこらの賊を『董卓』『賈？』として生贄に捧げ、本物はどこかの農村にでも居ついてもらう」

それが賈？から高順に依頼されたこと。ソレ以外ならば好きにしてもいいという条件付き。故に、ソレを利用して高順たちの力を見せることにした。

「この茶番が終わり次第、奇兵隊は独立勢力として傭兵集団に鞍替えする。そのために実力を発揮しておく必要がある。まあ、現時点で組織の能力は見せているが…まだ足りないな。何よりも筆頭の力を見せる必要がある。だが、それはいずれ見せることができる」

「……何故私にはそのようなことが知らされていないんだ？ 筆頭は私を見限ったのか？」

玄崩が実力で凧と同等の地位にいることも知っている。だが、凧には華雄を除けば最も古参の部下だという自負がある。しかし、だからこそその自負が崩れかけている。

「気にするな。小生の私見だが…筆頭はお前を大事に思っていると思うぞ？ だから、お前は筆頭を…華雄様を…そして奇兵隊を見続ける。小生はお前にどこまでもついて行こう筆頭とは違う「弱肉強食」を掲げるのかそれとも…フツ。実に面白そうだ」

玄崩は実に楽しそうに笑う。しかし、一方で凧は玄崩が言った「見続ける」という言葉が気になった。

「凧は伸び代がある。戴宗に体術を教えさせているが…随分と飲み込みがいいらしい。公孫勝も張り切って氣を教えていたな」

寝台の上で酒を飲みながら笑う高順。その姿は全身が焼け爛れている姿。そしてその背には襦袢を羽織っただけの華雄がしなだれており、愛おしそうに火傷の痕を舐めている。

「ん———そういえば、玄崩は風に惚れているのか？　いつもそばにいるが…」

高順以外の人間関係にそこまで興味がない華雄は玄崩が風と一緒にいる光景を思い出して質問してみた。くつくつと笑いながら盃の酒を呷った高順は口を開いた。

「そうだろうな。だが、玄崩はそれ以上に風という人間がどう生きるのかに興味を持っている。風は…俺やお前のような獣にも、曹操や孫策のような武人にもなる。人間観察が趣味の玄崩にしてみればあれほどの逸材はぜひとも側で見ておきたいのだろうな」

そもそも玄崩が自分についたのも「高順という男の観察」がきっかけだったらしい。その中で高順に共感し、ここに居着いている。

「恐らくだが…奴は俺を裏切ることにはあっても風を裏切ることはないな。もう少し小賢しい奴なら『自分が敵に回ったときの観察』をするんだろっが、な」

無論、玄崩が自分を裏切れば殺すことも厭わない高順。しかし、何より玄崩——司馬懿仲達という男は反体制派の人間である。司馬家という名家の中の異端児。人よりも優れた知能を持つからこそ自ら『反体制』となった。ならば、そう簡単に裏切らないだろう。高順は反体制派の筆頭でもあるのだから。

「しかし……連絡も遅いな。虎牢関の連中にも通達しているはずだから時間がかかるのか？」

高順がそう呟いたと同時に天井裏に気配が現れた。それは、戴宗の部下の密偵の一人。

「報告。賈？殿より計画実行せよ」

「ふん。ようやくか。虎牢関の呂布たちは？」

「その場の流れに任せるとのこと」

「なら……俺らの好きにやらせてもらおう——宋江！」

「……」

高順の叫びに扉の向こうから返事が聞こえた。それは宋江。いつの間にか居たのかなど気にしてはいけない。

「全軍に通達。我らはこれより……洛陽に攻め入る！」

それは本来董卓軍に所属する高順ではあり得ない決断。しかし、これこそ賈？と高順が考えた策。

「華雄…包帯を頼む」

「ああ。任せろ」

『董卓』を生かしつつ殺す策。本来なら実行する事のできない策。しかし、高順には手段を選ぶ必要性がない。賈？も同様。

『どうせ悪人扱いされるならとことん悪人をしてやろうではないか』

高順と賈？がこの策を考えた際に高順が放った言葉である。特に賈？は董卓を助けるためならば手段を選ばないようになった。

「下手に『霸道を敷く』や『皆が笑って安心して暮らせる世を作る』

とかいう理想は口に出さないほうがいい。それに囚われてしまうかな」

それは、各地に放っている密偵から報告された有力諸侯の掲げる理想。別にそう思うのは構わないが彼女たちは分かっているのだろうか？ 『霸道を敷く』事にとらわれて面子を気にするのではないか。『皆が笑って安心して暮らせる世を作る』——それが矛盾していることに気づいているのか？

「……ま、どうでもいいことが」

「できたぞ？」

華雄により包帯を巻かれた高順は着物を着ると同じように鎧を着込んだ華雄を引き連れて玉座へと向かった。動き始めた董卓軍。連合軍は未だそれに感じていない。

「……壺に弑だったかしら？ 準備は？」

洛陽にある城の一角では険しい顔の賈？が目の前に跪く二人の男に支持を出していた。

「全て予定通りに。適当な盗賊を『董卓』として殺す用意は済んでいます。後は、『いつの間にか大罪人とされたために疑心暗鬼に陥った董卓は新参者の高順を殺すことを決め、高順に返り討ちにあう』だけです」

「新参者であるが故に『こいつが袁紹と繋がって、手引きしたのではないか？』という感じ？ こう言っちゃあなんだけど…アイツはそれでいいの？」

一応、様々な誤報を流してはいるがその大半が高順が裏切ったという物。さすがにそれはどうなのかと思っただが、当の本人は気にしていない。むしろ、あちらからそのような話を持ってきた。

「我らは金さえ貰えば何でもします。それに筆頭は『弱肉強食』と同時に『結果・合理主義』でもあります。目的のためならば…ということです」

きと呼ばれた男は何の感情も見せずに淡々と言葉を紡ぐ。賈？は大きく息を吐くと冷徹な光を目に宿した。

「では、虎牢関の張遼・呂布に通達。『作戦決行。高順へ攻撃を開始せよ』」

「「御意」」

賈？の言葉が発せられた瞬間、二人の男は虎牢関へと駆け出した。そして同時刻、？水関の玉座でも状況が変化していた。

「宋江隊第八分隊は？水関に残り『最後の仕込み』を行え！ その他の部隊はすぐさま虎牢関へと攻め入れ。派手にやれ……虎牢関で『この事』を知っているのは張遼・呂布・陳宮のみ。それ以外は俺達が裏切ったと思っているだろうな。だが、それでいい。殺せ。そうしなければ信憑性がないからな」

高順の言葉に見張り以外の全ての将兵は耳を傾けていた。

「そして……董卓』を殺した後は、独自に動く。そのための拠点はずでに手に入れた。最後の仕上げだ。行くぞ」

そして茶番は終息へと向かう。

第12話 流転する状況（後書き）

こちらの方ではお久しぶりでございます。

とりあえず、反董卓連合も後1、2話で終わると思います。その後はまあ、自由に行きたいと思います。ただし…原作キャラも死にますね。まあ、これはいいでしょう。

風はどんどん魔改造されていくでしょう。「二重の極み」もどきを放ったり無敵流を使ったり…いや、無敵流はないな。

ちなみに、主要キャラの服装ですが高順は志々雄の服装。華雄と風は原作通り。玄崩は外印の格好です。外印は結構好きでしたね…ただ、終わりが…微妙だったなあ。そして、何故再筆でイケメンになったし。

第13話 新たな時代の足音

それは連合軍からしてみれば確実におかしいという状況。気配が無ければ動きも見えない。そんな状況。

「それで？　どんな状況なの？」

軍議の場に置いて曹操が口を開く。？水関の異変を不審に思った各諸侯はそれぞれ密偵を放ち、それらの情報交換に臨んでいた。状況が分からなくなった以上は情報の秘匿などは危険と感じたのだろう。そして、その結果？水関に数人の兵が残っていたのを呉の周泰が発見し捕らえたのだ。

「尋問の結果、どうも董卓が高順を裏切ったようなのよ。それで、数人の兵のみ残り高順は虎牢関と洛陽に部隊を差し向けたらしいわ。要するに…何もかも高順に奪われた事になったわ」

「それでその捕らえた兵は？」

「……我らの目的は達したって監視の兵の武器を奪って自決したわ。しかも全員。どうやらギリギリまで私たちの足止めをするつもりだったようね」

手を後ろ手に縛られているはずなのに、それを無理やり解き剣を奪い自決。それを見た呉の兵士はここまで人を変える高順に恐怖を抱いたという。

「もしそうならすぐに虎牢関へ行かないといけませんわね！ さあ、行きますわよ！」

空気を読まない袁紹は無視して全員が意見を出し合う。まだ、コレが真実と決まったわけではないのだ。しかし、天幕に入ってきた兵士の報告で状況は再び変わった。

「ほ、報告します！ こ…高順が現れました！」

その報告と共に全ての諸侯が外に出るといつものように包帯から獰猛な目を光らせている高順とその腕を抱いて寄り添う華雄。その右に立つ宋江。左に立つ凧と玄崩。少し後ろに立つ呉用や公孫勝、戴宗。そして、その後方や崖の上には様々な得物を持った一般兵の海。規模だけで言うならば曹操軍くらいはあった。しかし、統率力で言うならば連合軍以上。

「お久しぶり、とでも言っておこうか？ 悪いが…董卓は殺させてもらった」

そして、諸侯たちの前に放り出されたのは髭面の男の首。その苦悶に満ちた顔は顔を背けるものであった。現に、北郷は顔を背けている。

「それが董卓だ。お前らにくれてやる…好きにすればいい」

「それは礼を言うわ。で？ 虎牢関はどうしたの？」

曹操は高順の真意をはかろうとした。そもそも、この首が董卓である確証はどこにもない。高順が演技している可能性もある。とにかく情報を集めなければならない。

「ん？ あいつらか……一応は生け捕りだな。まあ、部下にする手も無いわけじゃない」

「……方法を聞かせてもらってもいいかしら？」

「簡単だ。人質を使えばいい」

そして兵士に連れだされたのは二人の少女。片方は儂げな印象の美少女、もう片方も気の強そうな印象をあたえる美少女だった。

「董卓の娘らしいがね…殺そうかと思っただが、張遼たちがこのガキの安全を保証するなら何でもすると言ったからな…まあ、そのために生かしているだけだ。このガキ…父親から虐待を受けていたようだな。知ってるか？ あわや犯される直前だったらしいぜ？ 人間は追い詰められると何するか分からんなあ」

張遼たちを奇兵隊に組み入れるのは難しい。理由としては、高順の様に主君に忠を持たない人間のほうが少ないことがあげられる。だから、賈？と共に考えた事。董卓を『董卓の娘』とすることで、張遼たちの忠信をそちらに向けたのだ。まあ、それでも穴が無いわけではないのだが、そこは董卓の演技力というか元来持っている雰囲気というのか、どこからどう見ても『逆賊董卓』に虐げられていた少女にしか見えない。しかも、高順の口調が嘲るような感じのため、それが余計に拍車を掛けている。

「まあ、このガキとその侍女は使い道があるからな。有効活用させてもらう。ま、そんなことはどうでもいい。俺らはこの茶番から抜けさせてもらう」

指を弾くと後方に展開していた兵士たちは一気に移動を始め、二人の少女も公孫勝たちに連れられてどこかへ去っていった。残されたのは高順と華雄。

「俺らはこれから傭兵として生きる。金さえ出せば何でもしてやる。だが、昨日まで戦っていた俺らが今日は味方だという自体もあり得る。その場合は容赦しておけ」

伝えたい事は伝えたのだろう。それだけ告げると高順たちは踵を返した。

「待ちなさい。今までの話が真実だと思うの？」

「ふん。曹孟徳も期待はずれか？ 真実が一つであるなど誰が決めた？」

ちなみに、高順はさつさと帰りたい。このままではボロをだす可能性もあるし、何より疲れているのだ。時間もあまり無かったためその場しのぎの策でもある。何より新しい拠点が決まっていない。拠点なしに行動することは危険なのだ。そして、西涼連合に董卓の顔を知っている人間がいなくとも限らない。そこから話が漏れれば今度は高順たちが攻撃を受ける。無論、今回の戦で各諸侯のおおよその戦力は分かったので、後は搦め手などで対処すれば戦えるだろうが、拠点がない今はまずい。ということで、顔には見せないが全力で逃げに入っている。

「まあ…その内宣伝でもするさ」

それを伝えると今度こそ高順は止まらなかった。残された諸侯たちは董卓を討った事に喜び、曹操などの実力者はこの状況を不審に思う。しかし、総大将である袁紹が洛陽に向かい皇帝陛下にご報告を

とのたまっているので従わないわけにはいかない。

「（してやられたかもね）」

一抹の不安を抱えながら『董卓討伐』で一応は結託していた連合軍も終わり、戦国時代の足音が近づいていた。

「で？ どうだ」

「はい、住民は大した不満もなく我らの統治を受け入れるようです」

奇兵隊は現在、大陸の中心に位置する土地を攻め落とした。攻め落としたと言っても、数人の兵を城に送り込んで領主たちを皆殺しにただけである。そして、すぐさま奇兵隊の全隊員をその国に入り込ませ、ほぼ数日で国を掌握した。民も最初は混乱したが、そもそも暗君でもあった領主を嫌っていた連中は多かった。それに比べれ

ば『弱肉強食』を掲げるが、能力のある者にはそれ相応の態度を取る高順はまだマシに映ったようである。

「民を統べる際には、飴と鞭……確かに合理的だな」

内政は呉用などに任せている。しかし、ざっと見た感じでも今までのように恐怖政治だけでは治められないのは理解している。

「まあ、お前らに任せる」

自室に戻りふと空を見上げる。とにかくこれで拠点は得た。そして、董卓軍をそのまま奇兵隊の戦力とすることもできた。つまりは、天下取りの戦に参加できるだけの勢力になった。

「さて…傭兵という立場ではあるが……好きにやらせてもらおう」

もし自分よりも弱ければ『弱肉強食の理』により殺すなり服従させる。もし、自分よりも強ければ『弱肉強食の理』により殺されよう。

「まあ…ただでは死ななかな」

死ぬならば一人でも多くの敵を道連れにする。

「時代の英傑たちよ……お前らの理想は俺が食い尽くしてやる。そして、弱肉強食こそが真理だと知らしめてやる」

いくら『覇道を敷く』『皆が笑って暮らせる世を作る』などと建前を作ろうとも。やっていることは自分の意にそぐわない連中を排除しているに過ぎない。

「一々建前を用意しなくても民は結果だけを重視すると言っのになあ」

自分がかつて大陸北西部に拠点を置いていた時も、傍から見れば暴力で治めていたように見える。しかし、実際は重税を課しているわけでもない。むしろ高順たちは受け入れられていた部分もある。ある一定の食料などを納めれば野盗などから村を守護したり、出稼ぎの護衛なども請け負っていたのだ。

高順は頭が良かった。元々が農民の出ということもあり、どうすれば民をうまく扱えるのかも理解している。だからこそ不満もそこまですらない。

「俺らを傭兵として扱うかそれとも敵として扱うか……まあ、どうでもいいか」

新たな拠点はできた。戦力も董卓軍をそのまま組み入れることができた。涼州への影響力も変わらぬまま。

「弱ければ死に、強ければ生き残るだけだ」

「いいか風？ お前にはこの技を会得してもらっ

戴宗はそれだけ告げると岩に向かい拳を打ち付けた。すると岩はいとも簡単に粉碎された。

「これは公孫勝の旦那から貰った巻物に書かれていた技で『二重の極み』というものだ。簡単にいえば、衝撃を二回打ち込む事により堅い岩なども破壊する技だ」

風は体術の師である戴宗から新たな技を教わっていた。それは『二重の極み』と呼ばれる破壊の極意。

「やり方は教える。それをどう自分流に組み替えるかはお前に任せる」

「はい！」

戴宗曰く、一発目の衝撃の刹那の後に二発目の衝撃を放つのは至難の業のようで、コレばかりは本人のやり方次第だという。しかし、風はひたすら岩に打ち込み続けた。

「私はもつと強くなる。強くなって……弱者を食い物にする奴らを潰す！　そのためなら何だってしてやる！」

それは風に芽生えた思い。先の反董卓連合を経験したことにより自分の目的のために他人を陥れる袁紹や曹操のような連中を倒すという思い。故に彼女は強さを求める。

「ふむ。風はその答えか」

「玄崩。君はどうするのですか？」

凧の修行を遠くから見ている玄崩と呉用。呉用の問いに玄崩はいつもの笑みを浮かべるだけ。

「無論、凧につきますよ？ 凧の答えは矛盾しているものでもあります、それをどうにかするのが小生でしょう」

凧はまだ気づいていないが、その考えは袁紹たちと形こそ違えど本質は同じだろう。だが、それを受け入れているだけまだマシとも言える。

「凧……安心しろ。貴様のその道……小生がどこまでも付いて行つてやろう」

新たな時代の足音は確実に聞こえていた。

第13話 新たな時代の足音（後書き）

とりあえず、反董卓連合編終了です。月ちゃんは「董卓の娘」として認識されたと思います。西涼連合は…まあ、黙っていてくれるんじゃないですか？　しゃべっても卑怯何それ美味しいの？　な高順に簡単に勝てるとは思いませんが。

そして、風が二重の極みを習得しようとしています。ただ、左之助のように自分流にアレンジすると思います。

次の更新は、作者が宮城から帰ってきてからになります。感想欲しいなあ（チラ

第14話 はじめてのிரい

「依頼？ 誰からだ？」

いつものように華雄を横に侍らせて酒を飲んでいた高順の元に一つの依頼が舞い込んだ。依頼人は袁紹。内容は、公孫賛軍を攻め落とすのに協力しろという物。依頼金は袁紹軍というだけあり、膨大なものだった。

「条件は何か聞いているか？」

華雄の差し出した食事を噛み切りながら情報を持ってきた宋江に問いかける。宋江は文書を差し出した。そして、それを呉用が読み始めた。

「とりあえずは袁紹軍の援護などですかね」

「そうか……ならば……そうだな。この前の？水関ではまともに斬れなかったからな。俺が出る。公孫勝、留守の間の指揮は任せる」

高順の号令で全員が動き出した。しかし、風は出撃を控えるように告げられた。理由は、二重の極みを会得していないためである。そ

れに伴い玄崩も出撃を控えた。そもそも今回はそこまで人員を必要としない。例え暗愚であろうとも名族袁紹軍だ。その数は多い。故に奇兵隊は500程度。それに奇兵隊が得意とするのは搦め手や野盗などを使った同時多発的行動。今回は袁紹軍の討ち漏らしなどをいただくことになると予想されるためそう多くの兵は必要ない。

「張遼。戦いが好きなお前には不満かもしれんが……ここの守備は任せるぞ?」

「構わんよ。月っちを助けてもらった恩もあるしな。それに、次は連れていつてくれるんやろ?」

「ああ。ま、お前が好む戦いは少ないだろうがな」

「ま、その場合は戴ちゃんとかと酒飲んどくわ」

旧董卓軍の兵は基本的に前線に出ることはなく、高順が得た領地の防衛や警邏などに回されている。勿論、戦いたい人間にはそれ相應の場所を用意している。しかし、いわゆる『非道』が常の奇兵隊。戦に参加するか否かは本人たちで決めていいことになっている。

「さて……好きにしていえば……宋江。出立の準備は整っているか?」

「すでに」

宋江の返答を聞いた高順は頷くと自分の部屋へと向かった。装備を整えるためだ。といっても、刀を持つてくるだけなのだが。

「さあて……面白くなってきた」

いよいよ持つて『弱肉強食』の世の中になってきた。それは高順にとってはとても素晴らしい世の中である。

曹操の拠点である陳留ではある一つの情報を吟味していた。それは、丁度大陸の中心の国を奪った高順に関すること。

「まさか…数日で奪い取った国を運営できるとは……」

言葉にすれば簡単。しかし、実際はとても難しいのだ。だが、高順はそれをやつてのけた。情報では、旧董卓軍の連中を有効活用しているらしい。

「しかもすでに傭兵として袁紹軍に従軍しているようです」

袁紹軍が公孫賛を攻めるといふ情報は手に入れることができた。そして、それに高順たちに依頼を出し、高順が了承したことも。

「しかも国の護りは旧董卓軍、か。さすがに呂布や張遼を相手にするのは難しいわね」

さらに言うならば涼州に居た頃と同じように周囲の盗賊などを吸収しており、国に攻め入るならばその盗賊たちの根城を落とさなければならぬ。天然の要塞と呼ぶまではないが落とすにはかなりの労力を要する。それが高順の治める土地。現在は劉表が治めている荊州にもその手を伸ばそうとしているらしい。

「危険、ね」

曹操は自身の霸道で一番の強敵になるであろう高順を危険視していた。現在は『傭兵』としているが、その実天下取りの戦に参加している。ずっと放っておいたのだが、反董卓連合の際に決起していた盗賊たちはそれぞれの領地の防御の高さを悟るとすぐさま逃げ出し

ており、現在の行方は分かっていない。恐らくは再び高順から号令がかかるまで潜伏しているのだろつ。さしずめ埋伏の毒というべきか。

「……賊と思っていたら不味いかも知らないわね」

曹操は内心で高順たちに対する警戒を強めていた。

「……筆頭。袁紹軍が攻撃を開始しました」

「そうか…なら全軍通達。連中の討ち漏らしを殺せ」

高順の言葉に兵たちはすぐさまかけ出す。しかし、そこに呉用の「待った」がかかった。

「お待ちを。筆頭、ここは公孫贇を生け捕りにすべきかと」

「……理由は？」

華雄から差し出された酒を飲みながら高順は続きを促す。宋江は駆け出そうとした兵たちを制し、呉用の言葉を待つ。

「公孫贇軍の白馬義従…その技術を潰すのは惜しいと思考した次第です」

騎乗射撃を得意とする公孫贇軍の特徴である白馬義従。確かにその技術は欲しいところである。馬は涼州から持ってきたものもあるし、何より北伐などからの取引で俊馬などが揃っている。

「それに戴宗の部下が幽州の劉備軍から持ち帰ってきた「鞍」と「鐙」ですが…あれと組み合わせればより精度は上がるかと」

天の御使いが齎したという「鞍」と「鐙」。それをなんとか復元して持ち帰った戴宗の部下のおかげで騎馬隊も錬度が増していた。高順はそれを聞くとしばしの間目を閉じた。遠くから剣戟の音が聞こえているが気にしていない。

「……全軍通達。可能ならば公孫賛の生け捕りを優先。その他の将は……まあ、騎兵ならば生け捕れ」

高順の号令を受けて再度兵たちはかけ出した。袁紹に討ち取られている可能性も無いわけではないが、生きていれば御の字。生きていなくとも、やりようはある。

「さて…俺達も動くか。仕事はしつかりとしないとな？」

そう言つて華雄と宋江を連れて戦場へと踏み出す。呉用は本陣の守備。といっても、やることがあるのかは分からないが。

「しかし…なかなかの錬度じゃないか？」

向かってくる兵士の首に倭刀を突き刺しながら感心する。油を染み込ませた手袋を使い、兵士の顔を焼いたりしているが恐れこそすれ逃げはしない。

「公孫賛は中庸とか言われていたが…中々慕われていたようだな」

高順は公孫賛の評価を上げていた。報告ではいわゆる『何をしても普通』とされていたがその『何をしても普通』というのがどれだけ

大変か。

「……ふむ。どうやら生け捕りとしたのはよかったかもしれんなあ」

「？」

首を傾げる華雄の頭を撫でながら高順はほくそ笑んでいた。どうやら他にも使い道を見つけたようである。

「……燃えろ」

燃える左手とその片手で骨を破壊するだけの握力をもって高順は敵を殺していく。その死体はどれもが顔が判別できないほどに焼け爛れ、顔の骨もことごとく破壊されていた。

「しかし…袁紹軍から勝どきの声が聞こえんな」

すでに戦が始まってから大分経つが一向に勝どきの声が聞こえてこないことに不信を抱くが、これは高順たちが今まで『戦争』をしていなかったのが原因である。今までは裏工作を行い、対象の足元を崩しに崩してから戦をしかけていたため平均的な戦の時間よりも短かったのだ。

「まあ、気にすることでもないじゃないか？ 斥候はもうそろそろ
終わりそうだと言っていたし」

華雄の言葉通り、袁紹軍の勝どきの声が聞こえてきた。どうやら戦
は終了したようである。そして時を同じくして両手足を縛られた公
孫贇とその妹分である公孫越が連れてこられた。

「ようこそ公孫贇殿、公孫越殿」

すでに宋江が高順の名代として袁紹の元へと向かっている。そして、
ここは戦場の外れで周りはすでに兵でかためてある。つまり誰にも
見られることはない。

「アタシらをどうするつもりだ…」

公孫贇は高順を睨みつけ、少しでも公孫越の盾になろうと動く。高
順はそれをみて再び評価を上げた。このように見苦しい行いをしな
い人間は好意に価する。

「さて……俺は貴様らの白馬義従の技術を欲している。もし、俺ら
に従うならば身の安全は保障しよう。無論、お前の要求もある程度
はのもう」

倭刀を公孫賛の首筋に添え、その鋸の如き刃で薄皮を切る。

「断るならここで殺すだけだが……どちらがいい？」

倭刀は徐々に公孫賛の首に食い込もうとしている。つまりは即決しなければ殺すということ。そして、恐らく公孫越も共に殺すのだろう。公孫賛が選んだ答えは――。

「……私は負けたんだ……好きにしろ」

「……フツ。呉用、二人をさっさと国に連れていけ」

「御意」

高順の中で再び公孫賛の評価が上がっていた。負けたから、弱者になったから強者に従うその思考に賞賛を送ったというべき。

「さて…袁紹はこの後どうするのかねえ。劉備を攻めるのか、曹操を攻めるのか」

公孫賛を賞賛していたのに気づいた華雄が嫉妬の目を彼女に向けて

いたのに気づき、華雄の頭を撫でながら高順は空を見上げた。

第14話 はじめてのいらい（後書き）

初のお仕事は袁紹軍に参加しての公孫賛攻め。そして、様々な裏事情から公孫賛を生け捕り。公孫越はついで。

そして、着々と動きつつある高順たち。特に北郷がいる所には通常の倍の隠密を放っております。高順は使えるものはなんでも使うのです。

そして、ここで質問が…いずれ劉表の治める荊州を頂くつもりなのですが、その際に国の名前をつけたいのですがなんかいい感じの名前が無いですかね？

あと、高順の二つ名とか……。ぶっちゃけ包帯男でもいい気はするけど。

番外編 高順は出てきません(前書き)

ちよつとしたネタです。蜀アンチというか…劉備と嚴顏アンチ？

番外編 高順は出てきません

その男は周りから「変わり者」と呼ばれていた。

「斑…お前は劉璋に仕え続けるというのか!？」

「桔梗…口の聞き方には気をつける。あの方が暗君だろうが…我らの主だ」

暗愚・暗君と呼ばれる劉璋に一心の忠誠を捧げる男、張任。彼は幼馴染でもあり同期でもある嚴顔の相談にも一切取り合わなかった。

「何故だ！ このままでは民の生活が危ういのだぞ！」

「俺たちで充分回せている。それに劉璋様も俺達にそれだけの権限を与えてくださっている。何が不満だ？ 民が心配ならば剣を置いて内政を頑張ってみたらどうだ？」

「そうですよ？ 私たちで充分回せているんです。それに…劉璋様のおかげで今の地位にいるのを忘れていませんか？ ていうか、危機感持っているくせに武官一辺倒な貴女に言われたくないです」。

張任様は武官も文官も兼任していますよ？」

「——ッ！ もういい！」

遠まわしに「劉璋様を取り立てていなければお前はその言葉すら言うことができないのだ」と告げるのは王累という少女。彼女は気に入らなかった。敬愛する上官である張任に悉くこのような話を持つてくる敵顔が。彼女が張任を憎からず思っているのは女の勘で分かっている。だから気に入らないのだ。

「張任…スマンな。儂の政が悪いばかりにお前に迷惑をかける」

「いえ。劉璋さまを補佐するのが我ら下の者の役目です」

文武に優れ、劉璋の暗愚政治でも蜀が動いているのは彼とその腹心である王累という少女がいるからだと呼んでいた。しかし、彼はそれでも劉璋への忠義を持ち続けている。

「斑様。桔梗様……いえ、敵顔たちが荊州の劉備を引き入れようとしています」

「……そうか」

王累が齎した情報。それは劉璋が治める蜀の終焉を意味していた。

「張任將軍！ 嚴顏將軍、魏延將軍たちが裏切りを！」

「迎え撃て…裏切り者に用はない！」

そして、劉備軍についた嚴顏たちが蜀の地理情報を彼女らに与えたため、張任たちの抵抗も虚しく劉璋が自害したという情報が張任たちが立てこもっていた砦に齎された。それも嚴顏たちによって。

「張任さん！ もう劉璋さんはいません……お願いします。降ってください！」

劉備たちは関羽や張飛、諸葛亮といった武将を引き連れて説得に訪れていた。しかし、張任たちは首を縦に振らない。振るわけがない。

「ふん。裏切り者に篡奪者たちの言う事など聞けるか」

張任は王累に命じ砦のありとあらゆる所に油を撒くように伝えた。そして、逃げたいものは逃げるようにとも。そして、残ったのは張任と王累、そして張任に長く付き従っている兵士たちだけ。

「何故だ…何故そこまで……答えてくれ斑！」

「裏切り者に真名を呼ばれる筋合いはない。俺がここまでする理由…そんなものの方が俺の主だから。ソレ以外に何がある？ 裏切り者には分からだろうな」

拒絶された敵顔は絶句する。張任が劉璋に忠義を尽くしていたのは知っていたがここまでのものとは思っていなかったのだらう。

「それに篡奪者の下に降るなどもつての外だ。全ての民が笑って暮らせるために？ そのためならば篡奪者となってもいいと？ では、聞こう…お前らがやってきた政などで本当にすべての民が笑っていたのか？ 篡奪者にはそれ相応の態度があるのではないか？」

張任はそう言つて晒つた。篡奪者でありながら聖人面をする彼女たちが気に入らない。叶うはずがない理想を掲げる劉備とソレに従う者たち。そして、それを受け入れた敵顔たち。そして、それに負けた自分たちが。

「まあ、どうでもいいがね。一つ、お前らに言っておく。お前らの立っている場所、これから作る国の土台は我らの血だ。貴様らが踏みにじった我らの骸だ。貴様らの理想には我らの恨みが染み付いた。それでもまだその理想を掲げるならば好きにしろ。芽衣」

「はい。それじゃ…やっちゃってください」

王累は残った部下に指示を出す。そして砦に火が放たれた。張任はただ、眼下の敵を見据える。その横には王累がたち厳顔を嘲笑する。

「クスクス。残念だったね。斑様は私を傍に置いてくれたんだよ？裏切り者のアンタじゃないんだよ？ずっと気に入らなかったんだよ…幼馴染だから、同期だからって斑様の傍に居続けたアンタが……」

後半はいつものような間延びした口調ではなく嘲りが見え見えの口調で嘲笑う。

「でも、別にいいんだ。斑様は私を連れていってくれるんだから」

そして愛おしそうに隣に立つ張任に抱きつく。張任はただ眼下の敵を見据えるだけ。そして、口を開いた。

「烈士たるもの、どうして二君に仕えることがあるだろうか」

その言葉と共に張任と王累の姿は炎の中へと消えた。こうして、劉備の蜀入りは完了した。しかし、彼女たちの間には手放しで喜ぶこ

とできない空気が漂っていた。

「変わり者」とされた張任の忠義を讃えた落書が蜀の国内にばらまかれたという。

番外編 高順は出てきません（後書き）

ということで、張任主役で一本。こんな感じの忠義の人は作者が大好きです。るる剣の佐渡島方治しかり、ギアスのジェレミア・ゴツトバルトしかり。

ちなみに、ですが…劉備の「篡奪者」と敵顔の「裏切り者」という認識は高順がいずれそう思うことになります。高順は敵には容赦しないのでどんどん嫌なことを言います。別名「言峰先生のハートフルボッコカウンセリング」

第15話 盜賊王

公孫贊と公孫越は状況が判断できなかった。袁紹に負けて、高順たちの捕虜となった。最初の数週間は命令通りに白馬義従の技術を教えていた。それも基礎を教え込み、後は各自の鍛錬次第という状態になり、二人はいよいよ覚悟を決めた。慰み者になるのかそれとも殺されるのか。そう思い公孫越と共に抱き合いながら眠れぬ夜を過ごしていた。しかし、ある日高順の右腕と呼ばれる宋江に連れてこられたのは宴会場らしき場所。そこには、奇兵隊の主だった将、そして旧董卓軍の武将たちが思い思いに酒を飲んでいた。

「あの……これは……」

状況が理解できず、隣にいる宋江に声をかける公孫贊。それに気づいた高順は華雄に盃を渡すと宋江に声をかけた。

「宋江。さつさと席に案内してやれ……」と思っただが、折角だ。そこに連れてこい」

「御意」

宋江は頷くと二人を丁度高順と向かい合わせになる席に連れてきた。しかも、その場所は高順との距離がそう遠くない場所。

「おい。二人に膳を持ってきてやれ」

高順が声を上げるとどこからとも無く二人の女性が公孫賛たちの前に膳と酒を持ってきた。

「どうした？ 食べないのか？ 一応、部下に釣ってこさせた採れたての魚なんだが？」

「いや……あの……これってどういう事ですか？」

「無理して畏まる必要はない。そうだな……いわば『褒美』だ」

「『え？』」

高順の『褒美』という言葉に首を傾げる二人。

「お前らはしっかりとこちらの命令に従った。白馬義従の技術を教え、それを徹底させた」

それは勿論だ。状況はどうあれ、仕事はしっかりとしないとイケないという気持ちは公孫賛たちにあったから。だからこそ、高順は『

褒美』をだした。

「弱者は強者に従わなければならない。だが、弱者と無能は違うぞ？」

弱者とは何か？ 高順が言わせるならば『他者に負けた者』だろう。そして、その中から強者に従い、相応の結果を齎したものには褒美を与える。いわば『飴と鞭』である。

「それに…公孫賛。貴様は平均的な能力を持つ」

「う……」

「ちょっと！ そんな言い方はないっス！ 姐さんはスゴイ人ですよ！」

高順の言葉に公孫賛は項垂れ、公孫越は高順に掴みかからんばかりに声を荒げる。普通ならばこの場で公孫越は殺されても仕方ないのだが、誰一人動こうともせず彼女を肴に飲み食いするだけ。奇妙な光景だった。

「筆頭。もう少し言葉を選んではいいかでしょうか？」

宋江は少しため息を吐きつつ高順に進言する。宋江は高順の意思を部隊に伝える役目も担っているため、このように緩衝剤替わりに動くこともある。

「クツクツ。気を悪くしたなら謝ろう。だが、その平均的な能力を持つ人材は実に得難い貴重なものだ」

重ねていうが高順は公孫賛の事を過小評価していない。むしろ、高順の中では高い位置にいる。平均的な能力を持つ。つまり、誰かが抜けてもその穴を補完することができるということ。

「公孫賛…お前は武官と文官を兼任してもらう。公孫越は…まあ、武官か？」

「え？ それってつまりアタシらを取り立てるって事っすか？」

「なんで？」

公孫賛たちは本気で目の前の男が分からなくなった。しかし、高順の考えは簡単な物。

「あ？ 使える人材を放っておく理由がどこにある？ それに…お

前らは俺の下に存在している。それをどう使おうが俺の勝手だ」

使えるものは誰であろうと使う。ただそれだけ。

「裏切るとかは考えないのか？」

「ハッ。成功すればいいな？」

暗に「やれるものならやってみろ」と言わんばかりに嘲笑する。恐らく、この男は例え反旗を翻しても、何も言わないのだろう。

「さて…折角だ。この国の主要な人間の紹介でもしておこうか？」

高順が促すと一人の壮年の男が酒を飲みつつ一言。

「『入雲龍』の公孫勝…一応、仙人だ」

「仙人って……」

「なあに…『仙界』の生活に飽いていたのでな」

公孫勝はくつくつと笑う。公孫勝がいう『仙界』とは言葉通りの場所ではない。しかし、それをここで言うつもりはない。

「次は俺か？　俺は『神行法』の戴宗。奇兵隊の諜報部隊を率いている」

戴宗は酒を徳利から直接飲みながらそう言った。神行法とは、戴宗が公孫勝から教えてもらった高速移動方法。これにより、わずか数日で大陸の端から端まで移動できるだけの速度を手に入れることができた。そして、戴宗の部下は全員がこの術を会得している。だからこそ、反董卓連合の際に野盗の同時決起が成功したのだ。

「『智多星』の呉用と申します。奇兵隊の筆頭軍師でもあります」

呉用は柔和な笑みを浮かべて一礼。しかし、その閉じているとも勘違いしてしまいそんな目の奥には公孫賛たちをしっかりと監視するような光があった。

「『官賊』の宋江だ。一応は、奇兵隊副長でもある」

「『官賊』？」

宋江が副長であることはいいのだが、その二つ名に疑問を抱く二人。しかし、それは高順から答えが齎された。

「そいつは元々役人だ」

つまり、役人『官』から『賊』に堕ちたから『官賊』。宋江が副長として慕われ、高順からも信頼されているのは『官』の時代に培った実力のおかげなのだろう。しかも、そのおかげで『特徴がないのは須らく高い水準であるから』とまで評されている。要するに公孫賛の上位互換的存在である。

「ま、ウチも一応自己紹介させてもらうで？　ウチは『神速』の張遼や！」

親指を立ててにこやかに挨拶するのは張遼。しかし、すでに出来上がっているのか若干目がトロンとしている。

「……『人中』の呂布」

挨拶だけすると再びモグモグと食べ始める呂布。その顔は実に嬉しそうである。そしてその横の陳宮は呂布に肉を奪われて落ち込んでいる。

「私は楽進です。呼び名は…その…まだありません」

凧はそういうが実際は本人が知らないだけであり、実際は？水関での戦闘においてほぼ一人で呉軍を圧倒したから『破軍』という呼び名がついていたりする。

「小生は…『天眼』の司馬懿」

いつもの含み笑いのまま玄崩は口を開く。天眼とは、司馬懿が人間観察を常としていたためどのような性格の人間がこの後どのように動くか、などある程度の未来予測を経てられるようになったからついた名前である。実際、この拠点を奪った際にも活躍している。

「そして、こいつらは…董卓と賈？だ」

「「え!?!」」

「ちょっと高順!」

「高順…さん？」

華雄に高順用の追加の酒を持ってきていた賈？と董卓は突然の高順

の言葉に絶句し、公孫贇たちはそんな二人を見て混乱しきっている。

「別にばらしても構わんだろう？ 言わないまま下手に探られるのは面倒だ。それに、国外にバラそうというなら殺せばいいだけだろうに」

そう言っ指を鳴らすと天井裏から黒ずくめの人間が降り立った。戴宗の部下である。要するにバラそうとするなら速攻で口封じをすればいいだけの話。

「いや…アタシもあの連合軍には違和感を持っていたから別に董卓が生きていたからってばらすつもりはないけど…娘じゃなかったんだ…」

「うわゝすつげえキレーっす」

何より『あの』袁紹の檄文。裏があるだろうと思っていたので、別にばらすつもりはない。何より死にたくはない。公孫越は董卓を見てそうこぼした。

「次は私か？ 『比翼』の華雄だ。お前らに言うておくことがある。高順に不必要に近づくことは許さん」

「いや…別にそんなつもりはないけど…」

殺気を隠すこともせず公孫賛を睨みつける華雄。それに驚きつつも、とりあえず反論しておく。

「そして俺が高順だ。確か呼び名は『紅蓮の奸雄』と『盗賊王』だったか？」

紅蓮の奸雄は、その異常なまでの体温から作り出す紅蓮の炎を自在に操る様から。盗賊王は丁度この国を奪った時から広まった名前。元々、涼州で賊を従えていたため、この呼名は一気に広まった。しかも、本人が気に入っているためより広めようとしている。

「『名』とは使い様だ。呂布の名が天下無双とされ、数多の将兵が畏怖するように、な」

「あゝつまり…その呼び名を有効に使ってこと？」

「クククツ。当然だな。有効活用できるものは使わなければ損だろう？」

高順はそれはそれは楽しそうに笑っていた。

「宋江。お前が公孫賛についてやれ。互いに不得意がない身。色々教えやすいだろう」

「御意。それと、筆頭。先ほど、劉表の下に放っていた密偵より韓嵩が反乱を起こしそうだと」

「ハッ。あの小物か？　なら丁度いいか。全軍通達！」

高順が盃を握りつぶし叫ぶと、今まで宴会状態だった空気が一気に引き締まり、酩酊状態だった張遼も顔を引き締めている。

「これより荊州を奪う。劉表とその部下たちの身柄の保護を最優先。間違っても、民に被害を行かせるな？　俺らの領土となるんだ……行け」

その言葉と共にその場に居た全ての将が部屋を出て行った。そして、一気に静かになったこの場所には新しい盃に酒を注いで飲んでいる高順と華雄、そんな二人とのんびりと食事をとっている董卓とその横でため息を吐いている賈？。そして状況が理解出来ない公孫賛と公孫越、その二人の横に立っている宋江。

「宋江。その二人も連れて行ってやれ。俺らのやり方を存分に見せてやれ」

「御意。さて…そういう事だ。ついてこい」

未だ状況が把握できない二人はとにかく宋江について行くことにした。そして、彼女たちは見る事となる。高順が掲げる『弱肉強食』を。

第15話 盜賊王（後書き）

高順の二つ名はさやつるんさんの「賊王」を基に「盜賊王」としました。その他の呼び名は戴宗などの梁山泊メンバーはそのまま。宋江は史実で官僚だったのでそこから。華雄と風と玄崩に関しては作者の厨二病がブーストかった結果。

そして、次回はいよいよ高順が国を興します。名前は……まあ、次回のお楽しみということで。

ちなみに、玄崩の武器はるる剣の外印が使っていた斬鋼線です。外印は好きだったのに、仮面が取れると一気に小物になったのがなあ……。

それと、抜けていたお話を追加したので見てやってください。ちなみに、？水関で高順が出撃したシーンです。何故、ここを抜かし……し……

第16話 興国

劉表が高順と接触したのは高順が現在の拠点を奪った直後の話。劉表は最近力をつけてきている孫策たちを危険視していた。

「我らを仇と狙うが…そもそも攻めこんできたのはあちらの方だ。勝手に攻めこんできて討ち取られたら仇だと？ 逆恨みも甚だしい」

無論、そのせいで孫呉が衰退し現在の状態になっているため、それを將兵の共通の目的にして結束を高めている要素もあるので仕方がないことでもある。『孫呉にとっては』であるが。

「戦場で死ぬのは当然のこと。それを一々恨んでも仕方がないだろうに…。というか、家族を殺されたのは奴らだけではない。むしろ、あの戦争のおかげで高祖や数多の將が死んだ。奴らはこの荊州に必要な奴だったというのに。益にならん戦ほどやる必要はない」

「劉表様」

劉表を諫めたのは黄忠である。そして劉表は思い出した。あの戦いで高祖と共に黄忠の夫である韓玄も死亡しているのだ。

「む、紫苑か。すまん。お前の前では言うべきではなかった」

「いえ。そこではありません。夫の事は…受け入れています。しかし、どうなされるのですか？ 孫策は着々と袁術から独立する力をつけています」

黄忠が考えるのは荊州の平和。言い方は悪いが、孫策たちが攻めこんでくれば民も死ぬだろう。劉表は目立たないと言われているが領民には慕われているのだから。それに、娘の事もある。亡き夫との愛の結晶である娘。彼女も攻めこまれればどうなるか分からない。

「……紫苑。少し、頼まれごとをしてくれないか？ 『盗賊王』に……荊州を明け渡す」

「劉表様！？」

「高順は弱肉強食を旨としているが、領内の様子を探らせたとこ…善政を敷いている。恐らく奴の掲げる『弱肉強食』とは『弱者は強者に従うべき』という物だろう。儂の私見だが……従うならばそれ相応の権限を与えらると思う」

『盗賊王』などと蔑まれているが、奪った国をしっかりと運営し、周囲の盗賊たちを支配下においてるのは事実。そしてその盗賊た

ちは反乱などを起こしていない。噂では、すでに盗賊から農民などに鞍替えして子を成している者も居るという。つまり、手綱をしっかりと握ることが出来ているということ。

「最悪、儂の首を引換にする。劉？は自力で動くことも俟ならんが、お前たちの補佐で動いていけるはずだ」

息子である劉？は孫堅迎撃戦において腰に矢傷を受け、自分で歩くことは不可能な体となった。しかし、そもそもが文官向きだったこともあり内政面においてはこの国を背負って立つに相応しいだけの力量を持っている。

「紫苑。頼む……儂がすべての責任を取る。荊州の民の為に……」

「……全て劉表様のお心のままに」

そして、黄忠は『盗賊王』の元へと向かった。

「ほう？ 荊州をやるから庇護を？」

目通り自体は簡単に許された。そして、その途中で見た領内は悪名高き『盗賊王』の治める国にしては賑わっていた。そして、かすかに希望をいだいた。もしかしたら、と。

「ふむ…荊州ねえ。まあ、この領地も若干手狭になっていたからな」

高順は煙管を取り出し、左手に持った種を熱で燃やすと吸い始め、ふと天井を見上げた。

「そっぴいや劉表は孫呉に睨まれていたな？ 確か…母親を殺された恨みだったか？」

「——ッ……はい。それも高順殿に庇護を求める理由の一つでありまして…孫呉は『孫堅の無念を晴らす』という部分で結束しているところもありまして…」

無論それだけではないが。しかし、それで結束を高めているのもまた事実。

「クツクツク。このご時世、そんなことはごまんとあるだろうに。」

しかし、死者を掲げなければ結束できないようでは、な」

高順は死んだものに対しては何も思わない。無論、糧にする部分は糧にするし、死んだ部下のことはどのような思惑があれど悼む。しかし、それだけ。それを結束のお題目に掲げることはしないし、必要以上に悼むことなどしない。

「いいだろう。荊州は俺達が頂く。だが、統治は変わらず劉表が行え」

「その上に貴方が君臨する、と？」

「そうとってもらって構わん。俺は使える人間は誰であろうと使う。そう劉表にも伝えておけ」

これが、高順と劉表の間で交わされた契約。そして、これをよく思わない韓嵩が反乱を起こしたのだが――。

「戴ちゃん遅いで！」

「そんな事言ってもねえ……ま、やるだけやるか」

反乱を起こしたわずか数刻後には、『神速』と『神行法』の名に相応しいだけの行軍速度を持つ張遼と戴宗に出鼻をくじかれ――。

「これが私の『二重の極み』だ！」

「ふうむ。随分と簡単にかかってくるものだ」

拳を当てた瞬間に氣を相手に流し込むというやり方で二重の極みを会得した凧。その趣味が講じて先読みが可能になった玄崩の斬鋼線により次々と肉片に変わっていく反乱軍。そして、その四人の後ろからやってきたのは宋江率いる本隊。

「見ておけ。公孫贄、公孫越。これが筆頭の掲げる『弱肉強食』からあぶれた者の結果だ」

それは一言で言うならば蹂躪。圧倒的武力で齒向かう者たちを殲滅する蹂躪。公孫贄たちは顔を青くしている。命乞いをしていた兵がいた。しかし、凧により肉塊に変えられた。宋江は公孫贄たちに濡れた手ぬぐいを渡すと口を開いた。

「命乞いをしようとも…齒向かったのだ。こうなるのは当然だ。黄巾の乱でも同じだっただろう？」

「それは…そうだけど」

違いは正規軍か否か。それに、反乱を起こしているのだ。失敗すれば死ぬことすら分かっていたはず。

「筆頭曰く『弱者は強者に反抗する権利を持つ』らしい。しかし、反抗すれば潰されることも覚悟しておくべきだとも言っていた」

勝どきの声が聞こえる。民間への被害は恐らく皆無。あっても、せいぜい城壁が壊れたとか些細なものだろう。そして――。

「こうして会うのは初めてか？ 『盗賊王』高順だ」

「まさか…その呼び名を普通に使っているのには驚いたよ」

「折角付いた名前は有効に使わなければ損だろう？」

傍らに華雄を侍らせ劉表と応対する高順。劉表は『盗賊王』と呼ばれている人間がどの程度の者か見てみるつもりだった。しかし、実際に会ってみるとかつて反董卓連合で合間見えた曹操などの英傑と同じように覇気に溢れていた。

「さて、劉表。お前は俺達の保護を求めた。そして、俺らはそれを受け入れた。だが、変わらずこの統治はお前らに任せる」

いわば、漢と地方太守の関係に似ている。そして、高順は宋江にあるものを持つてこさせる。

「それは？」

「なあに…折角だからな。国を興すことにした」

そして、宋江と戴宗により広げられた旗にはただ一文字。

『戈』

「戈^かとは……国名にするには物騒じゃないかな？」

「だが俺達思想を表すに相応しい」

戈とは武器。それを国名にするということは、圧倒的武力で他者を併呑するという意味。そして『武』とは『戈』を『止める』と書く。

「つまり、何者も自分たちを止めることはできないと?」

「さあ? 中には止めることができる奴が居るのではないか?」

高順はそう囁く。しかし、劉表はこの男を止める事ができるのはこの男と同じく手段を選ばない者か、それこそ反董卓連合以上の勢力での力押しでしか無理なのではと思っていた。

「さて…では、これから頼むぞ?」

「……ああ」

劉表としては自身が更迭されることも、首を斬られる事も覚悟していたのだが、今までと変わらずに統治して行けと言われた。これはありがたい事でもあったが、逆にこの男の真意が見えなかった。だが、高順は笑う。

「反乱を起こしたければすばしい。その代わり…俺は潰すぞ?」

使うものは使う。歯向かうものは潰す。これこそが高順の掲げる『弱肉強食』の真理。劉表はそう確信した。

権力を持ったものにありがちな疑心暗鬼。この男はそれを抱かないだろう。いや、別にいなくても関係ない。それで反乱を起こそうとも、敵国と繋がるうとも構わないのだ。逆らえば須らく潰す。そして、従う者には最大限の『褒美』を与える度量。ある意味で分かりやすい男。

「（だからこそあそこまで人が付いてくるのか）」

人は圧倒的な覇気などを持つものには従うという。これは後の世で「カリスマ」とされる天性のもの。高順にはそれが備わっていた。いや、むしろ会得したというべきか。

「……とにかく、私たちは君に従う。一応、連絡役として私の腹心である黄忠を君の指揮下においてくれ」

こうして劉表はその権力を保ちつつ高順の下へとついた。そして、高順が創り上げた国『戈』の名前は大陸中に知れ渡った。しかし、同時に今までの『傭兵集団』という立場を崩すつもりは無いように、『傭兵国家』という体裁を持つことになった。

「……危険。でも、使い道はある、か」

霸道に行く少女は危険視しつつも、かの国の強大さを鑑み、しばらくは様子見を。

「劉表が下ったのね……遅かったか」

孫呉独立を望む女は劉表が先手を打った事に悔しさを滲ませながらも、次の行動を考える。

「ご主人様……」

「ああ……とにかく、情報を集めないと」

ある意味で高順の掲げる思想と真逆の思想を掲げる天の御使いと心優しき少女はとにかく情報を集めることを決めた。

「これがこの外史の流れ？」

「そうだ。すでにこの外史の流れはお主が見てきた『天の御使いを中心』とする外史ではない。筆頭…高順を中心とする外史だ」

戈の城下町の路地裏で二人の男が向い合って立っている。片方は筋骨隆々でビキニパンツというこの時代ではあり得ない服装の男『貂蝉』。そして、もう片方は高順の部下である公孫勝。そして、公孫勝の口調は普段のものとは違っている。

「でも、まさか貴方が肩入れする存在ができるとは思わなかったわ。貴方、管理者の間でも人嫌いでは有名だったでしょ？」

二人は無限に広がる外史を管理する存在であり、顔見知りでもある。貂蝉は数ある仲間の中でも他人嫌いでは有名だった公孫勝が自分にとつての北郷一刀のような肩入れする存在を見つけ、実際に行動しているのには驚いているのだ。

「なあに……儂のような偏屈者にはあのような者が丁度良い」

類は友を呼ぶと言わんばかりの口ぶりに貂蝉は痛む頭を抑えていた。

「儂も過度な干渉はせんよ。全ては成るがままよ」

そう言い残し公孫勝は姿を消した。残された貂蝉はしばらく考えた後、自分も好きなように動くことにした。といっても、せいぜいが楽しく旅を続ける程度だが。

「ご主人様。天の御使いという肩書きに囚われていたらすぐに高順に足元を掬われるわよ？」

この忠告が聞こえないことは分かっている。だが、それでも言っ

おきたかった。自己満足だとしても。

第16話 興国（後書き）

国を起こしました。国名は星海の来訪者さんのアイデアを使わせていただきました。

現在、高順は荊州とその周辺を抑えました。つまりは、いい感じに大陸の中心を奪ったのです。劉備たちが蜀に行くには、ここを通るしか無いな。うん。

そして、公孫勝は貂蝉たちとご同業。でも、そこまでその設定は重要ではないな。

第17話 再編

高順が「戈」を建国して数日が経った。建国したとは言え、民間レベルで何か変わるわけでもない。せいぜい荊州組が戈の軍事力として併呑された程度である。しかし、これに伴い戈の軍事編成は大幅な変更を行った。今までは、高順配下の奇兵隊が出撃、旧董卓軍や周辺の盗賊たちは防衛などを行っていたのだが、荊州組が編入されたことで人員に余裕ができたため軍事編成の再編を行うことにしたので。

まず、変わらず頂点は高順。そして、その直属の独立部隊として凧と玄崩の二人の部隊を配置した。これは、いわば高順の親衛隊の役割を持っている。そのため、凧を隊長とした実働部隊と玄崩を隊長とした医療・工作部隊の二つの部隊が統合されていた。玄崩はその司馬家に居た頃のネットワークを使い、常に最新の医療法や薬を手に入れていた。それを公孫勝の持つ『仙人』としての知識を使い、高順専用の薬を作り上げていた。その結果として、玄崩は奇兵隊の医療面に置いて頂点に立った。医療面の頂点に立つのはある意味で高順をも従えることができる。といっても、本分は凧の補佐なので本人はその気はない。

「反抗する気はない。それよりも、凧の成長を見ておいたほうが私としては得だと思う」

そう言つて「風觀察日記」と書かれた本を見ている玄崩。そこには、
風の成長過程が事細かに書かれている。それこそ、後の世でいうス
リーサイズとかが。それを愛おしそうに読んでいる玄崩を思い切り
殴る風の姿はもはや日常茶飯事である。

そして高順の直下に立ち、彼の意思を軍部と内政部に伝えるのが宋
江。そして、その補佐に公孫賛がついた。この二人の息の合い様は
それこそ昔から一緒にやってきたのではないかと思うほどにぴつた
りだった。軍事も内政も広く担当できる能力を持つ二人。さらに言
えば、周囲の調整役・潤滑油として動いてきたため大体ではあるが
互いの考えが把握できているらしい。宋江が全体的に動き、宋江が
見逃しやすいところを公孫賛が補佐する。

「正直言えば彼女が補佐についてくれて助かっている。規模が大き
くなるとどうしても目が行き届かない部分があるからな」

「宋江は…いい奴だよな。それに、なんでだろ。ここ…すごく居心
地がイイんだ」

今まで公孫賛を評価しなかった人間がいなわけではない。しかし、
良くも悪くも「並」・「普通」が彼女にくだされた評価だった。勿
論、周りを見れば有能な人間はたくさん居たので公孫賛自身は愚痴
りつつもそれを受け入れていた。だが、ここには公孫賛の上位互換
とも言うべき宋江がいた。そのため、宋江より劣るとは言え軍事も
政治も手広くやれる公孫賛の評価が上がるのは当然でもあった。

「ここは普通とか並とかは関係ないな。判断基準は強いか弱いかわけだ。評価がいいということは他の奴らから見れば強者になるんだろっよ」

とは高順の談。とにかく、今は宋江の補佐を頑張っているようである。

そして、旧奇兵隊構成員の場合、公孫勝は軍師専門。戴宗は諜報専門という風に分かれた。しかし、コレに関しては以前から徐々に移行していたのでそこまで混乱はなかった。

「まあ……いいんじゃないのか？」

「つーか、俺としては諜報専門になったのは色々楽でいいけどね」

次に、旧董卓軍だが張遼や呂布は前線に出ることになり、賈？や陳宮は軍師や内政などに参加することになり、董卓は高順の指示で再び王としての教育が開始されている。これに関しては高順の思惑がある。

「せっかくの逸材だ。使わなければ損だろう。それに……態々、大陸を巻き込んだ茶番の被害者がいるんだ……策は考えないとなあ？」

どうやら策を水面下で実行しているようである。

荊州組は、そもそもかつての孫堅迎撃戦の際に高祖や韓玄などの主だった将が戦死していることもあり、大將軍の黄忠と若手筆頭の蔡瑁を中心として部隊を再編し、現在では鍊度も上がり、かつての荊州軍の様相を取り戻しつつある。

そして、高順配下の盜賊たちであるが今までと変わらずに戈周辺のあらゆる場所に砦を築きそこに小さな村を作り生活している。荊州が手に入ったことで、そちらの方にも移住しており、戈の城を落とすには大軍が必要。そして、大軍が通れるような街道を使用するには全てこの砦たちをすべて落とさなければならぬように配置されている。

「小さい道には山賊共を配置、水路には水賊を。俺達が使つてある策は相手も使つと思え」

高順はそう言つて防御を固めさせた。それでいて、商人などが動きやすいように街道を整備させたり、盜賊たちにその護衛をさせたりするなど、国を富ますための策も施行していった。

これが、現在の戈の軍事面。内政面は、荊州を併呑したこともあり再考中である。しかし戴宗の部下が幽州から持ち帰った『天の御使い』が齎したという様々な知識を集めて議論を交わしているため、

いずれ内政も成功するだろう。

「だが…それは他の国も同じ、か。恐らく…魏の曹操。呉の孫策が有力か？ いや、天の知識という厄介なものを持っている劉備軍も侮れんか」

袁紹と袁術は厄介な存在から除外してある。各地に散らばっている盗賊からの情報では袁術は早くても数ヶ月のうちに、袁紹は早ければ数日で壊滅するだろうという。袁紹が数日なのは、公孫賛軍を落としたのと、現在戦を仕掛けている劉備軍との戦が好調な為、劉備軍を落とした後に勝ちに乗じて曹操に戦を仕掛けて返り討ちという予想が立てられている。

「しかし、依頼も大きなものはなくなったな」

「仕方ないだろう——はむ——ん——国を作ってしまったんだ。『傭兵国家』を謳っても袁紹のような馬鹿じゃない限り信じないだろう？」

自室でいつものように華雄を抱きながら大陸情勢を鑑みる高順。依頼が少なくなった理由は華雄の推察通り。悪名高き『盗賊王』を警戒しているのだ。と言っても、小さな領地を持つ連中は逆に庇護を求めるものもある。高順が盗賊たちを配下にしており、齒向かわなければ領地を保持できるということが劉表の一件で知れ渡ったため、死ぬよりは、領民の安全のためにと考えるものがいるのは当然とも

言える。

「まあ、商隊護衛などは盗賊たちにやらせておけば充分か」

商隊護衛は基本的に盗賊たちが行っている。その報奨金は、一割を高順に上納金として納め、残りはそれぞれの陣地の維持費などとして使用している。それでいて、武器や食料などは戈から送られてくるため盗賊たちからすれば、このような好条件なのに高順に忠誠を誓わないというのはあり得ないと考えられている。

「さて……後は宋江たちに任せるか。華雄、寝るぞ」

「ああ」

高順は基本的に大まかな指示を出すだけ。それでいて高順が頂点なのは変わらない。それは、高順が『強者』であることが変わっていないからである。およそ一刻しか戦えないとは言え呂布をも下す実力を持つ者が弱者であるのか？ということである。

「クックック。小生の『風觀察日記』は早くも五冊目。随分と気張っているではないか」

「……その名前はやめてもらいたいが、お前にいくら言っても無理だろうな」

城から少し離れた森の中で修行を行っていた風とそれを觀察して書き留めている玄崩が居た。ちなみに、風が諦めているのは『いくら破ろうとも次々と出てくる日記・どんなに殴ろうとも決して書いた内容を忘れていない玄崩の頭脳』が理由である。体重などを知られているのは女として許せないが、それを誰に言うわけでもないため半ば放置。

「だが、お前は鍛えなくてもいいのか？」

「小生は頭脳労働が専門でな？ まあ、戦う場合もあるがその場合は——こんな感じなので普段の生活で鍛えられるのだ」

右手を振るとそこから斬鋼線が飛び出し、置かれていた材木を全て薪の形に斬り裂いた。斬鋼線を扱うのに必要なのは指の繊細な動作

と腕の筋力。武官たちの鍛え方とは違う鍛え方と説明したらすんなりと納得した。それも理由の一つだが、玄崩としては風を観察できないためでもある。欲望に忠実な男である。

「しかし、そろそろ領地を失いそうな奴が出てくるな」

「？　　どういう事だ？　　白蓮殿などではないのだろうか？」

風の疑問に玄崩は自身のネットワークから得た情報を纏めた結果であると告げ、その結果を話し始めた。

「劉備たちは袁紹から逃げるらしい。幽州の城下町に広まっていた噂らしいが…信憑性は高い」

そして、その推測は正しかった。数日後に、戈の幽州方面の砦に大量の民を引き連れた劉備軍が現れ、蜀へと向かうために領内の通行を許可して欲しいと言ってきたのだ。

「……俺達だけでは判断はつかない。筆頭たちに言いに行け」

砦の責任者は、そう言って劉備や北郷、関羽、諸葛亮を高順がいる城へと案内した。彼女たちは、関羽を狙っている曹操がいる魏よりも高順の方が交渉しやすいと判断した。しかし、彼女たちは高順が

言っていたはずの「弱肉強食」を理解していない。

彼女たちは、無駄な被害を出さないためと思っているが高順からしてみれば「敗残兵」であることに変わりはない。交渉次第では何とかなるかも知れないが、高順にとって劉備たちは弱者なのだ。故に――。

「ほう？ 領地を通りたい？ 構わんぞ？ ただし……天の御使いを置いていてもらおうか」

弱者は強者に従わなければならない『弱肉強食』を遂行する。

第17話 再編（後書き）

公孫賛などの真名交換はすでに済ませていると思ってください。ただし、高順と華雄は真名で呼びません。理由は、二人には真名が無いから。

今回は、説明回でした。なんか「ここ変じゃね？」とかあったら教えてください。修正しますので。

次回は、劉備たちの交渉などです。

第18話 交渉及び依頼

「そ、そんなこと出来ません！」

劉備や関羽はそう言って反論する。彼女たちにとって北郷一刀という存在は、『ご主人様』だけではなく『愛する人』だから。しかし、彼女たちは分かっているのだろうか？ 高順がただ一言告げるだけで、彼女たちもそして彼女たちを慕って着いてきた者たちも死ぬことになるということ。

「そうか。なら、死ぬか？ 前提条件を間違えるな？ お前らは、袁紹と自軍の戦力差を考え『戦わずに負けた』んだ。つまり、お前らは弱者。弱者なら強者に従うのが筋だろう？」

「で、でも！」

「（チツ。ここで、自分が持つ天の知識を全て渡すと言えんもんかね？）」

高順は先程から黙っている北郷を見ながらそう思っていた。高順が欲しいのは『天の御使いの持つ知識』であって『北郷一刀』ではない。だから、知識を貰えば別に『北郷一刀』はいらないのだ。

「お前ら…物を買うには金があるよな？　それと同じだ。何の代償もなく結果が得られると思うな？」

「それは分かっています。でも…」

高順は、劉備をこの場で殺しておいたほうがいいのではと思い始めた。最初はただ単に現実が見えていない子供かと思っていた。しかし、これを見るにこの劉備という少女には『理想』と『魅力』しかない。それ以外は下手をすれば袁紹以下。

「（こいつ…何かが間違っていれば、こいつが黄巾党の中心にいたかも知れんな）」

高順は黄巾党首領の張角と劉備を同一の存在と考えていた。どちらも『魅力』という物のみで大軍を率いる存在。しかも、劉備の方は部下が優秀なため黄巾党のような失敗を擦る可能性は低い。故に、ここで殺しておいたほうが後々のためになるかも知れない。そう考えた。

「はあ……面倒だな。死ぬか？　俺らは『天の知識』さえ貰えればいい」

高順がそう告げると、玉座の間に居た兵士や武将から殺気が発せられた。ちなみに、ここにいる武将は全て旧奇兵隊である。理由は、言わずもがな。

「一人ぐらい死ねば……言うことは聞くだろう?。」

「——ッ」動かないほうがいいと思うぞ? 細切れになりたくないだろう?。」

関羽が青龍偃月刀を構えようとした瞬間に、体ごと何かに縛られた。それは、玄崩の左手の糸。こちらは、拘束などに使用されるもので触れても斬れはしないが、それでも引き千切るにはそれなりの力がある。

「さて…どうする——と言いたいところだが、こちらも貴様ら程度にかまっている暇はない。公孫勝、そいつから仙術を使って知識を吸い出せ。出来るんだろう?。」

「まあ、そういう宝貝はあるがね。使い捨ての上に作るのに時間がかかるからあまり多用したくはないが…まあいいか。どうせ『他人だ』」

公孫勝はそうボヤくと、玄崩に北郷の拘束を頼み、懐から黒い手袋を取り出し右手にはめた。そして、それで北郷の頭を掴むと淡く光

り始めた。

「——ん。筆頭、終わったぞ？」

「そうか。なら、もういい。貴様らに用はない。さつさと領地を通って行けばいい。皆には伝令を送ってやる」

何か文句を言いたそうだが、これ以上この面子と会話をしていると高順自身の精神衛生上良くないので、宋江に目配せをすると華雄を連れてさつさと玉座の間を出て行った。そして、宋江もそれを分かっているので高順が立ったと同時に兵士に命じて劉備たちを無理やり追い出した。ここでは、高順の意向こそ優先されるべきで劉備たちの感情など二の次なのだ。

「大丈夫か？ 私に出来ることは？」

玉座の間を出た高順は歩きながらイラつきを抑えようとしている。

そして、華雄はそんな高順に甲斐甲斐しく話しかける。高順も華雄と話すうちに落ち着いたのか大きく息を吐いた。

「まあ、奴らのことはどうでもいい。それより、これだな」

高順が取り出したのは二つの依頼状。一つは、張勳から。内容は『孫呉から自分とお嬢様の逃げる時間を稼いで欲しい』という物。これには、孫呉のある武将に深い恨みを持っている部下を隊長に派遣しておいた。恐らく、玉砕覚悟で突貫するだろう事は明白であるため、頃合いを見計らい回収するように戴宗に命令してある。

「しかし、仲間の敵討ちねえ。別に、復讐は否定しないが……まあ、それもいいんじゃないか？」

孫呉に深い恨みを持つ部下の名は凌統公績。直刀二刀流の使い手で、攻撃の速度で言うならば恐らく戈の中でも上位。

「この凌統とかいう男。何故、ここに？」

「呉の将甘寧により、仲間の水賊を殺された。元々、凌統が率いていた水賊と甘寧が率いていた水賊は同盟関係にあった。しかし、甘寧が呉に仕官した数日後に不意打ちという形で凌統の水賊が襲われた」

時期的に見れば、過去の精算の為と思われる襲撃。しかし、コレには裏があつた。過去の精算として襲つたのは確かに事実。しかし、主導は錦帆賊の副長の少女。彼女は甘寧を殊の外慕っていたらしく、折角仕官したのに過去の事でそれがふいになれば、と考えた末の行動だつた。

「ちなみに、その女は襲撃時に凌統により八つ裂きにされて甘寧の下へ送られたそうだ。甘寧は知らなかったようだが…部下がそのような行動を取ることを考えられなかったためどちらにしろ甘寧が殺したことには変わらんだろうな」

「ふうん。不幸だな」

華雄は高順と次点で身内以外がどうなるうとも関係ないため別に何も思わない。

「ああ、不幸だな」

そして、高順も何も思わない。凌統は「弱者」だから。まあ、それで力をつけたためその点は評価する。自力で弱者から強者になった者は少ない。

「まあ、あの疾さに対応できるのは…それこそ各国に一人ぐらいじゃないか？」

それこそ『殺して』で鍛え上げた技。それを甘寧に見きれるかと言われれば……。

「……遅いな」

「ぎゃっ——」

それは一言で言うならば死を運ぶ風。圧倒的速さで袁術配下の文官を殺していく。美形な顔立ちなのに纏う空気は幽鬼の如き男凌統公績。彼は、高順の命令で袁術と張勳の逃亡の時間稼ぎを行うのだが、その途中として孫策側に付こうとしている連中の排除を頼まれている。

「張勳、終わったぞ」

「ありがとうございます。それじゃあ、もうすぐ『農民の一揆』が起こると思うので後はよろしくお願いします」

「ああ」

孫策たちは自分たちの行動が読まれていないと思っている。しかし、張勳は典型的な『有能な怠け者』である。特に袁術に関しては補正がかかる。

「しかし…孫策たちも道化だな。袁術を傀儡にしている連中を一掃させる役割を知らずに果たしているとは」

「クスクス。あんな連中のことなんてどうでもいいですからね。私はお嬢様さえ無事ならそれでいいですし。それじゃあ、手筈通りに頼みますね」

そう言い残し張勳は姿を消した。恐らくは、農民の討伐に袁術を連れて行き、そのまま逃げるのだろう。凌統はそれを見届けると部下に命じてすぐさま動き始めた。

「甘寧を殺せば御の字。殺せずとも依頼を果たせば充分」

そして、遠くの方から雄叫びが聞こえてきた。

「全軍……行動開始」

「「「御意！」」」

「ふん。孫策たちも可哀想だな。それで、もう一つの依頼って？」

華雄は高順に体を預けながら聞いてみた。すると高順はもう一つの依頼状を広げた。そこに書かれていたのは――。

『我が国の将である嚴顔、魏延が筆頭となり劉備を呼び寄せた。よ
つて、その迎撃の為に力を借りたい。張任』

劉備たちが目指す蜀の武将からの依頼だった。

第18話 交渉及び依頼（後書き）

高順は自身の精神衛生のために手っ取り早く知識だけを奪いました。高順にとって天の御使いよりも知識のほうが優先順位は上なので。

そして、新キャラ凌統。モデルは四乃森蒼紫。仲間を失って復讐といえはこいつでしょう。厳密にはちよつと違うけどね。

そして、蜀の方にも動きがありました。

とりあえず、待て次回！

第19話 復讐と忠義（前書き）

Q、なんでここまで遅くなった？

A、納得いかなくて書きなおししまくった。実は、まだ手直しでき
るのでは？と思っている

こんな感じです。

第19話 復讐と忠義

「冥琳！ 袁術軍は！？」

「まだ動きを見せないな……」

呉はとうとう袁術から独立する機会を得た。農民の一揆を誘発させ、それに乗じて袁術たちを討ち取るという策。それは上手く行った。
『ここまででは』だが。

「周瑜様！ 城に旗が……『悪』と『弱肉強食』の旗が！」

城の外壁に立てられた旗は『袁』ではなく『悪』と『弱肉強食』の旗。それは、戈を創り上げた『盗賊王』高順の旗。

「しまった。気づくべきだった。張勳は典型的な『有能な怠け者』だ。もしものために傭兵国家に依頼を出しておくこともありえた！」

「まさか…全部気取られていた？」

「可能性はある「まあ、そうだな」貴様は」

城から現れたのは凌統とその部下や紀霊を始めとする『傀儡にされていた袁術が生き延びることができるなら』と死兵になることを許容した連中。彼らは、袁術が傀儡であることに気づいていた。だから、張勳が袁術を逃がす計画を知ったときにそれに協力するといったのだ。確かに袁術は何も知らない暗愚で一部の者達の傀儡。だが、それを助けようとしなかったのは自分たちのせい。だからこそ、最期くらいはと凌統の指揮下に入ったのだ。

「さて…紀霊將軍。そちらの指揮は任せるぞ」

「任せていただく。最期の奉公だ……やるさ」

この戦はこちらが全滅しようが結果は自分たちの勝ちなのだ。張勳が逃げこむ先は大体分かる。戈だ。あそこなら『有能な者は例えよそ者でも取り立てられやすい』ので、袁術至上主義の張勳ならばすぐに上り詰めるだろう。つまり、張勳と袁術が戈に逃げ込める時間を稼げばこちらの勝ち。

「さあ……行くぞ。我らの力を見せてやれ！」

紀霊の咆哮と共に袁術軍は孫呉に雪崩れ込む。策も何もあつたものではない。しかし、だからこそ呉軍を混乱させることができた。さ

らに言うならば全員が死兵と化しているため最低でも相打ちの状態になっている。

「さて…俺は俺の目的を果たすか。甘寧は…あそこか」

戦場の中で「甘」の旗を見つけた凌統は直刀二本を逆手に持つとその旗の下へと駆ける。邪魔する兵は全て切り捨てて。

「甘寧イ！」

「え…な、海覇！？」

「貴様に真名を呼ばれる筋合いはない……その首もらうぞ！」

直刀を回転させながら甘寧に飛びかかるが、周りの兵に阻まれる。そして、周りを見渡すと味方はおらず孤立無援・四面楚歌の状態。だが、凌統にとってはそれでも構わない。自分の目的は甘寧の殺害。それさえ果たせれば死んでも構わない。故に――。

「桜舞」

ゆらゆらと揺れながら移動をする。それはまるで風に流されている

桜の花びらのように緩急がついた不規則な動き。それにより距離感などがつかめない兵は翻弄され、凌統に斬られ、反撃しようとすれば兵と兵の間に入り込み同士討ちを誘発させている。

「待て！ 落ち着いて「そうしている間にこちらは殺せるぞ？」くそ！」

敵陣で味方はいない。だが、逆に考えればどう暴れようとも味方の被害は自分のみ。つまりは、どう動こうとも敵に被害を与えることができるのだ。

「何としても止めなさい！」

「やってみる。やれるものならな」

孫策が兵士を鼓舞するがそれより速く凌統は駆ける。兵士の間を駆け抜け、すれ違いざまに首を掻く切る。そして、ふと旧袁術軍の方を見るとすでに50人程しか残っていない。

「……紀霊は……ほう？ 中々やるな」

元より死ぬ気だった紀霊は全身に矢を浴びてもまだ得物の三尖刀を振るっていた。だがそれももう終わり。背後からの不意打ちで首を

刈り取られた。

「……終わり、か。まあ、もう逃げきっていることだ。問題はあるまい」

「貴方はどうするの？ まさか…逃がすとても？」

そろそろ帰るべきかと思った凌統の考えを見ぬいたのか孫策が凌統を囲むが凌統は薄く笑うと再び『桜舞』で動くと甘寧の懐に入り込んだ。

「逃げるつもりなど毛頭ない。俺は貴様さえ殺せればそれでいい。お前ら孫呉にはこの行動について何も言われる筋合いはない」

何故なら孫呉も『孫堅の無念を晴らす為』と掲げているから。凌統の行動を否定するならば孫呉の劉表に対する言動も否定しなければならぬ。

「貴様らも劉表が気に入らないから殺す。それでいいではないか。だから、俺も甘寧。貴様が許せないから殺す。ただそれだけだ」

「海霸…」

かつて共に切磋琢磨した友人が自分をここまで敵視する。自分自身に対してここまでもの憎悪を浴びせられた甘寧は一瞬戸惑った。そこに付け入ったのが凌統。

「……もらった」

右手の直刀を振り下ろし、甘寧の顔を斜めに切り裂く。甘寧は体に染み付いた反射で一気に距離を取るが、そのまま膝についてしまう。

「思春！ 離れなさい！」

孫策が雄叫びと共に凌統に斬りかかるが、凌統も後方に下がる。

「…毒でも塗っておくべきだったか」

「アンタ…」

毒でも塗っておけば確実に殺せたのにと呟く凌統に孫策は腸が煮えくり返る程の怒りを感じるが、凌統は平然とそれを受け止めている。

「おかしいことを言う。どのような手段をとっても復讐は果たす

べき。貴様らはそう思っているからこそ劉表を潰す。その足がかりとして袁術を騙し討ちしたのではないのか？」

孫策たちは何も言えない。復讐で繋がっている部分もあるため、反論をすれば大義名分を失うのだ。凌統はその間も甘寧を睥睨している。刺し違えてでも甘寧を殺すという意味が見えている。

「海覇。筆頭からの通達だ。すぐに城に戻るようにだ」

「……了解」

それは孫呉の兵が誰も気づかなかった。全身を黒で包んだ男らしき人間は凌統に通達を伝えると再び消えた。いや、消えたというよりも『ものすごい速さで走り去って』いった。

「今のは……」

「ふん。甘寧……その命、暫く預ける。だが……必ず殺す」

凌統もそれだけ言い残すとその場から掻き消えた。だが、遠くを見ると荒野を馬と同等の速さで駆けている。

「……盗賊王の部下には仙人がいるって噂は本当か」

周瑜の呟き。それは、高順は仙人を擁しているという噂を真実と断定した呟きだった。

「……だが、付け入る隙はあるはずだ」

だが、まずは混乱している兵士をなだめなければならぬと孫策に歩み寄る周瑜だった。

「全軍……負け戦だが……我らの忠義を篡奪者たちに見せてやれ！
奴らの理想を穢してやれ……我らの血を、肉を奴らに浴びせろ！」

「「「「「「「「「「「「「「「」

「斑様。芽衣にいい考えがあります。奴らの頭を一つ潰せばいいんですよ」

「いいだろう。戈にはすでに依頼は出した。そちらとの連携を取れ」

「はい。任せてください。裏切り者の敵顔たちも一緒に潰しますよ」

ここは蜀。現在、戈を通過した北郷率いる劉備軍が敵顔や魏延を仲間に引き入れ『暗君劉璋を打ち倒し、民を解放する』という大義名分のもと戦闘を繰り広げていた。そして、すでに劉備軍は蜀の首都成都まで迫っており、防衛するのは張任率いる者たちだけ。そして、張任の右腕である王累が動こうとしていた。

「山道だから奇襲がやりやすい落鳳坡……ま、上手くやれば誰か死ぬでしょう。芽衣としては敵顔を殺したいな。あいつ、斑様に色目使って鬱陶しかったからな」

張任たちは負け戦と分かっている。だが、それでも篡奪者や裏切り者に一矢報いるくらいはする。そして、何よりも張任にとっては『暗愚だからと長年目をかけてくれた主を捨てて、自身の出世のために篡奪者を手引きした』敵顔、魏延たちは許せる存在ではない。

「奴らには絶望を与えてやる……せめて劉備軍の中枢にいる人間を殺す」

張任は自身の槍を持ち指示を出す。張任の用いる旗には『烈士』の二文字が描かれていた。

第19話 復讐と忠義（後書き）

今回は、張任軍&戈VS劉備軍ですが、戈は基本的にサポートじゃないので、実質は張任軍VS劉備軍です。

そして、何気に雛里に死亡フラグが建っている。落鳳坡的な意味で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4548p/>

悪人無双～高順伝～

2011年11月7日14時07分発行